

満州語資料による満州語及び漢語の通時的音韻変化の研究

著者	山崎 雅人
学位授与機関	Tohoku University
URL	http://hdl.handle.net/10097/54286

滿州語資料による滿州語及び漢語の通時的音韻變化の研究

山崎雅人

満州語資料による満州語及び漢語の通時的音韻変化の研究

山 崎 雅 人

目次

序説	-----	1
第一部 満州語音韻の研究		
第一章 満州語における母音 -i- の弱化と軟口蓋閉鎖音口蓋垂音閉鎖音及び両唇閉鎖音の摩擦音化について	-----	17
第二章 満州語文語における変異形について	-----	33
第二部 漢語音韻の研究		
第一章 満州語音訳漢字から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化—『大清太宗文皇帝實録』を資料として—	-----	60
第二章 借用語表記から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化—『〔満文〕大清太祖武皇帝實録』を資料として—	-----	78
結語	-----	95
付録	-----	98
文献	-----	108

1.1. 満漢対音

本研究では、満州語資料に基づく音韻の通時的な研究を行う。すなわち、漢字で表音される満州語文語の文献に記された満州語の音韻の変異と、他言語の研究に満州語の資料を利用する例として、漢語の音韻変化を漢文史料と満文史料の満漢対音に基づいて論じる。

ひとつの文化が他の異質の文化と接触することによりその個性を自覚する契機となる例は少なくないが、言語の歴史においてもある言語の研究が大きく進展する端緒が他言語との接触であることは、漢語史における梵語との例などが知られている。満州語と系統を同じくする女真語が、十二世紀に漢字をもとにした文字を創設したことをみても分かるように、またそれ以前の渤海の例をみても満州族の故地である中国東北部には、中国文化の濃厚な影響を見いだすことができ、満州語に漢語との関係が非常に深いことは述べるまでもない。周知のように、女真文字に代わって満州文字が使用される経緯については、1599年ヌルハチが蒙古文字を用いて満州語を書き記したこと（これを無圈点文字、または老満文と称する）に始まる歴史的事実があり、文字だけでなく満州語には語彙から言語構造そのものにおいても隣接する蒙古語の影響はぬぐいがたいものがある。しかしながら、清朝の成立以後は、満州族蒙古族間の社会的位置がそれまでと逆転すると、満州語に対する蒙古語の影響は漢語に比べて相対的に低下したとみることができる。文字使用以前は蒙古語を用いて記録を作っていたが、国家体制を中国にならうようになってからは漢字漢語による中国風の史書の編纂などが進められるようになったのである。また、清代の満州語資料には、満蒙漢の三体や満蒙の二体のものも少なくないが、満漢二体のものが大変多く出されている。こうした動きの中で、満州語の音韻構造の認識に、文字の使用とともに漢語との対照作業（その多くは翻訳のための音訳において）が重要な契機となったことは容易に理解できる。1632年に蒙古文字の借用段階からより機能的な改革を行い満州文字を創設した際、おもに漢語を写すことを目的とした文字（ガリック文字、特殊文字または外字などと称する）を併せて作ったこと（これを有圈点文字、または新満文と称する）や、満州語音を漢字音訳する際の字体の統一を意図した十八世紀の『欽定清漢対音字式』の編纂などはそうした言語活動の例である。こうした満漢対音資料の作成は、早くは十七世紀中期に作られたとされる『清書対音 清書切音』から十九世紀末の『対音輯字』まで清朝一代を通じて作られている。また、満州語と漢語との間の翻訳において、ことに音を写す人名地名

などの固有名詞などはやはり満漢対音に基づいて書かれることになる。

これらの文献をもとに満州文字と漢字音と体系的に対応させることができるが、それにより当時の言語音の状況を推定するための資料として相互の音韻の研究に利用することができる。すなわち、満州語において綴りとは異なって発音される場合の変異をあてられた漢字の字音から論じることができ、他方漢字音についても満州語音を漢字で音訳するの際に用いられる用字法の状況から、また表音文字である満州文字で漢字語を音訳している表記によって知ることができるようになるのである。これは満州文字の表音的機能だけでなく、漢字を他言語の表音に使う用字法によって可能なことであり、これら満漢対音による資料を言語の音韻研究に用いることは、借用語の研究などとならんで異言語間の接触がもたらした言語活動の産物とみることができる。

漢字を用いて外国語の音を表すことは、仏典の翻訳に現れる梵漢対音・蔵漢対音のほか『華夷訳語』などの中国資料にもみられる用字法であるが、漢字を移入した日本や朝鮮でも自国の言語音をはじめ漢字によって表記する万葉仮名や吏読を作りだしたことが知られている。そして、外国語の文字が女真文字のような表意文字である場合、文字の音価決定はもっぱらその訳音字に基づくより他にないが、一語一音節という漢字の表音性の限界から再構音には確定しえない部分が残ることがある。金・金(1980: 108-127)はそうした問題を論じている。Kiyose(1977: 34)は、その場合には満州語を音価決定の資料にすると述べているが、女真語と満州語とで異なっている可能性のある音を扱う場合、問題となることも考えられる。従って、本研究で提示した女真語の音価は、あくまで暫定的な再構形であることを前提として論じている。なお、第一部では満州語文語の音変異を漢字によって表している記述を扱うが、そこではそれらが個別の語の部分的な音節であり、満州語の現代音やツングース語諸方言の現代音と比較することができるので、大きくはずれることは少ないと信じる。

そもそも満州文字は、アラム文字の系統に属する表音文字であり蒙古文字に機能的な改良を加えてできたため、音価を表示する記号としては便利な面もある。しかし、表音文字の綴りと実際の発話音価の間に完全な一致があることはむしろ希有であり、言語活動が時間的空間的に拡張する過程においてさまざまな変異が生じるのが普通である。満州語は少数民族の言語ではあるが、清朝に先立つ時代から数えて数百年間、数万の話者が広大な地域にさまざまな社会階層を形成して居住していたために、変異が生じたことは必然的と言える。常に変動にさらされ瞬間的に使用される口頭音と規範性を持ちやすく固定的である

文字とは、本来対立する要素を持っていると言えるが、この両者とつなぎとめるものが話者の言語意識である。書き言葉としての文語が成立し規範的な威信を与えられると、統一性を保持しそれからの逸脱を排除しようという意識が生まれるが、書き言葉と話し言葉では変化の速度が異なるため文字と音とはこの言語活動のダイナミズムによってつねに乖離を起こしうる。こうした表記と発音の二重性は文字を使う言語の免れえぬ宿命で、英語やチベット語をはじめとする多くの言語の表音文字の音価が常に一定とは限らないのはこの二重性のためであるが、満州語にあっても表音文字として書く綴りと個々の語の実際の発音に距離があったことは想像に難くない。すなわち、満州語文語の単語が書かれた当時に実際はどう発音されていたのかは、表音文字であっても必ずしも明確とは言えないのである。そして、表音文字の変則的現象は、とりわけ他言語話者との接触の過程で、例外として注目されやすい。対音資料を音韻史の研究で利用する価値の生じる所以である。また、表音に使われている漢字が十八世紀の近世音であり、現代音とかなり近い字音になっているため音価の決定も比較的容易であることなどは、本研究にとり有利な条件と言える。

他方、満州語文語と呼ばれるひとつの言語が、実は標準的とみなされる有力な方言を基盤にしてそのなかにさまざまな言語的変種を有して成立していたことは、多くの言語の実状からも推測される。これもひとつの綴りに複数の発音を持たせることになったであろう。満州語音を漢字で表す対音の方法には、『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1775)にみられる三合切音という満州文字の綴りを機械的に漢字と対応させた規範的な表記法があるが、ここで挙げた資料の中で個別的に注音されている場合は実際の発音に基づく変則例であるとみられ、そこには文語とは異なる方言の現れと考えられるものもある。この点については、まず現代音との比較から取り上げられ、次いで個別的ではあるが、文語資料中の同じ現象を指摘することになる。

また、『舊満洲檔』のような初期文献には、正書法と異なる綴りの語がみいだせるが、それも語の内部の環境による音変異とみるべき可能性があり、これらは現代語と比較した場合にも通じる音声的変異の表れとすることができる。他方、歴史上より早い時代に記録された女真語との比較にも同様の現象がみられることから、満州祖語から女真語、満州語文語、現代語と受け継がれてきた言語構造の中に共通する特徴としてこうした音声現象をみることができると考える。

さて、漢字音の研究では中国の韻書などの資料や現代諸方言と並び、日本・朝鮮・ベトナムの外国字音が大きな利用価値のあることが知られている。これらは域外訳音と呼ばれ、

いわゆる漢字文化圏の影響の深さを物語るものであるが、その体系を調査することによりかつて存在した字音上の区別を何らかの形で反映している場合などは、漢語音韻史の研究に貴重な資料をもたらすことがある。中国文明との接触が自国の個性を自覚する契機になった周辺諸国が漢字を導入することで生まれた漢字音が、字音の研究に大きな貢献をしていることは言語接触による相互関連がもたらす顕著な例と言えよう。

さて、中国周辺に展開した民族には、『三國志』が記す古代東北部の文字を使用する文化的段階にまで達しなかったものから高句麗や渤海のように漢字漢文化の完全にひたっていたものやさらには回族など母語を捨てて漢語に乗り換えたものまでさまざまである。漢字とは異なる系統の文字を使っている場合でも、中国文化の影響が強く及んでいることは言うまでもない。文字こそ漢字ではないものの、借用語として漢語より移入されたものは明瞭に見てとることができる。そして、その文字が表音文字であるならば、その音価はもとの漢語の音価をやはり何らかの形で反映していると予想され、これもまた借用時期の漢字音を考える材料になる。ただし、漢字を借りた言語では、中国での字音という基準に対する規範性を比較的保ちうる字音の組織的移入が主であることとは異なり、そうでない言語の場合は散発的な借用に過ぎないことが少なくなく、また借りる言語の音韻構造に合わせて変形することが普通であり、漢語とその言語の音韻構造と対照して初めて、漢語の音韻資料としての価値を有するようになる。歴史的に中国と深く関わった民族のなかで、チベット・モンゴル・満州の諸民族の言語はこうした役割に用いることができる。

満州族は中国文化と最も深く接触した民族のひとつとすることができる。満州族が清朝を建てこれが明朝を継いだことにより、ついには大部分の満州族自身が漢語に乗り換えてしまったくらいその漢化の影響は著しいものであった。当然その過程で彼らの言語には漢語の影響が色濃く現れているが、また他方表音文字としての機能からこれを韻書に使うという考えが当然出てくるもので、満州文字で表音された韻書には『音韻逢源』(1840)のほかには永島(1941)によれば、『黄鐘通韻』(1744)(筆者未見)がある。

さて、漢字音の研究において満州語資料が果たせる役割が限定される理由には、資料の年代が十七世紀以降と新しいために漢語音韻の構造が現代音に非常に近くなっており構造変化の研究対象として扱うことのできる現象に限られることと、整備された満州語の正書法では正音に対する規範的性格が強いこと(これは中国文化への彼らの崇敬の念がもたらしたものと言えよう)が指摘できる。

しかし、第一の点では、まさしくこの時期までに起きたとみられる音韻変化に関しては、

有力な資料として利用することができ（満漢対音資料のひとつ『圓音正考』の利用は、最もよく知られた例である）、第二の点についても、規範主義に対する意識の低い初期の文献における後代の正書法とは異なる例のなかに当時の音韻状況に基づくとみられる現象の反映がある。この二点を満たして、中国音韻史研究の上で満州語資料の利用価値が認められる現象のひとつが、本研究第二部の初期満州語資料に基づく牙音と喉音の舌面音化の研究である。

初期の満州語文献で正書法的画一主義が緩いことは、さまざまな異形態、例えば、[ŋ]は本来満州語の音韻には存在しなために、これをnで書き写すといった点などにもみられる。こうした異形態は、書写者の個人的な言語習慣や単なる誤記によるものも考えられるが、満州語漢語間の言語構造の差異に起因しているもの（あるいは固有語では先に述べた満州語自体の音韻によるもの）も少なくはない。そこにこれらの言語の通時的様相を反映した史料としての価値を見いだすことができる。

河野六郎博士によれば、字音の研究には二つの意味がある。ひとつは漢語音韻史の史料としてであり、もうひとつは受ける側の言語の音韻史料としてである。本研究では、はじめに後者の目的で満州語資料中の漢字表音及び表音漢字に基づいて再構される女真語音と満州語音との比較を通じて、文語を中心とした満州語史における音韻現象を論じ、次いで前者の目的として漢語音と満州語音の対応に基づいて固有名詞を書写した例により漢語の通時的音韻変化を論じる。

1.2. 満州文字漢字音表記

前述のように、漢語との接触は満州語が記録される以前から起きていたことであり、体系的に記述された最古の満州・ツングース語の資料のひとつ『女真譯語』にも、漢語からの借用語が多数みられる。

満州語の漢語漢字音の受容は、老満文以前とそれ以降新満文まで及びその後の三期に分けられる。1599年に満州語の書写が始まるまでは、口頭言語を介する直接的借用に由来するものにとどまっていたとみられる。老満文は蒙古文字で満州語を書き記すことで、ここでどのように外国語の音を満州語として文字に写すかということが問題になる。この時期は文字を書くことができるものが限られていたために、書写の仕方にもある程度の恣意性があったと思われる。1632年に新満文が公布されるまでにも外国音を表記する方法はさまざまに試みられていたと思われる（後述の『清史稿』参照）。新満文では、満州語が持た

ない音の表記に、一般に借用現象で見られるようにこれを受容する満州語音韻構造に適応させて変えるのではなく、その音を表記するための特別の文字を作り出しており、その音価はともかく音の弁別が意識されたことが分かる（ただし、こうした外字の類は蒙古文字にもあり、チベット音を写すために使われていた）。このガリック文字の作成の事実が意味することは、この時期までに満州語話者による漢語音韻の分析が行われ両言語の音韻構造の差異の認識がなされたことである。その結果、新満文の使用開始の時点で満州文字による漢字音の表記法の基礎的な部分はほぼ完成したとみられ、以後は個々の文献の作成にあたって書記者がどの漢語方言の字音を対象にするかが問題となるのである。

さて、本研究の資料にみられる満州語が接触した漢語の方言は、どのようなものと考えらるべきであるか。漢人との政治的経済的交流は明代から続いていたが、東北部に起こった満州族の国が清朝となって国の体制を整えるうちで、次第に漢人を重用していったことはよく知られている。彼らは敵対していた明から投降してきた文武の官人で、後に内三院と改組される文館において文書や記録の作成そして翻訳などの作業に従事したが、その漢語が満州語との対音の基礎になったと思われる。個々の漢人の出身はさまざまであったとしても作業で用いる漢字音は各種の方音の混成ではなく、華中華北の共通語として十四世紀の『中原音韻』においてかなり明確に現れ、かつて北京官話といわれ今日の「普通話」のもとになった北方語にごく近い可能性が最も高いと思われる。このことは、例えば『御製増訂清文鑑』（1773）の対訳漢語の注音表記（付録1参照）のように、まとまった書写資料から帰納される満州文字漢字音表記と初期文献のそれとが、部分的な差異はあってもほぼ共通でありそれらは北京官話とおおむね同じ体系を持っていることからまず間違いのないことと思われる。そして、漢人が翻訳などの作業で用いた初期文献の字音表記に、土語ではなく共通口語を基にした書面語、すなわち白話音の性格が反映されたと考えられる。

具体的な言語事実については、例えば十七世紀初期の『重訂司馬溫公等韻圖經』は北京官話にきわめて近い体系を示し正齒音二等と三等を合併しているが、満州語の初期文献ではいくつかこの区別を反映する可能性のある個別の例はあるものの、大半の例では同一表記になっていることや、『大清太祖武皇帝實録』では「総兵官」を *ts'ung bing guwan* とし、また「山海関」を *san hai guwan* とするなど、十七世紀後期の『五方元音』のようにそれ以前まで北方語にあった「官」*kuon* と「関」*kuan* の区別をしていないことなどを指摘できる。

地理的に考えるならば東北方言の可能性もあるが、詹（1985：94）による同方言の特徴

が漢字音を表記した満州語資料に一般にみられないことと、明末清初の時代にすでに東北方言と言えるものが存在していたと考えるべきか疑問であること（袁(1989: 21)は「満清入関、統治中国268年(1644-1911年)、採用漢語、竝且把北方話伝播到東北広大地区、同時山東移民把膠東方言的特色也带到了遼東半島」と書いている）からその可能性は低いとみてよいと思われる。また、東北部に対岸の山東半島から移ってきた漢人が居住しその地方の方言的特徴がみられることが知られているが、上述のように歴史的事実として山東移民は清代に多くみられるが満漢対音が成立した時期にすでにこの地に山東方言の影響が確立していたとは考えにくいこと、またこの方言に特徴的である日母について満州文字の字音表記にはそれがみられないことから、これらの二方言の語彙的な影響は考えられたとしても、音韻構造をはじめとする根幹は北京官話の前身となる北方共通語を主体とみなしてよいと考える。

満州語文語の表音に漢字を用いている文献は、十八世紀以降に北京で発行されたものが主であり、そこに用いられている漢字も北京官話として読むべきことを想定していると考ええる。例えば、『満漢字清文啓蒙』と『欽定清漢対音字式』は共に清朝が安定期を迎えた頃の作であり、その対象となった漢語が北京官話であることは明らかで、そこに示される漢語体系と初期資料の例を帰納して得られる体系の間に本質的な差異はみられない。

なお、池上(1986, 1987a, b)は早くから満州語文語の音韻研究に重要な文献として『満漢字清文啓蒙』の分析を行っており（旧稿執筆は1944年）、第一部第一章では先行研究として同論考にたびたび言及した。また、第二部と同様に満州語資料を漢語音韻の研究に用いたものに、十八世紀の北京方言の体系を論じた落合(1986)と落合(1987)がある。

2.1. 満州語音資料

さて、本研究で使用した主な資料として、はじめに満州語音資料に関し、次いで漢文史書と満文史書について簡単に述べておく。

『満漢字清文啓蒙』(1730)

天理大学蔵本（満語文献集Ⅰ 語学編）。全四巻のうち第一巻が文字と発音、第二巻が対話例、第三巻が文法、第四巻が語彙について書かれている学習書で、本研究で用いた記述は第一巻に収められている。文語の音的変異を漢字表記した例の多くは、同書の注記に

おいてみることができる。この文献を満州語文語あるいは北京方言の資料として分析したものに池上(1986, 1987a, b)と落合(1987)、落合(1989)、落合(1992)があり、同書の書誌学的考察も加えられている。北京で出版されたことと時代から考えて、当時の北京の口語的な満州語を記述したもので、表音に使われている漢字の字音は近世北京官話とみて間違いないであろう。『清文啓蒙』と表記する。

『満漢文清語易言』(1774)

東洋文庫所蔵本。同じく学習書であるが、満漢合璧(満文漢文が一行ずつ交互に書かれる)に作られた小冊子で、音的変異に関する記載は比較的初めの数葉に書かれている。その例の大部分は『清文啓蒙』と同じ語を使っている。池上(1986, 1987a, b)で多くの例が分析されている。漢字も添えられているが、文語の音の変異を満州文字を使って書き表しているため、より明確な音表記になっている。『清語易言』と表記する。

『清書対音 清書切音』

東洋文庫所蔵本。成立年の記載はないが、Fuchs(1936: 10)によれば、順治から康熙初期、すなわち十七世紀中期以降となる。おそらく満漢対音資料の試作品としての意味で作られたものと推測される。満州文字で一音を挙げて、その下に対する漢字を列挙しており、この形式をとる対音資料の先駆けとみなされる。

『圓音正考』(1743)

東洋文庫所蔵本。我国では藤堂(1980)が同書を漢語音韻史における尖団の合一を示す資料として取り上げ、中国でも趙(1956)などこの現象を論じる場合には必ず同書が引かれるところである。これも満漢対音資料のひとつで、漢字の尖団の別(詳しくは後述)を満州文字で表記し分けたものである。

『欽定清漢対音字式』

天理大学蔵本(満語文献集Ⅰ 語学編)。落合(1986)では版本に関する記載のほか、さまざまな注記についての考察が行われている。それによれば、乾隆37年の上諭だけを含むものは、道光16年(1836)年以前の刊行とされている。満州語音を漢字で音訳する場合の用字の統一を図って、満漢対音に配したものである。『対音字式』と表記する。

『対音輯字』(1890)

天理大学蔵本(満語文献集Ⅰ 語学編)。満漢対音資料としては最も後期に属するもので、収録漢字の数もきわめて多い。規範主義による対音の到達点を示すものであろう。

女真語の資料は、金(1984)によれば文献と金石、墨跡の三種類があるが、量的には前二者が大部分を占めている。文献として最も著名であり一言語に記述資料として研究に耐えるものは『華夷譯語』中の『女真譯語』である。これには成立を異にする二種類の版があり、方言的差異を反映しているとみられる。金石資料には、文献が主に明代の作であり、その時期の女真語を記しているのに対して、金代の女真語を書き記しているものがあり貴重ではあるが、量的に文献に及ばずより古い時代の言語を考察するときには有効となる。本研究では、再構形の多くを Kiyose(1977), 金・金(1980), 金(1984)に基づいている。

現代語の資料は、主に山本(1969), 河野(1979), 服部(1986)及び李他(1984), 李他(1986), 趙(1989), 愛新覺羅(1992)などによる。このうち、山本(1969)及び李他(1984), 李他(1986)は錫伯語を調査したものであり、他は東北部の現代満州語を研究したものである。両者の差異を問題にする場合は、その都度言及する。

2.2. 漢字音資料

第二部第一章で用いる史料『大清太宗文皇帝實録』（以下『文皇帝實録』と表記する）には、次の三種類の纂修版がある。

- A 大清太宗応天興国弘徳彰武寛温仁聖睿孝文皇帝實録(順治初纂本、国立故宫博物院蔵)
順治12年(1655)
- B 大清太宗応天興国弘徳彰武寛温仁聖睿孝隆道顕功文皇帝實録(康熙重修本、東洋文庫所蔵他)康熙21年(1682)
- C 大清太宗応天興国弘徳彰武寛温仁聖睿孝敬敏昭定隆道顕功文皇帝實録(乾隆三修本、満洲帝国国務院景印大清歴朝實録)乾隆4年(1739)

本文中で示す場合は、それぞれ順治本、康熙本、乾隆本と書くか、またはアルファベットで表記する。これらは言うまでもなく全編漢文で書かれているが、そもそも満文の記録である太宗老檔を底本にして作られたものである。松村(1972)参照。従って、それぞれの天聰九年の記録を満文史料の『舊満洲檔 天聰九年檔』と対校させることにより、最初に満州文字で書かれていた満州語の人名や地名などの固有名詞を、『文皇帝實録』ではどのように漢字音訳しているか、またそれぞれの版の間でどのような差異がみられるかを調べ

ることができる。第二部第一章では、この用字法に特徴に基づいて当時の漢字音の状況を論じることが目的である。

次に第二章では、『大清太祖武皇帝實録』の満文本を用いる（テキストは今西(1967b)を使用する）。『大清太祖武皇帝實録』（以下『武皇帝實録』と表記する）には、満蒙漢の三言語の版があるが、満文本は一番の基になるもので、十八世紀後期の乾隆年間に作られた『満洲實録』とはかなり細部にいたるまで一致した内容になっている。

今西(1967a: 285)はその成立を崇徳元年(1636)11月と結論しているが、松村(1992)の報告によりこのテキストは、それを改修した順治年間(1644-1661)のものであることが明らかになった。ここで用いたテキストは、全四巻のうち第一巻を欠いているが、残り三巻の合計197葉から構成され、本文中には固有名詞を主とする漢語からの借用語が数多くみられる。これらを『満洲實録』の漢文本と対校することにより、牙音字・齒音字・喉音字に由来する語を抽出しそれらが満州文字でどのように音訳表記されているかを調べることができる。

これらの資料にみられる例は、その基となった当時の漢語の音韻状況を論じる証拠とするためにはいずれも量的には十分なレベルにあり、また写すべき漢字音に対しおおむね規範的性格の強い読書音を正音とみる伝統意識からの干渉の可能性は残るが、特に『武皇帝實録』は外国語資料である点から保守的性格の強い韻書に比べより実際の音価に近い状況を反映していると考えられる。

3.1. 満州語文語の音韻

本研究では、満州語文語と近世漢語の音韻を材料として扱ううえから、まずこれらの基本的な構造を簡単に記しておく。

満州文字は Möllendorff 式によるローマ字転写を行ったが、軟口蓋音のガリック文字は k' -, g' -, h' - に変えた。なお、満州文字のローマ字転写法については、田村他(1966)の付表が簡便である。

満州語は、1599年に蒙古文字を借用することで初めて書かれるようになり、続いて1632年には弁別のための圈点を付すなどの文字の改良と外国語音転写のためのガリック文字の追加が行われて、満州文字が制定されたことはすでに述べた。ここで、『清史稿』と満文老檔よりその件を引用する。季他(1986: 7-24)参照。

十二月。定朝儀達海曰。十二字頭無識別。上下字相同。幼學習之。尋常言語。猶易通曉。若人姓名及山川土地。無文義。可尋必且舛誤。爾其審度字。旁加圈點使音義分明。俾讀者易曉。達海承命。尋繹字旁加圈點。又以國書與漢字對音。補所未備。謂舊有十二字頭爲正字新補爲外字。猶不能盡協。則以兩字合音爲一字。較漢文翻切尤精當。國書始大備。

juwan juwe uju, dade tongki fuka akū, dergi fejergi hergen ilhan akū, ta da,
十二字, 初に 點 圈 なく, 上 下の 文字 區別 なく, ta da
te de, ja je, ya ye fakcan akū, gemu emu adali ofi, bai gisun hese bithe
te de, ja je, ya ye 分離 なく, 皆 一 様 なので, ただの 言 旨 書
ohode, mudan ici be tuwame uthai ulhimbi, ja, niyalmai gebu, ba na
となった時, 音 方向 を 見 直ちに 悟る, 容易。人の 名 處 地
i gebu ohode, tašarame ojarahū ofi, aisin gurun i sure han i
の名 となった時, 誤るようになる 恐れがあるので, Aisin 國 の Sure Han の
ningguci aniya niyengniyeri ujui biya de, han i hesei, dahai baksi tongki
第六 年 春 第一の 月 に, Han の 旨で, Dahai Baksi 點
fuka sindame temgetulehe, da uju be inu uthai fe kemuni uju de
圈 施し 表した。初の 頭 を また 直ちに 舊 もとどおり 頭 に
arahabi, amaga mergese tuwafi, ilgahangge tumen de emu niyececun bici
書いてある。後の 賢人等 見て, 區別したこと 萬 に 一 裨益 あれば
wajiha, murishūn waka oci, fe uju getuken bi;
終わった。繆 非 ならば, 舊 頭 明らかに ある。

tere inenggi juwan juwe uju arafi wasimbuha;

その 日 十二 頭 書いて 下した。

『滿文老檔V 太宗2』(滿文老檔研究會) pp. 633-634.

文字の音価は十七世紀当時の満州語の音韻構造に基づいていることは言うまでもないが、個々の文字の音価は現代語音と比較的よく対応する。

本研究においては、季他(1984: 41)などにより、文語の子音字母の音価を次のように考える。

	唇音	齒音	齒茎音	捲舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音
閉鎖音 無気	b	d				g	g
有気	p	t				k	k
摩擦音 無声	f		s	\check{s}		h	h
有聲	w			\check{z}			
破擦音 無気			dz	j			
有気			ts'	c			
鼻音	m	n				ng	
側音		l					
弾音		r					
半母音					y		

軟口蓋音と口蓋垂音は後続の母音によって分けられ、形の異なる二系列の文字によって書き分けるが、転写の場合は同じ文字を使う。j、c、sは母音 -i- の前ではそれぞれ後部齒茎音[tʃi], [tʃ'i], [ʃi]となる。軟口蓋音において、後に漢語のように同じ環境で舌面音化が起こったとする見方もある。例えば、Möllendorff(1892: 1)、落合(1987: 76)などにその記述がある。しかし、筆者の見解ではこのことは漢語からの干渉により、一部の方言で個別に生じた借用とみるべき現象であって、満州語自体の構造の変化ではないと考える。ひとつの有力な証左は、Möllendorff が記述したと思われる都市部の満州語に比べ、漢語の影響が少ないと思われる錫伯語や東北方言などの現代語では[tʃi]と[ki], [tʃ'i]と[k'i], [ʃi]と[xi]をそれぞれ区別していることである。前者については山本(1969)、早田(1985)を参照。また、後者については、河野(1979: 543-545)と服部(1986: 85-86)に言及がある。

dz, ts', \check{z} は漢語の[ts], [ts'], [ʒ]を表し、このほか、zi [tsɿ], ci [ts'ɿ], si [sɿ]を表す特別な字体の文字がある。また、漢語の[ka], [k'a], [ko], [k'o]を写すときは、g'-, k'- と転写する文字を使う。これは満州語の ga[qa], ka[q'a], go[qo], ko[q'o]と区別するためである。これらをガリック文字と言う。

なお、理論的には子音は帯気性の有無で対立するが、発話では周囲の環境によって変化し無気音は有声音間で同化することが多い。

同様に、文語の母音字母の音価を次のように考える。

i

u

ū

e

o

a

a、e、i、o、uの音価は比較的問題が少ないが、ūについては問題とされることがある。この字母は大部分 g, k, h に続く位置に書かれることから、uと同じ音で、例えば、gu[ku]に対して、gū[Gu]を表すとみるものもある。しかし、現代音の資料によれば、山本(1969)ではūは [ɔ] を表す例が多く、また、趙(1989)でもこの字母に対応するとみられる現代語音では [ɔ] で記述されている。本研究では、これを [ɔ] の音価と考える。

現代語の音韻構造の分析は、錫伯語では服部・山本(1956)、李他(1984)、李他(1986)があり、東北方言では趙(1989)、愛新覺羅(1992)がある。これらは文語と比較するうえで必要に応じて参照にするが、山本(1969)と愛新覺羅(1992)を比較する限りでは、後者が論じていることとは違い、概して錫伯語の方がより文語に近い音韻を保っているように見える。この点は決定的な結論を下すことが可能かどうかを含めて再考したい。

清瀬(1973: 41)では、女真語の子音を次のように再構している。

	唇音	齒茎音	硬口蓋音	前部軟口蓋音	後部軟口蓋音
閉鎖音 無声		t		k	q
有聲	b	d		g	ɣ
摩擦音	f	s	^h s	h	x
破擦音 無声			^h c		
有聲			j		
鼻音	m	n		ŋ	(ŋ)
側音		l			
顫音		r			
半母音	w		y		

また、母音は次のようになっている。

後母音 a o

i u

前母音 e

3. 2. 近代漢語音と舌面音化

次に、第二部で論じる現象に関して漢語音韻史の位置づけを行う。まず、関連する韻書と韻図について簡単に述べておく。

『中原音韻』(1324)

元代の曲韻書で、当時の中原(揚子江以北)地域の北方共通語をよく反映している。声母(語頭子音)・韻母(それ以外の音節部分)とも中古漢語に比べ大きな構造変化を経た、後代の北京官話につながる簡素な体系の方言が成立したことを示している。

『重訂司馬溫公等韻圖經』(1602)

明末の韻図で、河北地域で現代北方語に直結する音韻変化である捲舌音の発達が始まったことを記している。

『五方元音』(1654-1664)

清初の韻書で、特に韻母の細かい音価に関して北京官話の成立を示している。

漢語音韻史では、上古音・中古音・近代音・現代音のような時代区分を行う。さらに近代音を分けて中世音(近古音)・近世音とすることができる。より細分化されると体系全体の相違の度合いは低下する。すなわち中世と近世の違いは近代と現代の違いよりも相対的に小さくなる。

それぞれの時期の音韻は、まとまった体系を持つ韻書などの文献によって代表させることが多い。例えば、中古音は具体的には『切韻』系韻書を基礎に構成される体系とみなされる。同様に、中世音は『中原音韻』に代表されるもので、先述のようにすでに北方語の原形はかなり明確になっている。近世音は『重訂司馬溫公等韻圖經』や『五方元音』にみられる体系を指し、実質的には近世音と現代音は構造的な差異はほとんどないといってよい(「街」などの韻母は、現代音では [ie] であるが、近世音では [iai] であったなどの差異はある)。

こうした区分ごとにそれぞれの音韻的・文法的特徴を持った体系が構成されるが、本研究で扱う牙音喉音の舌面音化は、正歯音二等と三等の合流による捲舌音の発達と共に中世漢語から近世漢語にいたる時期の顕著な音韻変化である「尖団の合一」の一部を成す現象である。これは団音と呼ばれる無気軟口蓋閉鎖音[k]、有気軟口蓋閉鎖音[k']、軟口蓋摩擦音[x]が狭母音[i][y]の前で調音点が移動しそれに伴って破擦音化してそれぞれ[tɕ], [tɕ'], [ɕ]となる現象を指す(「尖音」、「団音」の定義及び「合一」という現象等の解釈は日下(1973)に従う)。これは、詹(1985: 25-26)が述べるように、北方語をはじめ他の漢語方言にも広く起きている現象で、共時的な方言区分においても基準となるものである。通時的研究では、尾崎(1980: 172-177)や花登(1979)は『蒙古字韻』の朱序にみられる表記によって舌面音化の発生の時期確定を十四世紀以前と論じ、また趙(1937: 80)や永島(1941: 27-28)は、『元韻譜』(1611. 刊刻は 1691年)の団音声母の音価に舌面音を推定している。さらに、花登(1993)は、花登(1979)を踏まえてこの現象の研究を網羅的に論じ、その補遺において十三世紀中期の舌面音化を指摘したとみる資料を提示している。

さて、先に述べた「尖団の合一」という現象は、本研究で論じる牙音喉音の舌面音化に続いて、尖音と呼ばれる無気歯茎破擦音[ts]、有気歯茎破擦音[ts']、歯茎摩擦音[s]までもが狭母音[i][y]の前でそれぞれ[tɕ], [tɕ'], [ɕ]になって、それまで区別のあった字音

が同じ音価で発音されることを指し、これは団音の舌面音化に比べれば狭い範囲の漢語方言にみられる。この現象、つまり完全に合一の起きた時期についての研究では、藤堂(1987b)の論考が著名だが、そこでは漢字の尖団の別を満州文字によって表記し分けている『圓音正考』を取り上げている。すなわち、漢語においてもはや行われなくなった字音上の区別が、満州語への翻訳では不可欠であり、その弁別の便宜のために同書が作られたというその存在理由からして、尖団の区別が漢語話者自身にはすでに困難になっていたことを示すものである。このことは、満漢対音資料が漢語音韻史の研究に貢献した最も顕著な例のひとつとみなすことができる。さらにこれと同様のことは、『圓音正考』に先立つ『清文啓蒙』中の満漢対音からも論じることができる。すでに、讃井(1980)、落合(1987)、池上(1987b)、岩田(1988)らがこれを引いているが、本研究の第二部ではそれと通じる現象が初期の満州語資料にもみられることを指摘して、十七世紀前半に牙音喉音の舌面音化が広く起きていたことに加えて、その一部では尖音との合一まで生じていると推測すべき点を指摘したい。

第一部 満州語音韻の研究

第一章 満州語における母音 -i- の弱化と軟口蓋閉鎖音口蓋垂閉鎖音及び両唇閉鎖音の摩擦音化について

文字形態と音声形態の差異は、程度の差こそあれ多くの言語できわめて普遍的にみられる現象である。満州語もその例外ではなく、文字の使用開始は十六世紀末と比較的近い時期ではあるが、数世紀を経た現代音が綴りと異なるところは少なくない。そのみならず、十八世紀の文献ですでに文語形態とは異なる口語形態についての記述がみられる。本章ではそれらの文語資料と現代語資料をもとに、いくつかの文字の音価が実際の発音では異なって現われる現象について考察を試みることにする。

1. 母音 -i- の弱化

満州語教本の『清文啓蒙』巻一の十二字頭中の第一字頭に付けられている満州語音に関する注記には、次のような箇所がある。付録2参照。

si 西。 siseku 篩 籬 篩子。 asihaki 少嫩 hasi 茄子

此 si 字在聯字中間下邊俱念詩在聯字首念詩西俱可單用仍念西。

漢語の「詩」の十八世紀の音価は現代音と同じく無声捲舌摩擦音の [ʃl] であり、また「西」はほぼ同時期の『圓音正考』の存在からすでに舌面音化して歯茎硬口蓋摩擦音の [ɕi] になっていたと考えられるので、この注記は満州語の si が語中・語末にあるときは「詩」に近似した音価で発音され、それが語頭にある場合は「詩」と「西」がどちらも現われうるのであり、単独で用いられるときは「西」に近い音価になるということを述べたものと解される。同様の注記は、以下のように si を含む他の多くの音節についても書かれている。

	語中・語末	語頭	単独
第二字頭	sii	注記なし	
第三字頭	sir	詩尔・西尔	西尔
第四字頭	sin 身	身・心	心
第五字頭	sing 生	生・星	星
第六字頭	sik	詩珂・西珂	西珂
第七字頭	sis	詩思・西思	西思
第八字頭	sit	詩呖・西呖	西呖
第九字頭	sib	詩鋪・西鋪	西鋪
第十字頭	sio	注記なし	
第十一字頭	sil	詩撈・西撈	西撈
第十二字頭	sim	詩模・西模	西模

この注記については、すでに池上(1986: 23-25)や落合(1987: 134-135)で言及されており、特に前者ではさまざまな満州語文献においてもこの現象が記述されていることを明らかにしている。さて、これは実際にはどのような現象に基づいたものであろうか。そのまま受け取れば、si という綴りの音価に関して、語中・語末では [ʃɿ] になり、語頭ではバリエントとして通用し、単独では [ɕi] になるということだが、そうした音声現象が実際にあったのであろうか。筆者の見解によれば、これはそのように考えるべきことではなく、母音 -i- の音価の変質により、あたかも子音の側に変化があったかのように受け取られたものとする。そもそも、山本(1969)、李他(1984)を始めとする現代音資料並びに清瀬(1984)などによれば、満州語音 si の音価は硬口蓋歯茎摩擦音の [ʃi] であると考えられ、単独で用いられた場合(例えば、si《汝》)はその音価で発音されるために、「西」の字音に近いと取られるのは自然である。これに対して、語中・語末にある場合には -i- は弱化によりその存在感が極めて弱くなり、あたかも子音 [ʃ] ひとつしか存在しないかのような聴覚的印象を与え、他方「詩」の字音の [ʃɿ] も子音の強い捲舌性により元来母音の音色は曖昧なものであり、あるいは母音を伴わない子音だけの存在(すなわち、音節主音的(syllabic)な [ʃɿ])と考えることができる。それゆえ、『清文啓蒙』の作者の舞格は両者を近い音価として考察し上述の様に記述したのであろう。山本(1969)には次の例がみられる。

lasihimbi [l̥iɕxim]

《ぬれた、しめった》

aisi [ʔaɕʃ]

《助ける、(直接)手助けする》

また、李他(1986: 163)にも「湿(衣服湿) upxin」(文語は usihin)とある。

池上(1986: 25)に指摘があるように、満州語の *ši* という綴りは漢字音の [ʃ] を書き写すときだけに用いられる。つまり満州語の音韻体系において、そもそも文字としては余剰であったため外国音の表記にあてられているのである。たとえば、『清書対音・清書切音』(成立年不詳。Fuchs(1936: 10)によれば順治～康熙初期)及び『大清全書』(1683)の十二字頭中の第一字頭では、*ši* は漢語音などの外国語音を書写するためのガリック文字の中に並べられている。(但し、『正字通』(1670)所収十二字頭ではそれとは異なり、後代と同じく *-š-* の系列に記載されている) こうした文字の表わす音が、満州語固有語の音節にバリエーションとして現われると考えるのは不可解と言わざるを得ない。

さて、語頭にあってこの弱化が起こらない場合については、アクセントが関与していることが考えられる。満州語のアクセントについては十分に究明された段階とは言いがたいが、Poppe(1960: 144)及び Poppe(1965: 181)によれば、満州・ツングース語のストレス・アクセント(*der dynamische Akzent, a dynamic stress*)は第一音節にあるという。満州語もそうであれば、第一音節つまり語頭にある場合は当然弱化は起こりにくくなり、従って「西」の字音に近い本来の [ʃi] で発音されることがあると思われる。しかしながら、文中においてはおのおの語の語頭が常に強く発音されるとは限らず、文全体としての音調にも左右されることもあるから、弱化が起こる場合も考えられ、それが「詩」に近い音価とみなされる場合であったと考えられる。(『清文啓蒙』の「異施清字」の項には、「sisingga 字念詩生 啊」とある。ここでは語頭の *si-* にも捲舌音の字が対置されている)

また、池上(1986: 24)にも引かれている Amiot(1787: 7)には、この *si* の音価について次の記述がある。

……L's a souvent le son du *ʃ*, la syllabe *ʃi* se prononce presque toujours au milieu & à la fin des mots, comme nous prononçons *che* dans les mots *chemin, cheval, &c.* On écrit par ex. *oumésit*, & l'on prononce *oumeche*.

また、Захаровъ (1879: 58-59)も、語頭と語中・語末とで si の音価が異なることをより詳しく記している。

“Прим. 2. Слогъ: си, произносимый за: ши, въ некоторыхъ словахъ, особенно въ скорой речи предъ гортанными согласными, теряетъ гласную: и и произносится съ полугласною: ь, т. е. шь, напр. wesihun 沃 希 匀 ь, fusihun 富 希 匀 ь, kesike 克 希 克 э.”

この観点から注目すべきことは、池上(1986: 23)及び落合(1987: 135)でも言及されているが、先に示したようにこの種の注記が第二字頭の sii と第十字頭の sio という音節には書かれていないことである。これは母音 -i- が後続する -i- または -o- で支えられるために、長母音や二重母音は語中・語末でも弱化しないためと思われる。モンゴル語においても、同じように長母音と二重母音には語中・語末でも弱化は生じないことが知られている。

さらに池上(1986: 24)や落合(1986: 179-180)の指摘にある通り、この『清文啓蒙』の注記と対応するものが十八世紀以降の別の満州語文献にもみられる。それは音訳に用いるべき漢字を満州語音節に対置した『対音字式』においてである。その第一字頭、第四字頭及び第五字頭の当該箇所には、次のように書かれている。

si 西○璽○錫○席○習○璽字以下。俱平声読。語気内応読作什字者。仍以什字对音。

sin 新○信○信字。平声読。語気内応読作申字者。仍以申字对音。

sing 星 語気内応読作陞字者。仍以陞字对音。

「什」、「申」及び「陞」はそれぞれ元来は *ši*, *šen*, *šeng* の音訳に用いられるべき無声捲舌摩擦音 [ʃ] を声母とする漢字である。これは、例えば満州語音 sing を漢字音訳する場合、先に述べたように、語中・語末で母音が弱化して *šeng* の音価に近く聞こえることがあるので、本来は後者にあてべき漢字「陞」をそれにあててもよいという規則を述べたものとする。こうした変則は「応読」と呼ばれている。但し、「応読」が適用される場合の条件については『清文啓蒙』のような詳しい記述はなく、慣例的に決まっていたと推測される。

なお、この『対音字式』の注記は、後の『対音輯字』(1890)にも受け継がれている。但し、こちらは『対音字式』とは異なり単に満州語音節と漢字音との対応を示したもので、例字の数は二・三に限定されず極めて多くの漢字が挙げられているので、満州語音の変則事項をこの文献が載せている意図は不分明である。

また、実際に満州語音を漢字で音訳した文献においても、この現象の反映と思われる例をみることができる。それは『清文啓蒙』とほぼ同じ時期の『八旗通志初集』(1738)である。(テキストは『八旗通志列伝索引』東洋文庫満文老檔研究会による)そこでは満州語の人名が漢字を用いて音訳されているが、si を含む音節にどのような字音の漢字があてられているかをみると、次のようになっている。

		si					sin		sing
		西、席、錫、習					辛、新		星
心母字	語頭	18	18	9	0		2	1	5
	語中・語末	10	4	33	5		0	2	4
		士、施、什、石、世、式、実					申		陞
生母字・書母字	語頭	0	0	1	1	0	0	0	0
	語中・語末	2	1	48	2	9	2	2	1

こうした分布、とりわけ現代音で捲舌摩擦音[ʃ]となっている生母字・書母字が、語頭の si(-) の音訳に用いられた例がほとんどみられないことは、上述の現象の具体的な現われと考える。

さらに、満州語の現代語についてのフィールドワークからも、この -i- の弱化とみられる現象が報告されている。まず、服部・山本(1956: 17-18)には

「第2モーラ以下では/i/に該当する母音がほとんど消失して、同一モーラ内の先行子音の漸強性と口蓋音性のみが残ることがある。……」

という観察が述べられ、次の例が挙げられている。

aniya [ʔaŋ]	《年》	hanci [xantʃ]	《近い》
yohi [jœɣ]	《(書物の)一揃》	feniyehe [fɛŋx]	《毛》

(また、同じ現象は/u/, /ə/についても記されている。前者については、後述の錫伯語についても二重調音として報告されている)

また、河野(1979: 544)でも、

……kesike「猫」→kēshk'e; dergi「東」→terigi, derigi「西」(第二音節の i は非常に短い)……

と述べられている。これに続いて、

「一般に強勢は第一音節に置かれ、又その為第一音節の母音は稍 長く発音される。強勢の無い音節の母音は弱く且つ短い。特に三音節の語の第二の母音は極めて短かく、屢々脱落する。……」(p. 545)

とも述べられている。

また、服部(1986: 410-429)は、「……しかし、後になるほど一定して強勢が第1音節に来る傾向が著しくなっているが、これは或いは満州語固有のアクセントの反映かも知れない。」(p. 420)と述べている。そこに記述されているデータにおいては、次のようなアクセントの分布になっている。

	A	B	A + B	C	D
第一インフォーマント	84	25	12	0	24
第二インフォーマント	16	7	1	1	38

A = アクセントが語頭にある例 C = アクセントが語中にある例

B = アクセントが語末にある例 D = アクセントの表記がない例 (主に単音節語)

これらのデータからみると、満州語のアクセントの大半は語頭音節にあり、次いで語末音節にあることが分かる。

また、満州語の現代方言のひとつである錫伯語については、李他(1986: 13-14)で、*k, l, n, r, x* がそれぞれ二重調音として口蓋音性を帯びることが記されている。これらの *kj, lj, nj, rj, xj* はそれぞれ文語で *ki, li, ni, ri, hi* と書かれる綴りの音価とされており、アクセントのない音節において次第に母音を失ったためとされている。なお、「……腭化輔音和唇化輔音大多出現在詞末、個別出現在詞中、不出現在詞首。」(p. 8)と書かれていることも、前述の分布の状況と一致している。また、ストレス・アクセントが第一音節にあることは「四、重音」(p. 18)の項に述べられている。

これらのことから、上に引用した今世紀の現代語の調査にもみられるこの現象、すなわち非第一音節における母音 *-i-* の弱化は十八世紀にはすでに観察されていたことであり、満州語の音声上の特徴のひとつとみなしてよいと思われる。

さて、文語には、*hebtesitembi > hebtesembi* 《肩で息をする》、*huksimbi > hukšembi* 《頭に頂く》のような変異体がみられる。これらの例で注意すべきことは、*si* の変異体が *si* ではなく *še* であることである。『清文啓蒙』では、「賒」が *še* にあてられており、当然この漢字は *si* にあてられる「詩」とは異なる字音を持つ。こうした例は、老満文時代の綴りをそのまま継承している可能性は残る一方で、母音 *-i-* の弱化を反映しているとも考えることも可能である。愛新覚羅(1987: 7-9)参照。また、*dabdurišambi > dabdursambi* 《苟立つ》、*urilembi > urlembi* 《肥満する》、*ijifun > ijefun* 《櫛》のような変異体もある。これらもやはり母音 *-i-* の弱化を反映している例とみるべきかもしれない。

本節においては、文語資料に基づいて *si* における *-i-* の弱化のみを考察したが、弱化がこの環境だけで起きたとは考えにくく、他の状況下でも起きていたことは十分考えられる。さらに、*-i-* だけでなくそのほかの母音も弱化すると思われるが、これらについては次章において考察する。

2. 軟口蓋閉鎖音口蓋垂閉鎖音の変化

次に、池上(1987a: 1)で扱われている現象について論じる。それは、『清文啓蒙』「異施清字」の文字 *-g-* の音価に対する注記である。(注記に用いられている漢字の声母は当時も現代音と同じであったと考えられるので、()内には漢語 拼音字母による対音漢字の字音を示した。以下特に断らないかぎり、同様である) 付録3 参照。

-ga-, -ga 字俱念哈(ha), -gan 字念 悠(han), -gangge 字念 夯 哦(hang+e),
 -go-, -go 字俱念豁(huo), -gon, -gūn 字俱念婚(hun), -gongge 字念 烘 哦(hong+e),
 -gū- 字念呼(hu)

これらは満州文字の -g- が、摩擦音の曉母の音で発音されることがある旨の注記である。池上(1987a: 1-3)は、やはり多くの満州語文献においてもこの現象が言及されていることを明らかにしている。そこにも引かれているが、『対音字式』には以下のような注記がある。なお、これは落合(1986: 180)にも言及がある。

ga	重読	噶 平声読。語気内応読作阿字哈字者。仍以阿字哈字对音。
go	重読	国○郭○俱平声読。語気内応読作武字和字者。仍以武字和字对音。
gan	重読	幹 幹字平声読。語気内応読作罕字安字者。仍以罕字安字对音。
gon	重読	覲○官○語気内応読作歛字者。仍以歛字对音。
gang	重読	剛○綱○語気内応読作杭字者。仍以杭字对音。

「仍以～字对音。」のそれぞれの字は本来 a, ha, u, ho, han, an, hon, hang という音節にあてらえるべきものである。ただし、こちらの文献では gong, gū, gūn に関しては「応読」の表記がみられない。

また、河野(1979: 551)は、文語の jorgon~jorhon《十二月》という例を挙げるとともに、現代語においても閉鎖音が摩擦音になることを述べている。(akū「ナイ」→ak'o, axo; bigan「野」→piāRan など) 文語では、ilga~ilha《花》、doigon~dohon《以前》など、-g-~-h- がバリエントになっている例が極めて多数みられることは言うまでもない。

さて、上述の『清文啓蒙』や『対音字式』に記された現象に対する筆者の解釈を、以下で述べる。筆者によれば、これは男性母音 -a, -o, -ū が後続する場合、これらは非男性母音 -i, -e, -u に比べておおむね広い緩み母音であるため閉鎖音の -g- の調音の際、完全な閉鎖を形成するに到らず狭窄の段階でとどまり摩擦音で発音される場合があるため、それを -h- で書く変異体が存在するものと考え。つまり、これは音声上のバリエントに基づく現象であると考え。

また、この現象は初期の満州語文献にもみることができる。十七世紀中期の文献『〔満文〕大清太祖武皇帝實録』における漢語固有名詞の中には、「姜功立」を jiyang hūng

li と音訳した例がみられる。この例では閉鎖音を声母とする「功(gong)」を摩擦音として書写している。これも見母の発音が、この人名を借用した満州語話者により摩擦音で発音されたため、こう綴られるようになった可能性がある。今西(1967a: 282)によれば、『滿洲實録』においては、正確に giyang gung liyei と改められている。ただし、これはひとつだけの例なので、表記上の問題である可能性も残る。

さて、これまで述べた現象は -g- が -a, -o, -ū に先行する場合だけであるが、池上(1987a: 3)に書かれているように、他の母音に先立つ場合にも同じ現象が起こることがうかがえるのである。『清文啓蒙』「異施清字」には次の例が挙げられている。

šugi 字念書稀(shuxi)	tugi 字念禿稀(tuxi)
febigi 字念仏逼稀(fobixi)	temgetu 字念 𐰽 模呵禿(temohetu)

また、文語の変異形にも次のようなものがある。

šugi = šuhi 《精液》	buge = buhe 《軟骨》
bergu = berhu 《小姑》	

さらに、『清文啓蒙』の次の例も注目に値する。(池上(1986: 14-15)及び落合(1986: 179-180)参照) 同じ例が『清語易言』にも記載されている。

emgi 字念惡 𐰽 因切衣	nemgiyen 字念諾模陰
manggi 念媽烟切衣。又念那烟切衣。	

『対音字式』にも、以下のような注記がある。

ge	歌○格○格字。平声読。語氣内応読作額字者。仍以額字对音。
gi	基○機○吉。吉字。俱平声読。語氣内応読作伊字者。仍以伊字对音。
gen	根 語氣内応読作恩字者。仍以恩字对音。
gin	金○錦○謹○ 錦謹二字。平声読。語氣内応読作音字者。仍以音字对音。
gun 輕読	滾 平声読。語氣内応読作温字者。仍以温字对音。

gu, geng, ging, gung に関してはこのような注記はない。これらの例と注記に述べられていることは、非男性母音に先行する子音 -g- の摩擦音化ではなく完全な消失である。しかし、詳細に分析してみると、上記の『清文啓蒙』と『清語易言』の例は特殊なものであることが分かる。すなわち、これらは語中・語末の -g- が、完全に消失する可能性を反映しているのではなく、注目すべきはこの -g- がすべて別の子音と共起する子音結合になっていることである。その場合鼻音が先行している。通常の発音の場合、鼻音を発するときの閉鎖を保ち解放しないままで、ただちに後続する -g- の調音動作に移ると、この子音結合があたかもひとつの子音であるかのように発音され、-g- が消失したかのような印象をもたらす。作者はこうした聴覚印象に基づいて音訳漢字を決定したものと考える。要するに、上述の『清文啓蒙』と『清語易言』の例は、非男性母音の前の子音 -g- を摩擦音化する現象と同一に考えるべきではなく、『対音字式』で論じられている現象と同じく、環境による特殊なものと考えられるべきであろう。池上(1987a: 1-3)が述べるように、

(1879)及びその他の文献にも男性母音に先行する -g- ~ -h- の記述はあるが、非男性母音の前の -g- にはこうした注記はない。このこともまた同様の原因によると考えられる。

さて、現代語でも、こうした例は顕著にみられる。李他(1986: 10)より引用する。() 内は文語の綴りで、これらの実際の音価については「(1)x, ㄣ 在两个元音之間或在带音的補音 m, l, n, r, v 和元音之間、読作相應的濁擦音 [ɣ], [ɣ]。……」とある。

xorɣun	(horigan)	《囲い》
ɕorɣun bia	(jorgon biya)	《十二月》
ɕoɣun	(jugun)	《道》
amərxi	(amargi)	《北》
gəxə	(gege)	《姉》
sərɣun	(serguwen)	《1)涼しい, 2)涼しさ》

また、山本(1969)にも、男性母音 -a, -o, -ū に先行する -g- が口蓋垂摩擦音 ([ɣ] / [ɣ]) で発音され、非男性母音 -i, -e, -u に先行する場合は軟口蓋摩擦音 ([x] / [ɣ]) で発音される例が多数記されている。

つまるところ、元来閉鎖音を表わしていた文字の -g- を語中において摩擦音で発音することは、どの母音が続く場合でも起こることになる。しかしながら、文献における注記の

有無という差異があるのは、男性母音が続く場合に比べその他の母音が続く場合の -g- の摩擦音化は、十八世紀には未だ明確には認められていなかったためと考える。山本(1969)によれば、

- sogi [ʃog, ʃoegj] 《野菜》(李他(1986: 152)にも「菜 ʃoegw 」とある)
 age [ʔagʰ] 《兄; 自分より年長の男》(同(1986: 150)にも「哥哥 agə」とある)
 agu [ʔaguː] 《男(同輩、少し年長の者)に対する敬称、“…さん”》

のように -g- が語中・語末音節でも閉鎖性を保つ例が存在する。山本(1969)では以下のような分布になっている。

	摩擦音	閉鎖音
非男性母音(-i, -e, -u)に先行する -g-	64例([x] / [ɣ])	19例([g])
男性母音(-a, -o, -ū)に先行する -g-	52例([ɣ] / [ɣ])	2例([q])

こうした現象が、男性母音に先行する場合に比べて非男性母音に先行する場合には少なからずみられるのも、狭い張り母音の持つより大きい調音的緊張が先行子音の摩擦音化を起こさない場合があったためと考えられる。さて、すでにここまでで明らかになっているように、先に論じた母音 -i- の弱化と同様、この現象も語中あるいは語末音節の位置でのみ生じている。言い換えれば、g- は h- にならないのである。『清文啓蒙』では、その分布は母音 -i- の場合のように記されていないものの、g の綴りに曉母字をあてているのはいずれもその音節が中位に立つ文字で表わされる場合である。(池上(1987a: 2)が引用するように、Захаровъ(1879: 57)には、語頭を除く -g- が -a, -o に先行する場合に摩擦音で発音されるとの記述がある)

そして、この現象が語頭では起こらないのも、やはりアクセントがあるせいではっきりした発音になるためであり、逆に語中・語末で完全な閉鎖が形成されないことがあるのは、アクセントがないために調音的緊張が低下して調音様式の変化が起こるからと考えられる。先の現象「母音 -i- の弱化」とこの「軟口蓋閉鎖音・口蓋垂閉鎖音 -g- の摩擦音化」は母音と子音の違いはあるが、同じメカニズムによるものと考えられる。

さて、子音 -g- の大多数は摩擦音になるが、-k- も閉鎖音であるのに変化しない例と変化する例を比べると、前者の例が比較的多い。山本(1969)によれば、-k- を語中・語末

において[k], [g], [q]及び[q']で発音する例は274例あるのに対して、[x], [ɣ], [ɣ] 及び [ɣ] で発音する例は43例になっている。これはすなわち、gが軟音で閉鎖の力が比較的弱く口腔内の呼気圧が低いために、アクセントのない非第一音節では発音の上の緊張度が低落して閉鎖が狭窄に変化することが容易であるのに対して、kは硬音であって閉鎖の力は比較的強く口腔内の呼気圧が高いために、アクセントのない非第一音節でも発音の上の緊張度が容易には低落せず閉鎖を保つことができるためと思われる。これは以下に述べる両唇閉鎖音の摩擦音化に関しても、同様と考えられる。

また、蒙古語においても、VgVV と VbVV が VV になるような類似した現象がある。すなわち、閉鎖音が摩擦音を経て消失にいたる現象である。服部(1959: 42)参照。ただし、短母音が後続する場合は逆に閉鎖音のままであり、すなわち VgV は VgV, VbV は VbV のままである。これが本章で述べた満州語における閉鎖音の摩擦音化と同じ現象かどうかについては、なお考察の必要があろう。

満州語においては、蒙古語の様に、閉鎖音の摩擦音化は消失にいたる前段階であるかどうかは明確ではないが、河野(1979: 551)が、

……上に記した如く大五家子方言の gh は著しく後方で発音され、又屢々 gh は脱落する。例へば gūlmaxūn「兎」→kūlma-o, kūlmagho。上の女眞館譯語の諸例が gh に當る所を幹、兀、温等の文字を以て宛てゝゐるのも恐らく同様な状況を反映してゐるのであらう。尚女眞館譯語では g の屢々脱落してゐる。jugūn「路」：住(cu 或いは cu-u?)〔石田〕, jilgan「聲」：的魯阿(til-an)〔石田〕, gege「姐」：革兀(ke-u)〔石田〕等。

と述べているのは興味深いことである。

さて、Pope(1960: 58-62)には、アルタイ諸語の間でも非第一音節の閉鎖音が摩擦音化する現象が論じられている。これはすなわち、蒙古語の g/g が満州語の χ/x (及び古チュルク語の γ/g) に対応するものである。

“43. Einem ursprünglichen *-g- sowohl in schwacher als auch in starker Stellung entspricht im Mandschu, wie schon gesagt, ein $\chi(x)$, was darauf hinweist, daß das *g dort spirantisch geworden war.

Beispiele:

..... mo. *jatugan* < **pítugan* 'Saiteninstrument' = ma. *filuxan* id." (p. 61)

Benzing(1956: 30)によれば、満州・ツングース語の間においても祖語の母音間の *-g- が満州語及び南方語群のゼロ形態と対応することが指摘されている。

".....tg. **biāga* "月亮" = ma. *biya*, go. *bea*, olč. *orok*.
bē, oroč. *b'ā*, udh. *beʒ*, sol. *bēya* ~ *b'ēya*, negd. *bēya*, ew. *bēga*, lam. *bēg*....."

しかし、Benzing(1956: 28)では、祖語の *k が満州語の k~h に対応する例も挙げられている。この場合、語内部の位置は問わない。

".....tg. **baka* "发现" = ma. *baha*-, go. olč. *orok*.
bā-(~*ba*-), oroč. *baka*-, udh. *b'a*-, sol. negd. *baxa*-, ew. *baka*-, lam. *bak*-. ——
....."

さて、この現象については異なる見方もある。すなわち、-g~-h- という変異体では、前者の文字は後者が有声音間で同化した音を表していると考えるもので、これはこの現象の大多数が有声音間で起きていることに基づいている。成(1990: 49-53)参照。その点は確かに事実であるが、しかし、筆者の見解によれば、もしこれが有声音間における同化であるとするれば、文献の上で男性母音とその他の母音との間に言及の差があるのはどのように考えるべきであろうか。また、筆者によれば、-g~-h- という変異体の例では母音 -a- が接続するものが最も多いが、それはどのように説明するべきであろうか。筆者の見方によれば、これは母音 -a- は最も緩い母音であり、閉鎖が狭窄に変化しやすいためと考える。このほか、成(1990: 49-53)が挙げている例の多くはそれに対応するツングース諸語の形態は閉鎖音 -r- を有しており、蒙古語からの借用語の場合は閉鎖音 -ɣ-/-g- (ハルハ方言では -r-) がある。もちろん、満州ツングース祖語の閉鎖音 *-g- が文語時代以前に、すでに摩擦音(上述のような消失ではなく)に変化したと考えることもひとつの可能性ではある。成先生が引くように、穆(1987: 18)では文語 *ibagan* に対して巴拉語では [ijahan] となり、京語では [ibagan]、阿勒楚喀語では [ivəhan] になっている。やはりこ

の場合では、本来閉鎖音があったと考えるべきであろう。

また、変異体の中には、tasgambi=tashanbi《炒る》がある。これは一例にとどまるが、無声音が接続する変異体であり、有声同化とすることはできない。もちろん、例外として扱うことはできる。

ここで、「2. 軟口蓋閉鎖音口蓋垂閉鎖音の変化」でこれまでに述べた現象をまとめて示すと、以下のようになる。(語中・語末音節では前後の有声音・無声音と同化する)

	語頭音節	語中・語末音節
g	(-i, -e, -u) [g]	[g], [x] / [ɣ]
	(-a, -o, -ū) [G]	[q], [χ] / [ʁ]

さて、文語と錫伯語を比較すると、摩擦音のhに閉鎖音の[k]が対応する例がある。まず、非男性母音 -i, -e, -u に先立つ[k]がhになる20例から5例を挙げる。

hibsu	[kifsu']	《蜂蜜》(この例は早田(1985: 26)にもみられる)
hefeli, hefeliye	[kɜvɔl, xɜvɔl]	《腹; ふところ》
huwesi	[kufɕ']	《あいくち、小刀》
micihiyan	[mitsan, mitʃan; mitʃaq]	《浅い》
bethe	[bɜtɕ, bɜtk]	《脚、肢、足》

李他(1984)に記されている錫伯語の語彙にも同様の例がある。／／内は文語の形式である。

kiram/hirambi/《横目で睨む》, kengke/hengke/《瓜》, kukun/hukun/《肥料・塵》

李他(1986: 161)の「節約 kibɕarəm」もまた文語の hibɕarambi に相当するとみることができ。

次に、男性母音 -a, -o, -ū に先立つ[q]がhになる10例から2例を挙げる。

tahan [taq]《馬蹄鉄》

bosho [boʃqʷ, bɔsɣw] 《腎臓》

これと同様に、愛新覚羅(1992: 238-243)及び馬他(1993: 37)によれば、東北部の満州語でも文語の h に対して閉鎖音が対応する例が記述されている。

これらの文語に対応する他のツングース諸語にも閉鎖音があり、借用語においては蒙古語も同様である。すなわち、錫伯語をはじめ現代語は今日においても閉鎖音を保持しており、文語に反映された方言(すなわち東北地方あるいは北京の満州族支配階層の共通方言)において摩擦音に変化しているのである。この摩擦音化と先述の摩擦音化現象で最も異なるところは、前者は語頭でも起きている点である。そして、若干の例を除いて男性母音 -a, -o, -ū に先立つ [q] が h になるのは語中・語末が主だが、非男性母音 -i, -e, -u に先立つ [k] が h になるのは、位置を問わないようにみえる。これらの例からみる限りでは、これは満州文字の使用開始以前に起きていた摩擦音化であり、文語と錫伯語などの諸方言との乖離の例のひとつであろう。

ただし、『清文啓蒙』には、「*ějihe* 字念惡飢哥(池上(1987a: 3)参照)」とあり、『八旗通志初集』にも以下の例がある。

<i>eljihe</i>	(二濟格(<i>ge</i>))	<i>daldiha</i> (達爾第喀(<i>ka</i>))
<i>unehe baksi</i>	(吳内格巴克什)	<i>saihana</i> (賽喀納)
		<i>camahai</i> (察瑪垓(<i>gai</i>))
		<i>daihan</i> (戴 珮 (<i>gan</i>))

先ほどの例外は次のようなものである。

<i>hadala</i>	[ɣadɔl, qadɔl]	《くつわ》
<i>haksan</i>	[ɣaxɕ, qaxɕɕ, ɣaxsɔn, qaxsɔn]	《けわしい》
<i>hūcin</i>	[qɔɕɕɔn]	《井戸》

しかし、愛新覚羅烏拉熙春(1992: 202-203)及び馬他(1993: 9)では、嫩江方言で文語の k が語頭で摩擦音化している例が3例挙げられている。

3. 唇音の変化

さて、軟口蓋閉鎖音口蓋垂閉鎖音 *-g-* の摩擦音化と同じ現象は、両唇音についてもみられる。文献の中にはこの現象を論じたものはないように思われるが、山本(1969)と李他(1984: 9)、李他(1986: 12-13)には、文語の *-b-* が *[f]* (無声同化) / *[v]* (有声同化) になることの記述がある。

abka [ʔafqa] 《空、天、天気》、 dabambi [davəm] 《越える》

河野(1979: 551)には、「sabu 《靴》 → sabo, sāwe; sabuha 《見夕》 → sabogha, sāwagha」という記述があり、服部(1986: 413)にも文語の abka を [*ʔ·pʰkʰa:*] と発音する例が記されている。(ただし、別のインフォーマントは [*ʔ·pʰkʰa:*] と発音している) これもまた *-g->-h-* と同様に、アクセントのある第一音節では *[b]* という音価になる *b-* が、非第一音節において調音的緊張の低下のために摩擦音化する現象として考えることができる。

4.

なお、「弱化」について言えば、これは音韻変化ではなく音声上の同化現象であり、必ずしも義務的な現象ではない。従って、きわめて強力かつ普遍的な現象ではあるが、弱化の起こらない場合を許容しないほどのものではない。こうした現象が個々の場合で現われるか否かが、その発話の環境に依存していることは言うまでもない。

また、中国東北地方の現代満州語の最近の研究によれば、これまで述べた現象について、より複雑した状況がみられるが、その具体的な研究は稿を改めて論じる考えである。愛新覚羅(1987: 4-6)など参照。なお、池上(1986: 1)によれば、Рудневъ は東北方言と錫伯語を比較して後者の方が前者より文語に近いことを指摘している。趙(1990: 120)も同様の見解を表している。

本章の目的は、満州語における通時的な音の変異を、文語を中心として現代語及び女真語との比較により検討することである。

1. 文語と現代語の母音の比較¹⁾

文語と現代語の母音を比較してみると、さまざまな変異がみられる。これらは、周囲の音的環境から文語の音価が弱化・消失や同化により、現代語の音価になったものとする。烏拉熙春(1990)及び愛新覺羅(1992)参照。

1-1 順行同化

- a > [i] : hairan²⁾ [xærin]
 > [ö] : toodambi³⁾ [tödö̃m, tödum]
 > [u] : burulambi⁴⁾ [buruläm, burulum]
 > [ö] : yonggan⁵⁾ [nyŋien, ɲɔ̃ɔ̃n]
 e > [ɛ] : icembi⁶⁾ [itɛ̃m]
 > [u] : suhe⁷⁾ [suyɜ̃, suyũ]
 i > [u] : furimbi⁸⁾ [furunum]
 u > [i] : girumbi⁹⁾ [girim]

1-3 弱化

- a > [ə] : alban¹⁶⁾ [2alvən]
 i > [ə] : fesin¹⁷⁾ [fɛ̃sən, fəsən]
 o > [ə] : dobori¹⁸⁾ [dɔ̃vər]
 u > [ə] : mudan¹⁹⁾ [mɔ̃dan, mudan]
 ū > [ə] : yadahūn²⁰⁾ [yadχən]

1-2 逆行同化

- a > [i] : adaki¹⁰⁾ [2ədixj]
 e > [a] : dehema¹¹⁾ [(2adɜ̃g) dɜ̃yamɜ̃]
 > [i] : efin¹²⁾ [2ifin]
 > [u] : elu¹³⁾ [2ulw]
 i > [u] : cirku¹⁴⁾ [tɕunwkw, tɕunukw]
 u > [i] : fulcin¹⁵⁾ [fljɛ̃tɕn]

1-4 消失

- a > ∅ : yadahūn²¹⁾ [yadχən]
 e > ∅ : bireku²²⁾ [birk]
 i > ∅ : esihe²³⁾ [2ɜ̃sɕ]
 o > ∅ : giohoto²⁴⁾ [gɔ̃ɔ̃xt, glɔ̃ɔ̃xtw]
 u > ∅ : asuki²⁵⁾ [2ɕskj]
 ū > ∅ : tanggū²⁶⁾ [taŋ]

2. 文語における母音変異の記述

さて、前章で述べたように、母音変異の記述は文献においても、すでにみることができ

る。すなわち、以下のような母音変異が『清文啓蒙』（巻一）の「異施清字」に記述されている。これらは、綴りと異なる当時の口語的変異形を記したものと考えられる。池上(1969: 456-457)、Hauer(1952, 1955)、池上(1986, 1987a, b)参照。

2-1-1 順行同化

e>u : kunesun²⁷⁾ 枯奴(nu)孫(49b)

2-1-2 逆行同化²⁸⁾

a>i : tarbahi²⁹⁾ 他尔逼(bi)稀(50a)

i>u : cibin³⁰⁾ 出(chu)賓(49a)

i>u : cisu³¹⁾ 出(chu)雖(49a)

i>yu: gisun³²⁾ 揪 淤(yu)切孫(49a)

2-1-3 弱化

i>e : sin- 身(shen)(46b)

2-1-4 二重母音化

a>ai: cabi³⁴⁾ 釵(chai)批(48b)

o>e : ongko³³⁾ 惡硬切顆(ke)(50a) e>ei: ekisaka³⁵⁾ 惡(e)意(yi)切欺薩喀(47a)

『清語易言』には、文語の綴りと異なる発音で読まれる例が満州文字で表記されている。『清文啓蒙』とは異なり、漢字音訳上の問題がないので、注目すべきである。池上(1986, 1987a, b)参照。また、付録4 参照。

2-2-1 順行同化

e>u : kunesun>ku nu sun (14b)

2-2-2 逆行同化³⁶⁾

e>i : genggiyen³⁷⁾>gin yen (14a)

2-2-3 弱化³⁸⁾

i>e : -mbi>-me (13b)

2-2-4 消失

u>∅: burulaha⁴⁰⁾>bur la ha (14b)

u>e : umesi³⁹⁾>e me ži (14a)

uruldembi⁴¹⁾>ur de mi (15b)

2-2-5 二重母音化

a>ai : cabi⁴²⁾>cai pi (14b)

cargi⁴³⁾>cai gi (15a)

e>ei : ergi⁴⁴⁾>ei gi(15a)

dehi⁴⁵⁾>dei hi(15a)

i>iye: filembi⁴⁶⁾>fiye le mi(14b)

>ioi: kiru⁴⁷⁾>kioi ru(14a)

o>uwa: joran⁴⁸⁾>juwa ran(15b)

以上の様に、文語と現代語を比較した場合にみられる母音の変異は、すでに文語時代から存在し観察されていたものと考えられ、モンゴル語ではアクセントのない語中・語末の音節の単母音が弱化するだけであることとは異なり、満州語の通時的な音声的特徴のひとつとみなすことができると考える。⁴⁹⁾

3. 文語と現代語の子音の比較

他方、子音については、現代語方言のうち少なくとも錫伯語と満州語文語との間では、母音ほど大きな変異はないように思われる。しかしながら、若干の例では、文語と現代語の音価が異なっている状況がみられる。

3-1 n->[l] nei⁵⁰⁾ [liʰ], neimbi⁵¹⁾ [lim], neibumbi [livəm]

 nehem/lehembi/⁵²⁾

文語例: uyancambi⁵³⁾ > uyaljambi

Цинциус(1975: 650) 及び Цинциус(1975: 558)によれば、満州語の nei, neimbi, neibumbi に対応する他のツングース語諸方言の形態はいずれも鼻音を有しており、この場合は満州語文語の形態の方が祖語に近いと考える。nを[l]で発音することは音声学的には十分考えられ、例えば漢語方言のなかでも西南官話では、[n]~[l]が自由変異になっている。しかし、満州語では、言うまでもなく両音は異なる音素に帰納されるものであり、n->[l]という変化は個別の特異な例とみなすべきであるが、上記の例は文語においてもこの現代語での変化と同じ現象が存在したことを反映すると考える。これは即断はできないが、満州語における方言的差異の現われなのではないかと考える。

3-2 l->[n] nərhidem /largidambi/, nərhin /largin/⁵⁴⁾

文語例: aldasi > andasi⁵⁵⁾, uldefun > undufun⁵⁶⁾

また、このように逆の対応もみることができる。ツングース語の中では、エヴェン語で祖語の*lが語頭ではnになることが知られている。⁵⁷⁾

3-3-1 n > φ⁵⁸⁾ nikan⁵⁹⁾ [jiqan], niru⁶⁰⁾ [nyr, jur]

3-3-2 -ng-> ϕ ginggaun⁶¹⁾ [giguũ], yonggan⁶²⁾ [ɲyŋien, ɲɔŋan]

文語例: niltajambi>*iltajambi(>iltajaha⁶³⁾)

鼻音消失の例には、3-3-1の niru [ɲyr, jur] のように、鼻音を残す変異形と共存するものもある。特に語頭の n の消失は文語と現代語との対応でみられる顕著な特徴のひとつで、下の文語の例も鼻音の消失を表わすものとする。

3-4-1 ϕ > [ŋ] mujangga⁶⁴⁾ [mɔŋdʒaŋ, muŋdʒaŋ]

3-4-2 ϕ > [ɲ] umiyesun, imiyesun⁶⁵⁾ [ɲimsun, ɲymwsun]

yonggan⁶⁶⁾ [ɲyŋien, ɲɔŋan]

3-4-3 ϕ > [ŋ] buleku⁶⁷⁾ [buluŋkw]

文語例: (geterembi>)*geterebumbi>geterebumbi, (gaimbi>)

>*gaidumbi>gaindumbi

これらは、逆に文語にない鼻音が現代語で現われる例だが、環境により様々な異音がみられる。これに対応する文語の例は上のようなものがある。これらの文語における鼻音文字 n のあるなしは、鼻母音を母音字母+鼻音字母と分析的に表示した可能性があるのではないかと推測する。すなわち、唇音 b の前の m と歯音 t、d、c、j の前の n が添加されることは、鼻母音の鼻音的成分を後続音が固定するためではないだろうか。⁶⁸⁾なお、文語には語末に n のある語とない語とが変異体になっている例 (amba~amban) は数多くみられるが、これは鼻母音の反映と考えられる。現代語で、語末の n の前の母音が鼻母音で発音されることは、李他(1986: 6)にあり、また、山本(1969)のデータでも鼻母音が現れるのは文語で語末に n を持つ語の語末母音である。

満州語では鼻母音と口母音は音韻的な対立をなすものではなく、あくまで自由変異として存在するだけであるが、これらの語中の例にみられる鼻音の有無を筆者は鼻母音の反映として説明する考えを提示したい。しかしながら、この仮説の弱点は、現実には語中に鼻母音を持つ満州語方言の記述がないことである。⁶⁹⁾

3-5 -nd->-n-⁷⁰⁾ (gaimbi>)*gaidumbi>gaindumbi=gainumbi

-nd->-n-は文語の変異形としても、多数みられる例で、例えば、gaimbi《取る》に対して、gaidumbi=gaindumbi=gainumbi《一斉に取る》があり、これは《互いに、共に～する》という意味の動詞接辞 -du- の前に生じた鼻音が歯音を同化するものである。すなわち、これらの文語の変異形は、[nd]>*[nn]>[n]という同器性鼻音による同化を反映していると考えられる。⁷¹⁾

3-6 -m->-ng- semkele⁷²⁾ [sɜmkɔl] > sengkule

この例において、現代語の [sɜmkɔl] にあたる文語は semkele で、同じ意味の文語の sengkule は後続の軟口蓋音が両唇音を同化した形態と考えられる。

3-7 -r->[nw]/[nu] cirku⁷³⁾ [tʃunkw, tʃunukw]

これは調音点を同じくする流音と鼻音の交代で、[r]>*[rw]>[nw]>[nu]という過程が考えられる。これは 3-2 の l->[n]と類似した変化である。

3-8 ϕ > [r] aššambi [ʔarsəm, ʔaʃʃəm]

文語例: gelešeme~geleršeme⁷⁴⁾

この例における[r]/-r- は、-š- の捲舌性がふるえ音として先だって現われたものかもしれない。

3-9 s-> [tʃ] / [tʃ] ⁷⁵⁾ sikse [tʃksɜ, tʃksɜ]

摩擦音と破擦音の対応は、満州語と他のツングース語との間にもみられる。

ここまで述べてきた例は、満州語において文語と現代語で子音の音価が異なるもので、かつ同じ例が文語内の変異形としても観察されるものである。これらの原因として、満州語文語がいくつかの異なる方言的異形態を包含しているという可能性が考えられると思う。⁷⁶⁾

4. 女真語から満州語への母音の変異⁷⁷⁾

さて、女真語と満州語文語を比較した場合にも、同じように同化などの音声現象による音価の変異と考えられる例をみることができる。

はじめに母音に関しては、以下の通りである。

- 4-1-1 順行同化 a>o : 埋^[sic]番住 fan^yumai 《問う》>fonjimbi 同⁷⁸⁾
- 4-1-2 e>u : 恩革埋^[sic] engemer 《鞍》>enggemu 同⁷⁹⁾
- 4-1-3 i>a : 阿民 amin 《父》>ama 同⁸⁰⁾
: 哈子哈 hajihā 《はさみ》>hasaha 同⁸¹⁾
- 4-1-4 u>a : 阿卜哈 abuha 《葉》>afaha 同⁸²⁾
- 4-1-5 u>o : 卜素 bosu 《布》>boso 同⁸³⁾
- 4-2-1 逆行同化 e>u : 脉出 meču 《葡萄》>mucu 同⁸⁴⁾
- 4-2-2 o>u : 幹失哈 ošihā 《星》>usiha 同⁸⁵⁾
- 4-3-1 弱化 a>e : 歸法^[sic]刺 guwifala? 《杏》>guilehe 同⁸⁶⁾
- 4-3-2 u>e : 亦宣都 ishundu 《互いに》>ishunde 同
- 4-4-1 消失 a>∅ : 弗刺江 fulagiyan 《赤い》>fulgiyan 同⁸⁷⁾
: 古刺哈 gulaha 《靴》>gūlha 同⁸⁸⁾
: 虎刺孩捏兒麻 hulahai niyarma 《賊人》>hūlha 《賊》⁸⁹⁾
- 4-4-2 e>∅ : 卜羅厄林 bolo erin 《秋》>bolori 同⁹⁰⁾
: 朱阿厄林 juwa erin 《夏》>juwari 同⁹¹⁾
: 脉 忒 厄林 mädə-əri ⁹²⁾《海》>mederi 同
: 替勒庫 tireku 《枕》>cirku 同⁹³⁾
- 4-4-3 i>∅ : 厄林厄 eringe⁹⁴⁾ 《氣》>ergen 《生命》
: 失失黑 šišihe 《襪》>sishe 《しとね》⁹⁵⁾
- 4-4-4 u>∅ : 嫩木和 nonmuho 《善》>nomhon 《実直な》⁹⁶⁾
- 4-5 単母音化 ia>o : 嫩江 niyongiyan 《青》>niohon 《薄緑》⁹⁷⁾
- 4-6-1 二重母音化 a>ai : 哈里兀 hariyu 《海獺》>hailun 《獺》⁹⁸⁾
- 4-6-2 o>uwa : 瑣江 sogiyan 《黄》>suwayan 同⁹⁹⁾
- 4-6-3 uwa>a : 卜阿以 buwai 《地方》>ba 《場所》¹⁰⁰⁾
- 4-6-4 wei>i : 委罕 weixan 《牛》>ihan 同¹⁰¹⁾

なお、次の三例は、女真語から満州語への過程で $ti > ci$, $di > ji$ となったのち、満州語において弱化あるいは逆行同化が生じたものと考えられる。

$i > e$: 革替勒 getile 《凍る》 > gecembi 同¹⁰²

$i > o$: 替和 tiko 《鶏》 > coko 同¹⁰³

$i > a$: 的哈 diha 《船》 > jaha 《刀船》¹⁰⁴

こうした両言語間にみられる母音の変異も、満州語における弱化・同化・消失という音声現象と同様のものと考えられる。

5. 女真語から満州語への子音・音節の変異

子音の変異は主に消失であるが、5-2-1 や 5-8 などでは規則的な音韻構造の変化である。

5-1 $b > f$ ¹⁰⁵ : 阿卜哈 abuha 《葉》 > afaha 同¹⁰⁶

: 脱卜歡 tobohon 《十五》 > tofohon 同¹⁰⁷

5-2 $di > ji$: 哈的 hadi 《貴》 > haji 《親密な》, ……

5-3-1 $g > \phi$: 瑣江 sogiyan 《黄》 > suwayan 同¹⁰⁸

5-3-2 $gu > \phi$: 都古味 dugumei 《打つ》 > (dumbi) tūmbi 同¹⁰⁹

5-4 $h > \phi$: 哈都 hadu 《服》 > adu 同¹¹⁰, ……

5-5 $k > h$: 兀住康克勒昧 uju kankelemei 《叩頭する》 > hengkilembi 同¹¹¹

5-6-1 $n > \phi$: 阿民 amin 《父》 > ama 同¹¹²

5-6-2 $\phi > n$: 一麻吉 imagi 《雪》 > nimanggi 同¹¹³

5-7 $ti > ci$: 替勒庫 tireku 《枕》 > cirku 同, ……

6. 満州祖語・蒙古語 > 満州語 > 女真語 (母音)

これらに対して、なかには逆に女真語の方が変化が進み、満州語の方がより祖語に近い形態を残しているのではないかと考えられるものがある。¹¹⁴

6-1-1 順行同化 $a > u$: amala 《後に》 > 阿木魯 amulu 同¹¹⁵

: amargi 《後》 > 阿木魯該 amurgai 同¹¹⁶

- : buda 《飯》 > 卜都乖 budu-goi 同¹¹⁷>
- : hūntahan 《盃》 > 忽秃罕 hutuhan 《鐘》¹¹⁸>
- 6-1-2 e > u : uhukən 《やわらかい》 > 兀魯忽洪 ulhuhun 同¹¹⁹>
- 6-2-1 逆行同化 a > i : cacari 《布製の四角の天幕》 > 扎赤里 jačili 《帳房》¹²⁰>
- 6-2-2 e > u : eshun 《生の》 > 兀速洪兀魯黒 ushun urhe 同¹²¹>
- 6-2-3 ū > i : hūcin 《井戸》 > 希石 hiši 同¹²²>
- 6-3-1 弱化 a > e : tuwa 《火》 > 脱委 tuwe 同¹²³>
- 6-3-2 i > e : ergi 《方》 > 脉^[sɪc]児革以哈稱因 ergei hačɪn 《方物》¹²⁴>
- : šeri 《泉》 > 舍厄 ʃə-ə 同¹²⁵>
- 6-4-1 消失 a > ∅ : adali 《同様に》 > 阿的 adi 《等》¹²⁶>
- 6-4-2 i > ∅ : muduri 《龍》 > 木杜兒 mudur 同¹²⁷>
- 6-5 母音挿入 ∅ > a : sargan 《妻》 > 薩那罕 sanaxan 同¹²⁸>
- 6-6-1 二重母音化 a > ai : amargi 《後》 > 阿木魯該 amurgai 同¹²⁹>
- 6-6-2 i > ie : bimbi 《有る》 > 別厄塞因別 biye sainbi 《有益》¹³⁰>

7. 満州祖語・蒙古語 > 満州語 > 女真語 (子音・音節)

同様に、子音や音節に関しても、女真語の方が変異の進んだ形態と考えられる例がある。

- 7-1 b > w : alban 《公務・正賦》 > 阿剌瓦吉 arawagi 《勅》¹³¹>
- : dobori 《夜》 > 多羅幹 dorowo 同¹³²>
- : dube 《末端》 > 都厄勒 duwele 《盡》 同¹³³>
- : ebuhu sabuhū 《せかせかと》 > 厄兀魯 əwu-lu 《即・忙》¹³⁴>
- : tubihe 《果実》 > 秃幹黒 tuwehe 《果》¹³⁵>
- 7-2 c > j : cacari 《布製の四角の天幕》 > 扎赤里 jačili 《帳房》¹³⁶>
- 7-3-1 g > ∅ : jugun 《路》 > 住兀 dʒu-(g)u 同¹³⁷>
- : *medige(>mejige) 《消息》 > 脉的厄 mə-di-(g)ə 同¹³⁸>
- : turgun 《原因》 > 秃魯温 tur-(g)un 《序・縁故》¹³⁹>
- : ulgiyan 《豚》 > 兀黒^[sɪc]彦 uliyan 《猪》¹⁴⁰>
- 7-3-2 gila > ∅ : dagilambi 《準備する》 > 荅別刺魯 dabilaru 《備寫》¹⁴¹>
- 7-4-1 h > ∅ : hojihon 《女婿》 > 和的幹 hodiyo 同¹⁴²>

- : tuhembi 《落ちる》 > 秃幹黒 tu-wə-xei 《落》^{143>}
 : yarha 《豹》 > 牙刺 jara 同^{144>}
 7-4-2 han > φ : kūdarhan 《鞞》 > 忽的刺 hudila 同^{145>}
 7-5-1 k > h : jaka 《物》 > 扎哈 jaha 《件》 同^{146>}
 7-5-2 > φ : saikan 《美しい》 > 塞岸 sai-an 《善》^{147>}
 7-6-1 l > n : aldasi 《半途》 > 岸丹朶 andando 《沿途》^{148>}
 7-6-2 > φ : adali 《同様に》 > 阿的 adi 《等》^{149>}
 7-6-3 φ > l : uhukēn 《やわらかい》 > 兀魯忽洪 ulhuhun 《軟》^{150>}
 7-7 m > w : nimaha 《魚》 > 里襪哈 liwaha 同^{151>}
 7-8-1 n > l : anagan-i biya 《閏月》 > 阿刺哈 alaga 《閏》^{152>}
 : nimaha 《魚》 > 里襪哈 liwaha 同^{153>}
 7-8-2 ng > φ : hengke 《瓜》 > 黒克 xə-kə 同^{154>}
 : tonggo 《糸》 > 脱戈 togo 《線》^{155>}
 7-9-1 r > n : sargan 《妻》 > 薩那罕 sanaxan 同^{156>}
 7-9-2 > φ : dere 《顔》 > 忒 厄 tee 《面》^{157>}
 : mederi 《海》 > mədə'ə 同^{158>}
 : šeri 《泉》 > 舍厄 ʃə-ə 同^{159>}
 7-9-3 ri > φ : singgeri 《鼠》 > 申革 šinge 同^{160>}

なお、ここでは各項の当該部分だけの比較のために、それぞれの語例を挙げている。例えば、上の 7-3-1 のふたつめの例で満州語の方がより祖語に近いという点を示しているのは、語中の g を持っている点だけであり、全ての点で majige が mə-di-(g)ə に先行するわけではない。すなわち、第二音節に関しては mə-di-(g)ə の方が古く、第三音節に関しては majige の方が古いのである。これらは、女真語の方の変異が先行し、一層変化の進んだ形態になっているためと考える。このことは Kiyose(1977: 46)で、母音調和に關し満州語の方が古い状況をとどめているとしていること通じるのではないかと考える。

8. 現代語と女真語の対応

女真語	現代語（錫伯語）	文語
8-1 流音～鼻音 ¹⁶¹⁾ 里鞞哈 liwaha 《魚》		nimaha 同
	[liʷ] 《汗》	nei 同
	nehem 《追跡》	/lehembi/ 同 ¹⁶²⁾
	[ʧʊnwkw, ʧʊnukw] 《枕》	cirku 同
薩那罕 sanaxan ¹⁶³⁾ 《妻》		sargan 同

これまでにみたものから、個別に現代語と女真語に近い様子を示す例を提示する。まず、8-1は、先の $n \rightarrow [l]$ か $l \rightarrow [n]$ のどちらに対応する現象か断定はできないが、《魚》の意味の文語 nimaha に対し、女真語「里鞞哈」liwaha がある。その下の《枕》と《妻》の語例では、文語の r に対して、それぞれ鼻音が対応しているものである。

8-2 鼻音添加

	ト弄庫 *buluṅkü(?) ¹⁶⁴⁾ 《鏡》[buluṅkw]《鑑》	buleku 《鏡》
	一麻吉 imagi 《雪》 [ɲimaŋ] 同	nimanggi 同 ¹⁶⁵⁾
	因馬刺 inmala 《桑》 [ɲimalən] 同	nimalan 同 ¹⁶⁶⁾
Cf.	[jiqan] 《漢民族》	nikan 同
Cf.	[ɲyr, jur] 《矢》	niru 同

8-2では、《鏡》を意味する文語の buleku に対する女真語「ト弄庫」*buluṅkü(?) と現代語の [buluṅkw] で軟口蓋鼻音が現れている。また、その下の《雪》と《桑》の語では、文語が有している語頭の鼻音を女真語は持たず、下の《漢民族》と《矢》の語では、文語が有している語頭の鼻音を現代語が持たないという類似した対応をみせている。但し、[ɲimaŋ] 《雪》、[ɲimalən] 《桑》は現代語は語頭鼻音を持っている。

8-3 破擦音～摩擦音

矢里黒 širihe 《沙》	sikse 《昨日》
*čirγ o ¹⁶⁷⁾ 《沙》	[ʧʰksɜʰ, ʧʰksɜʰ] 《昨日》

8-3は、《昨日》を意味する文語と現代語で摩擦音と破擦音が対応する例と、Kiyose (1977: 40)で挙げられている、摩擦音を持つ女真語 *širihe に対する破擦音を持つ会同館訳語の例 *čirɣo という異形態の対応である。¹⁶⁸⁾

8-4 di > ji, ti > ci

的勒岸 dilgan 《声》 [dʒɛlɣan]

jilgan 同

(Cf. diyansi < 典史)

[ʔɛdixj] 《隣》

adaki 同

塔替卜魯 tatibutu 《習学》 [tatʃɛm] 《習う》

tacimbi 同

(Cf. tingse < 亭子)

[ʔɛtiŋ] 《いつ》

atanngi 同

また、女真語と現代語の間の構造上の類似性を、ひとつ指摘することができる。すなわち、閉鎖歯音 + 前舌狭母音を許容するかどうかで、女真語には「的」、「替」で音訳される di, ti があるが、これが文語では例外なく破擦音化して、[dʒi], [tʃi] となる。ただし、漢語からの借用語では外国音として閉鎖音のまま許される。¹⁶⁹⁾

他方、現代語では、[di], [ti]が固有語にも現れる。つまり、閉鎖歯音 + 前舌狭母音を固有語でも許容する構造に「先祖返り」するのである。ただし、上の例にみるように、女真語の di, ti が破擦音化せず直接後代に引き継がれたのではないことは明らかで、現代語の [di], [ti]は母音の同化から生じたもので、女真語の di, ti は現代語でも文語同様、[dʒi], [tʃi] になっている。

8-5 兀速洪兀魯黑 ushun urhe 《生熟》 [ʔusxən, ʔuswxun] 《生の》 eshun 同

兀魯忽洪 ulhuhun 《軟》 [ʔulukw] 《やわらかい》 uhuken 同

8-5は、個別の音価について女真語と現代語が近く文語がやや異なっている例である。言うまでもなく、このことで直ちに女真語と現代満州語との親近性を断じることはできないが、興味深いことである。

さて、満州語における変異形の間を、文語を中心として女真語と現代語との比較を通

して論じてきたが、最後に満州語文語にみられる変異形の全てが、必ずしもこのように、母音の同化や子音の変化によるものばかりではないことを述べなければならない。むしろ、量的には簡単な説明の困難な例の方が少なくないが、その理由としては、これまでにみてきた文語の通時的変異や現代語方言間の変異に加えて、正書法上許容される慣習的な異形態の存在が指摘される。これは、あくまで正書法の問題で、有圈点文字創設の理由と矛盾するようだが、本来、圈点の有無により区別されるべき対立する子音であっても、慣習的に許されている語は無圈点文字で書くことがあり、同時代人に明らかであれば、有圈点文字が使われる時代になっても、綴りとしては無圈点時代のものを受け継ぐことがあったと考えられる。¹⁷⁰⁾このことは崇徳三年の満文本牌を扱った松村(1971: 58)で論じられていることで、特に注意すべきである。子音の変異形を調べてみると、帯気性だけで対立する d/t, j/c の異なっている異形態が、他に比べて特に多いことはその反映と考えられる。これは正書法の慣用的な例外とみるべきであり、これを全て音的变化に基づくと考えるところは疑問である。

さらに、満州語と女真語の音価の比較に関しては、女真語の再構音価の問題がある。金・金(1980: 108-183)でも論じられているように、女真語の個々の語の音価に関してはまだ未確定の部分が少なくなく、本章で扱った音価の変異はその点から今後異なる音が設定されるならば、それに応じて変更を余儀なくされる場合がありうることを認めておかねばならない。

注

- 1) 本章では特に言及しない限り、現代語の例は山本(1969)により、ツングース語方言の例は Цинциус(1975, 1977)によった。また、蒙古語の文語形は小沢(1983)によった。
- 2) 蒙古語文語 qayiran, モンゴル語 хайран から借用したエウエンキー語及びソロン語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の子音 p の後ろでは、母音 a, \tilde{a} がある。
Цинциус(1975: 362)参照。
- 3) オロチ語、オルチャ語、ナーナイ語、女真語の諸形態の子音 л の後ろには母音 a がある。Цинциус(1977: 171-172)参照。
- 4) 蒙古語文語 buruGula-, モンゴル語 буруулах から借用したソロン語においても、子

音 λ の後ろには母音 \bar{a} がある。Цинциус(1975: 115)参照。

- 5) 対応するオロチ語、ウデヘ語では、子音 h の後ろには母音 o があるが、エウエンキー語、エウエン語及び対応するソロン語、ネギダル語では母音 a , \bar{a} , \acute{a} がある。

Цинциус(1975: 320-321)参照。

- 6) ナーナイ語及び対応するオロチ語、ウデヘ語、オルチャ語の諸形態では子音 $ч$ の後ろには母音 \bar{o} がある。Цинциус(1975: 335-336)参照。

- 7) ソロン語では第二音節に母音 y があるが、エウエンキー語、ソロン語の方言形態、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、ナーナイ語には母音 \bar{o} , \bar{a} , \acute{e} がある。蒙古語文語 $s\ddot{u}ke$, モンゴル語 $c\ddot{y}x$ 。Цинциус(1977: 123)参照。

- 8) オロチ語、ナーナイ語の方言形態の中には、子音 p の後ろには母音 o 、 y があるものもあるが、オルチャ語、ナーナイ語では子音 p の後ろには母音 $и$ があり、対応するエウエンキー語の形態にも母音 $и$ がある。また、ネギダル語、ウデヘ語の再構形においても、同じ母音がある。Цинциус(1977: 352)参照。

- 9) 女真語では流音の後ろに母音 u がある。Kiyose(1977: 116)参照。

- 10) 対応するエウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の諸形態の子音 λ の後ろには母音 a がある。Цинциус(1975: 14)参照。

- 11) 満州語から借用したナーナイ語でも、第二音節には母音 \bar{o} がある。Цинциус(1975: 231)参照。

- 12) 対応するエウエン語の方言形態では語頭音節に母音 $и$, $\bar{и}$, \bar{a} , \bar{o} があるが、エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語及び対応するオロチ語の形態には母音 \bar{o} がある。

Цинциус(1977: 434-435)参照。また、ウイльта語、ナーナイ語及び対応するウデヘ語、オルチャ語の諸形態の第一音節には母音 y がある。

- 13) オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では語頭音節には母音 \bar{o} がある。Цинциус(1977: 448)参照。

- 14) エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では第一音節に母音 $и$ がある。Цинциус(1977: 187)参照。

- 15) エウエン語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では第一音節に母音 y , \acute{y} , o がある。Цинциус(1977: 346)参照。

- 16) 対応するエウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、ウデヘ語、オルチャ語、オロチ語、

- ナーナイ語の諸形態の子音 6 の後ろには母音 a、ă がある。エウエン語の方言形態には a、ă、o がある。蒙古語文語 alba-n, モンゴル語 алба(н). Цинциус(1975: 30) 参照。
- 17) エウエンキー語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では子音 c の後ろには母音 и、ĩ がある。また、エウエン語の方言形態では母音 ä、ө、ə、ъ がある。蒙古語文語 esi, モンゴル語 иш, эш. Цинциус(1977: 371) 参照。
- 18) エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では子音 6 の後ろに母音 o、ô がある。また、エウエン語の方言形態では子音 6 の後ろに母音 o、a、ý、ĩ がある。Цинциус(1975: 213-214) 参照。
- 19) エウエンキー語、ウデヘ語、ウイльта語、ナーナイ語及び対応するオロチ語、オルチャ語の諸形態の第一音節に母音 y、ý、o、ô がある。Цинциус(1975: 542) 参照。
- 20) 蒙古語文語 yadaGu, モンゴル語 ядууから借用したエウエンキー語には、語末音節に母音 ū がある。Цинциус(1975: 337-338) 参照。
- 21) 蒙古語文語 yadaGu, モンゴル語 ядууから借用したエウエンキー語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語及び対応するソロン語、ウデヘ語、ナーナイ語の諸形態の子音 л の後ろには母音 a がある。Цинциус(1975: 337-338) 参照。
- 22) オルチャ語、ナーナイ語では子音 p の後ろには母音 ə がある。Цинциус(1975: 85) 参照。
- 23) オロチ語、ウイльта語、ナーナイ語及びネギダル語の方言形態には、子音 c の後ろに母音 и がある。また、オルチャ語の再構形においても同じ母音がある。Цинциус(1977: 442-443) 参照。
- 24) ソロン語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では子音 г、x、x_h の後ろには母音 o、a がある。Цинциус(1975: 145) 参照。
- 25) 対応するエウエンキー語では母音がなくエウエン語には ĩ があるが、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語には子音 c の後ろには母音 ý、o がある。Цинциус(1975: 383) 参照。
- 26) ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語及び女真語では語尾音節には母音 y、ý、o、u がある。Цинциус(1977: 163) 参照。
- 27) 蒙古語文語 künesü-n, モンゴル語 хүнс(эн), ブリヤート語 хүнэхэ(н). Цинциус(1975: 477) 参照。

28) 確実性はいささか劣るが、次の例も同じ可能性が考えられる。

逆行同化 $e > i$: cecike 七(qi)七 磕 (48b)

29) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語では子音 6 の後ろには母音 a がある。蒙古語文語 tarbaG-a-n, モンゴル語 тарвага(н), ヤクート語 тәрбаһан. Цинциус(1977: 167-168)参照。

30) これは唇音 b による円唇母音化と考えられる。ナーナイ語、女真語では第一音節に母音 \dot{u} 、 i があり、対応するエウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語の諸形態にも母音 и、 \bar{u} 、 \dot{u} 、 e がある。また、エウエン語には母音 \dot{u} 、 \bar{u} 、 \dot{u} 、 \bar{o} があり、再構形は *чйвқачән である。Цинциус(1977: 398)参照。

31) 対応するソロン語の形態の第一音節には、単母音 i がある。Цинциус(1977: 400)参照。

32) ナーナイ語では第一音節に母音 и があり、対応するエウエンキー語の形態にも母音 и がある。Цинциус(1975: 156)参照。

33) エウエン語では母音 a、 \dot{u} もあるが、エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オルチャ語、ウイльта語及び対応するオロチ語、ウデヘ語、ナーナイ語の語尾音節には母音 o がある。Цинциус(1977: 21)参照。

34) 蒙古語文語 čabi-n, モンゴル語 цавь(ин). Цинциус(1977: 375)参照。

35) ウイльта語、ナーナイ語及び対応するエウエンキー語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語の諸形態の語頭音節には単母音 \bar{o} がある。Цинциус(1977: 447-448)参照。

36) 確実性はいささか劣るが、次の例も同じ可能性が考えられる。

逆行同化 $i > u$: jiduji > ju dui ji(14b)

37) オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語及び女真語の第一音節には単母音 \bar{o} 、 e がある。Цинциус(1977: 177)参照。

38) 弱化 $iy > i$: genggiyen > gin yen(14a)に関して、ナーナイ語の子音 r の後ろには母音 и \bar{u} 、и、 \bar{o} 、 \bar{u} がある。Цинциус(1975: 177)参照。

39) エウエン語には語頭音節に母音 \bar{o} 、 y がある。これは、第一音節で母音が弱化している希有な例とみられる。Цинциус(1977: 30)参照。

40) 蒙古語文語 buruGula-, モンゴル語 буруулах より借用したソロン語においては、子音 p の後ろには母音 \dot{u} がある。Цинциус(1975: 115)参照。

41) 蒙古語文語 uraldu-, モンゴル語 уралдах. Цинциус(1977: 284)参照。

- 42) 蒙古語文語 čabi-n, モンゴル語 цавь(ин). Цинциус(1977: 375)参照。
- 43) 対応するエウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の諸形態の第一音節には単母音がある。Цинциус(1977: 376-377)参照。
- 44) ウデヘ語の語頭音節には、単母音 \bar{a} がある。Цинциус(1977: 432)参照。
- 45) 満州語から借用したソロン語、オルチャ語、ナーナイ語では、第一音節に単母音がある。Цинциус(1975: 215)参照。
- 46) エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の第一音節には、単母音がある。Цинциус(1977: 345)参照。
- 47) 漢語「旗(qi)」からの借用語である。文語の -ioi- は漢語などの [y] を表記する綴りであるので、ここでは次の過程が考えられる: [kiru] > [kiuru] > [kyru]。
- 48) 対応するナーナイ語では第一音節は二重母音であるが、エウエンキー語、エウエン語は単母音である。蒙古語文語 jiruGa, モンゴル語 жороо. Цинциус(1975: 260)参照。
- 49) 池上(1986, 1987a, b)参照。また、趙(1989)によれば、東北方言では状況は一層複雑になっているようである。

さて、『大清全書』(1683)と『御製清文鑑』(1708)の語形を比較してみられる、これらと同様の母音の変化に対しても、以下のように調音的な説明が可能である例がみられる。

○前進同化

(i >) e > o: borbe > borbo (蒙古語文語 borbi, モンゴル語 борви. Цинциус(1975: 95)参照)

i > u: ufihi > ufuhi (ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では第二音節に円唇母音があるが、蒙古語文語 qubi, モンゴル語 хувь から借用したエウエンキー語には母音 и がある。Цинциус(1975: 403)参照)

o > u: nionioro > nionioru (次の過程を考えることができる: [nionioro] > *[niuniuro] > [nynyro] > [nynyru]. ナーナイ語の語末音節には、母音 o がある。

Цинциус(1975: 403)参照)

u > a: hadufun > hadafun (蒙古語文語 quduGur, モンゴル語 хадуур から借用したエウエンキー語、ソロン語の形態には第二音節に円唇母音がある。また、オルチャ語及び

対応するナーナイ語の形態にも円唇母音がある。Цинциус(1975: 360-361)参照)

○消失

a>φ: *sarakū>sarkū (次の過程が考えられる: sambī 《知る》>sa- (語根) +
-ra- (形動詞接辞) + akū (否定辞)>*sarakū>sarkū)

o>φ: tomorohon>tomorhon (蒙古語文語 tomurun, モンゴル語 томруун. Цинциус
(1977: 196)参照)

u>φ: suruhūn akū>surhūn akū

○母音挿入

φ>a: *anafu>anfu (「安(an) + 撫(fu)」>anafu 《防御》)

○単母音化

uwa>o: suwanda>sonda (「蒜(suan) + da 《根》」> suwanda 《韭》)

○二重母音化

単母音の二重母音化も、同化による現象である。

a>ai: abimbi>aibimbi (エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、ウイльта語で
は第一音節に単母音がある。蒙古語文語 qabud-, モンゴル語 хавдах. Цинциус(1975:
9-10)参照)

(i>)e>ei: kebisu>keibisu (蒙古語文語 kibis-n, モンゴル語 хивс(эн).

Цинциус(1975: 444)参照)

※成(1990)では、これと同様に、文語の変異形が多数記述されている。

また、『舊満洲 檔 天總九年 檔』にみられる異形態は以下の通りである。神
田他(1972, 1975)参照。

○前進同化

e>u: küremu(p. 26) (>kurume 蒙古語文語 kürm-e, モンゴル語 хүрэм. Цинциус
(1975: 437)参照)

: umusi(p. 197, p. 218, p. 234) (<umesi エウエン語では子音mの後ろに母音
əがある。唇音による円唇母音化である。Цинциус(1977: 30)参照)

i>u: baturi(p. 73) (>baturu オロチ語、オルチャ語では語尾音節に母音и、й
がある。Цинциус(1977: 61-62)参照)

: umesihün(p. 81) (>umušuhun オルチャ語、ナーナイ語では子音 c の後ろに母音 и がある。Цинциус(1977: 272)参照)

○逆行同化

e>u: etehün(p. 184) (>etuhun 女真語及び対応するエウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイルタ語、ナーナイ語の諸形態の子音 т の後ろには母音 э、e がある。Цинциус(1977: 470), Kiyose(1977: 141)参照)

i>u: keibusu(p. 247) (<keibisu 蒙古語文語 kibis-n, モンゴル語 хивс(эн). Цинциус(1975: 444)参照)

: siru(p. 247, p. 267) (>šuru オロチ語、オルチャ語、ウイルタ語、ナーナイ語では語頭音節に母音 и があり、またウデヘ語の再構形は *сируである。Цинциус(1977: 80)参照)

u>i: ifiha(p. 106) (>ufimbi オロチ語の語頭音節には母音 и がある。Цинциус(1975: 322)参照。唇音による円唇音化である)

e~u: umesihün(p. 81) (~umušuhun エウエンキー語、エウエン語、ウイルタ語では子音 м の後ろに母音 y があるが、ネギダル語、オルチャ語、ナーナイ語では母音 э があるために、e>u か u>e の両方の可能性が考えられる。Цинциус(1977: 272)参照)

○弱化

i>e: ijefun(p. 53) (<ijifun エウエンキー語、ネギダル語、ウイルタ語、ナーナイ語及び女真語の第二音節には母音 и、й、i がある。オルチャ語では母音 э~и が、方言的変異体になっている。Цинциус(1975: 296-297)参照)

u>e: küremu(p. 26) (>kurume 蒙古語文語 kürm-e, モンゴル語 хҮрэм. Цинциус(1975: 437)参照)

○消失

u>φ: burlambi(p. 74) (<burulambi 蒙古語文語 buruGula-, モンゴル語 буруулах より借用したソロン語においては、子音 p の後ろには母音 y がある。Цинциус(1975: 115)参照。

○母音挿入

φ>a: anfu(p. 65) (>anafu 「安(an) + 撫(fu)」>anafu 《防御》)

φ > o: fomci(p. 35) (> fomoci エウエンキー語、ネギダル語では子音 m の後ろに母音がある。Цинциус(1977: 365-366)参照)

○二重母音化

(i >) e > ei: kebisu(p. 350) (> keibisu 蒙古語文語 kibis-n, モンゴル語 хивс(эн). Цинциус(1975: 444)参照)

i > iye: elgin(p. 62) (> elgiyen(p. 64) ナーナイ語では子音 r の後ろは単母音である。また、ウイльта語、オルチャ語の再構形は *элги, *элгинである。Цинциус(1975: 448)参照)

50) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語の方言形態、ウイльта語、ナーナイ語では語頭に鼻音がある。Цинциус(1975: 650)参照。

51) エウエンキー語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では語頭に鼻音がある。Цинциус(1975: 588)参照。

52) 李他(1984: 204)参照。蒙古語文語 neke-, モンゴル語 нэхэх。

53) 『大清全書』参照。エウエンキー語、オルチャ語、ナーナイ語では鼻音がある。Цинциус(1977: 251)参照。

54) 李他(1984: 208-209)参照。エウエンキー語、オルチャ語、ナーナイ語では語頭に流音がある。Цинциус(1975: 494)参照。

55) 『大清全書』参照。蒙古語文語 alda, モンゴル語 алд からの借用語のエウエンキー語及びオルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語には流音がある。また、オロチ語、ウデヘ語の再構形は *алдан となっている。Цинциус(1975: 30-31)参照。

56) 『大清全書』参照。対応するエウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の諸形態には流音がある。Цинциус(1977: 265)参照。

57) 女真語の[n]~[l]の交代に関しては、金・金(1980: 121-123)参照。

58) 『清文啓蒙』には、meni meni 摸衣(yi)切摸 呢 (48b)がある。エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では 鼻音 n がある。Цинциус(1975: 590)参照。なお、上記註 50) のウデヘ語参照。

59) ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ナーナイ語では語頭音節に鼻音 n がある。Цинциус(1975: 590)参照

- 60) エウエンキー語の方言形態には jyp があるが、エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語には語頭に鼻音がある。Цинциус(1975: 648)参照。
- 61) 漢語「敬恭(jinggong)」からの借用語である。
- 62) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語には鼻音がある。Цинциус(1975: 320-321)参照。
- 63) 『大清全書』参照。
- 64) エウエンキー語、オルチャ語、ナーナイ語では子音 $\check{3}$ の前に鼻音はない。
Цинциус(1975: 551)参照。
- 65) エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では語頭に鼻音はない。Цинциус(1977: 269)参照。
- 66) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語では語頭に鼻音はない。Цинциус(1975: 320-321)参照。
- 67) ソロン語、ナーナイ語では語中に鼻音はない。Цинциус(1975: 82)参照。
- 68) 日本語の岩手方言では、標準語の語中の [dz], [d], [b] が鼻音化子音 [ʰdz], [ʰd], [ʰb] となる語中鼻音化現象がみられるが、これと類似した音声的現象と考えられる。斎藤(1992: (1))参照。
また、『清文啓蒙』には、gaju 竿(gan)朱(48a)がある。gaju=gaji < gajimbi。
Цинциус(1975: 133-134)参照。『清語易言』にも、yali > yan li (14a)がある。ソロン語、オルチャ語、女真語には鼻音はない。Цинциус(1975: 340)参照。、Kiyose(1977: 125)参照。
- 69) 満州語及び女真語の鼻母音に関しては、山崎(1992b)参照。
- 70) 『清文啓蒙』には、sindaha 詩(shi)那(na)哈。身(shen)那哈(50a)がある。エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語では -н- であるが、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では、-нд- である。Цинциус(1977: 183)参照。
また、『清語易言』には、hendumbi > he nu mi (14a)がある。オロチ語では -н- であるが、女真語では -нд- である。Kiyose(1977: 123), Цинциус(1977: 448)参照。
- 71) 鼻音 m の消失は、常に [b] に先立つ同器性鼻音の消失であり、[m] の両唇の閉鎖から破裂に移行する前に [b] の調音が始まるために、鼻音が発音されなくなるためと考えられる。現代語でも閉鎖音が弱化して、摩擦音で発音されることがあるので、鼻音による同

- 化という点では、前述の 3-5 の -nd->-n- と同様である。これに反して、動詞語尾 -mbi がただ[m]と発音される場合がみられる。『清文啓蒙』には、goimbi 乖 咄 (mi)(45a), 『清語易言』にも、-mbi>-mi/-me, -mbio>-mio (13b)がある。
- 72) 『大清全書』参照。ただし、ここでは semgele である。
- 73) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では、子音 p がある。Цинциус(1977: 187)参照。
- 74) 『大清全書』参照。
- 75) 『清文啓蒙』には、amsun 阿模尊(zun) (52a)がある。蒙古語文語 amus, モンゴル語 амс. Цинциус(1975: 39)参照。
- 76) 成百仁先生は「シンボジウム 満州語の言語学的・文献学的研究(1991年6月7日 東京外国語大学)」においてやはり方言的要因に言及しておられる。
- 77) 以下においては、女真語の音価は特に言及しない限り、Kiyose(1977) による。
- 78) エウエンキー語、ソロン語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語の第一音節には母音 a がある。Цинциус(1977: 314-315)参照。語頭唇音による円唇母音化と考えられる。また、Цинциус(1975: 100)の満州語 ba《地方》と他のツングース語方言の対応も参照。
- 79) エウエンキー語、ソロン語、ウイльта語では子音 m の後ろに母音 ə がある。この例も先行唇音による円唇母音化と考えられる。蒙古語文語 emegel, モンゴル語 эмээл. Цинциус(1977: 452)参照。
- 80) Цинциус(1975: 34-35)参照。金(1984: 106)では北方語の -i- が南方語の -a- に対応する例のひとつとして指摘している。
- 81) エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語では第二音節には母音 и がある。蒙古語文語 qayıci-n, モンゴル語 хайч(ин). Цинциус(1975: 362)参照。
- 82) 満州語から借用したナーナイ語の第二音節には母音 a がある。Цинциус(1975: 3)参照。
- 83) ソロン語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語では第二音節に母音 y、 \dot{y} がある。蒙古語文語 bös, モンゴル語 бес. Цинциус(1975: 78)参照。
- 84) ウデヘ語では第一音節に母音 ə があるが、ウイльта語、ナーナイ語には母音 y がある。Цинциус(1975: 572)参照。
- 85) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ナーナイ語では第一音節に母音 o、 \bar{o} がある。Цинциус(1975: 27)参照。
- 86) 満州語から借用したナーナイ語には、子音 л の後ろに母音 ə がある。蒙古語文語

güilesü-n. Цинциус(1975: 168)参照。

87) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、ウデヘ語では第二音節に母音 a (オロチ語とエウエン語の方言形態では母音 o) がある。中期蒙古語 hula'an, 蒙古語文語 ulaGan. Цинциус(1977: 343-344)参照。また、流音と軟口蓋・口蓋垂音間にある母音の消失に関しては前述の 49) の文語の例も参照。これ以降に述べる例も同様である。

88) ナーナイ語の第二音節には母音 a がある。Цинциус(1975: 170)参照。

89) 蒙古語文語 qulaGai. Цинциус(1975: 476)参照。

90) 元来は bolo だけで、《秋》を意味し erin は《時、季節》を表すものであった。bolori は複合語 bolo + erin から変化したものである。Kiyose(1977: 101: N40), Цинциус(1977: 92-93)参照。

91) 上記註90) 参照。元来は juwa だけで《夏》を意味した。Цинциус(1975: 268-269)参照。

92) この例は、金(1984: 129)の形態を引用した。

93) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語及びネギダル語、オルチャ語の再構形では子音 p の後ろに母音 y、 \bar{y} 、 \acute{y} 及び ə がある。Цинциус(1977: 187)参照。

94) エウエンキー語、エウエン語、オロチ語の流音の後ろには母音 и、 $\bar{и}$ がある。Цинциус(1977: 464)参照。

95) ソロン語では第二音節に母音 i がある。Цинциус(1977: 98)参照。

96) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、ウイльта語、ナーナイ語では、子音 m の後ろに母音がある。中期蒙古語 nomuqan. Цинциус(1975: 604)参照。

97) 中期蒙古語 noγan, 蒙古語文語 noGuGan, モンゴル語 ногоон から借用したエウエンキー語の方言形態、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語及び対応するソロン語、ウデヘ語の形態では、閉鎖子音 r、 \bar{r} がある。Цинциус(1975: 601-603)参照。

98) 蒙古語文語 qaliGu, モンゴル語 халиу(н). Цинциус(1975: 369)参照。

99) オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語及び対応するウデヘ語の形態の第一音節には、母音 o、 \bar{o} がある。Цинциус(1977: 103-104)参照。

100) エウエン語、ネギダル語、ウデヘ語、ウイльта語では円唇母音があるが、エウエンキー語、ソロン語、オロチ語、オルチャ語では円唇母音と非円唇母音が変異形になって

- いる。Цинциус(1975: 100-101)参照。「以」(-i)は、所有格の接辞である。
- 101) この例は、金(1984: 128)の形態を引用した。weihe《角》 + an〈名詞化接辞?〉 = weihan > ihan《牛》と推測する。Цинциус(1975: 299)参照。
- 102) エウエンキー語、ソロン語、オロチ語、ウデヘ語では、第二音節は -ти- となっている。Цинциус(1975: 178)参照。
- 103) ナーナイ語では、第一音節は чй- である。Цинциус(1977: 403)参照。
- 104) Цинциус(1975: 244)参照。「以」(-i)は、所有格の接辞である。
- 105) 金代女真語の *p が、明代には f となる変化が起きた。
- 106) ナーナイ語は満州語で b が摩擦音化する前の形態を有している。Цинциус(1977: 3) 参照。
- 107) 蒙古語文語 tabu-n, モンゴル語 тав(ан)《五》参照。また、金・金(1980: 19, 212 -215)参照。
- 108) オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の第二音節(及び対応するウデヘ語の形態の第三音節)には、閉鎖子音 r がある。Цинциус(1977: 103-104)参照。
- 109) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、ウデヘ語、オルチャ語では、語幹に閉鎖子音がある。Цинциус(1975: 219)参照。
- 110) Benzing(1956: 41-43), Kiyose(1977: 117: N174)参照。
- 111) 語頭子音に関して、ウデヘ語の子音は x であるが、ネギダル語、オルチャ語、ナーナイ語の語頭の子音は k である。Цинциус(1977: 278-279)参照。
- 112) Цинциус(1975: 34-35)参照。金(1984: 106)参照。
- 113) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語の語頭音は и、й、i であるが、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では子音 си- である。Цинциус(1975: 312-313)参照。Kiyose(1977: 56, 97: N9)参照。
- 114) 金・金(1980: 126-128)参照。
- 115) この例は、金(1984: 149)の形態を引用した。エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語の第二音節には母音 a があるが、エウエン語には母音 o を持つ形態がありオロチ語とオルチャ語でも母音 y、ý のある形態がある。Цинциус(1975: 35-36)参照。
- 116) 上記註115) 参照。
- 117) この例は、金(1984: 115)の形態を引用した。ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、

- ウイльта語、ナーナイ語の第二音節には母音 a がある。蒙古語文語 *budaGa*, モンゴル語 *будаа* 《飯》。Цинциус(1975: 102)参照。
- 118) オルチャ語、ナーナイ語には第二音節に母音 a、ã がある。蒙古語文語 *qundaG-a-n*, モンゴル語 *хундаг(a)*。Цинциус(1975: 418)参照。
- 119) 蒙古語文語 *ükenče*, モンゴル語 *Үхээнц*。Цинциус(1977: 255)参照。
- 120) 蒙古語文語 *čačar*, モンゴル語 *цацар*。Цинциус(1977: 386)参照。
- 121) エウエンキー語、エウエン語の語頭には母音 ə がある。Цинциус(1977: 468)参照。
- 122) 蒙古語文語 *qudduG*, モンゴル語 *худар* から借用したソロン語及びナーナイ語の第一音節には母音 *y*、o がある。Цинциус(1975: 475)参照。
- 123) 語末音節に母音 a がある方言形態は、エウエンキー語、ソロン語、ウイльта語、ナーナイ語にみられる。Цинциус(1977: 190)参照。
- 124) 「以」(-i)は、所有格の接辞である。蒙古語文語 *ergi*, モンゴル語 *эрэг* 《岸》参照。Цинциус(1977: 432)参照。
- 125) この例は、金・金(1980: 125)の形態を引用した。Цинциус(1977: 101)によれば、ウデヘ語の形態は *сиэ<*сijэ<*сирэ* である。
- 126) 蒙古語文語 *adali*, モンゴル語 *адил*。Цинциус(1975: 14)参照。
- 127) ソロン語だけは語末音が子音 p であるが、オロチ語、オルチャ語、ナーナイ語の語末音節は -ри である。Цинциус(1975: 550)参照。
- 128) この例は、金・金(1980: 127)の形態を引用した。
- 129) エウエンキー語、エウエン語では接尾辞 -гй, -гй を取る形態がある。Цинциус(1975: 35-36)参照。
- 130) ウデヘ語の方言形態には *биэ-* があるが、エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の語幹は и、*̄и*、i である。蒙古語文語 *bui*, モンゴル語 *бий*。Цинциус(1975: 79-80)参照。
- 131) 蒙古語文語 *alba-n*, モンゴル語 *алба(н)*。対応するエウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の諸形態には唇音 ɓ がある。Цинциус(1975: 30)参照。また、Benzing(1956: 34, 46)参照。
- 132) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語には、子音 ɓ がある。Цинциус(1975: 213-214)参照。
- 満州語の形態は音位転換によるものか？

133) ヤクート語 *töbö*. Böhtlingk(1964: 99), Цинциус(1975: 218)参照。

134) この例は、金(1984: 117)の形態を引用した。対応するウイльта語、ナーナイ語の諸形態では子音 *ɬ* がある。Цинциус(1977: 433)参照。

135) ソロン語には、子音 *ɬ* がある。Цинциус(1977: 203)参照。

136) 蒙古語文語 *šaṣar*, モンゴル語 *цацар*. Цинциус(1977: 386)参照。

137) この例は、金(1984: 30)の形態を引用した。対応するエウエンキー語、ソロン語、エウエン語の諸形態では子音 *ɣ* または *ɾ* がある。蒙古語文語 *jüg*, モンゴル語 *зүг*. Цинциус(1975: 269)参照。

語中の(軟口蓋・口蓋垂)閉鎖音の摩擦音化及び消失にいたる過程が蒙古語にもみられることは、服部(1959)、Poppe(1960: 58-62)で言及されているが、女真語及び満州語での閉鎖音の消失に対しては満州語のフィールドワークに基づく河野(1979: 551)の指摘があり、金・金(1980: 118, 126-128)も論じている。また、同じ現象は唇音に関してもみることができる。また、前章参照。

138) この例は、金(1984: 53)の形態を引用した。対応するものと考えられる形態は、エウエンキー語 *мэдэүэ* 《感覚》, エウエン語 *мэдүкэн* 《予告》である。蒙古語文語 *medege-n*, モンゴル語 *мэдээ(н)*. Цинциус(1975: 563-564)参照。

139) この例は、金(1984: 221)の形態を引用した。エウエンキー語、ソロン語、オロチ語、オルチャ語、ナーナイ語の第二音節には子音 *ɾ* がある。Цинциус(1977: 218-219)参照。

140) ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語の第二音節には、子音 *ɾ* がある。Цинциус(1977: 259)参照。

141) 蒙古語文語 *dajila-* < 前蒙古語 **dagila-*, モンゴル語 *дайлах* 《歓待する》. Poppe(1960: 61)及び Цинциус(1975: 189)参照。

142) ネギダル語の語尾音節には、子音 *ɣ* がある。蒙古語文語 *qudaGui*, モンゴル語 *хүдгүй* 《親戚》. Цинциус(1975: 423)参照。

143) この例は、金(1984: 157)の形態を引用した。エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オルチャ語、ウイльта語の第二音節には閉鎖子音がある。オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語にはそれがない形態もある。ソロン語は、*тики-тихи-*, オロチ語は *ти-[*тики-]*, ナーナイ語は *ту-* (方言形態 *тики-*) である。Цинциус(1977: 177-178)参照。

144) この例は、金(1984: 102)の形態を引用した。ウデヘ語の第二音節には子音 *ɾ* がある。

Цинциус(1975: 337)参照。

145) 蒙古語文語 qudarG-a, モンゴル語 худрага から借用したエウエンキー語の語尾音節には子音 r がある。Цинциус(1975: 423)参照。

146) エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語の方言形態、オロチ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語には閉鎖音 k、q がある。Цинциус(1975: 243)参照。

147) この例は、金・金(1980: 295)の形態を引用した。蒙古語文語 sayiqan, モンゴル語 сайхан。Цинциус(1977: 55)参照。

148) 蒙古語文語 alda, モンゴル語 алд から借用したエウエンキー語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語では子音 л の前には子音 л はない。

Цинциус(1975: 30-31)参照。

149) 蒙古語文語 adali, モンゴル語 адил。Цинциус(1975: 14)参照。

150) 蒙古語文語 ükenče, モンゴル語 Үхээнц 《弱い》。Цинциус(1977: 255)参照。

151) 対応するエウエンキー語、オルチャ語、ナーナイ語の諸形態には子音 m がある。

Цинциус(1975: 496)参照。上述の 7-1 も参照。

152) ソロン語では子音 n がある。Цинциус(1975: 41-42)参照。

153) 対応するエウエンキー語の形態の語頭には子音 л があるが、オルチャ語、ナーナイ語の諸形態には子音 n がある。Цинциус(1975: 496)参照。

154) この例は、金(1984: 138)の形態を引用した。ソロン語、ナーナイ語では鼻音がある。

蒙古語文語 kemke, モンゴル語 хэмх 《まくわうり》。Цинциус(1975: 388)参照。

155) エウエンキー語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、オルチャ語、ナーナイ語及び対応するソロン語、ウデヘ語、ウイльта語の諸形態には、鼻音がある。蒙古語文語 tomu-, モンゴル語 томох 《なう》。Цинциус(1977: 196)参照。

156) この例は、金・金(1980: 127)の形態を引用した。ただし、この形態については、音訳者の漢語方言で l (< r) と n の区別がなかった可能性の考えることができる。金・金(1980: 127)参照。

157) エウエンキー語、ソロン語、エウエン語、オルチャ語、ウイльта語、ナーナイ語には、流音 p があるが、オロチ語、ウデヘ語では女真語と同様にこの子音は消失している。

Цинциус(1975: 236)参照。

158) この例は、金・金(1980: 125)の形態を引用した。

159) この例は、金・金(1980: 125)の形態を引用した。Цинциус(1977: 101)によれば、対

応するウデヘ語の形態に関して *cipɛ>*ciɟɛ>ciɛ という過程を提示している。

160) エウエンキー語、エウエン語、オルチャ語、ウイルタ語、ナーナイ語では流音 p があるが、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語では女真語と同様に子音は消失している。

Циншиус(1977: 92)によれば、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語の再構形態は

*ciɟɛrɛ である。

161) 女真語における流音と鼻音の交代の例は、金・金(1980: 121-123)参照。

162) 李他(1984: 204)参照。蒙古語文語 neke-, モンゴル語 нэхэх。

163) この例は、金・金(1980: 127)の形態を引用した。

164) Kiyose(1977: 46)参照。

165) Kiyose(1977: 97: N9)参照。

166) Kiyose(1977: 103: N62)参照。

167) Kiyose(1977: 40)参照。

168) 満州・ツングース語の諸方言において、摩擦音と破擦音が対応する例：満州語の

sindambi 《放つ》に対応する諸形態はエウエンキー語、ソロン語、エウエン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、オルチャ語では、語頭に ти-, тй-, тй- があり、ウイルタ語、ナーナイ語では破擦音化している。女真語では、聽苔埋 tindamai 《放》である。

Циншиус(1977: 183)参照。

169) ただし、比較的早い時期に借用された cilin<「鉄(tie)嶺」などは、破擦音になっている。神田他(1972: 107)参照。

170) 序説においてもみたが、満文老 檔 には、満州文字作成の件があり、そこでは次のような記述がある。満文老 檔 研究會(1961: 633)参照。(下線は引用者)

○juwan juwe uju, dade tongki fuka akū, dergi fejergi hergen ilgan akū,

十 二 頭, 初に 點 圈 なく, 上 下の 文字 區別 なく,

ta da, te de, ja je, ya ye fakcan akū, gemu emu adali ofi, bai gisun hese

ta da, te de, ja je, ya ye 分離 なく, 皆 一 様 なので, ただの 言 旨

48/49 bithe ohode, mudan ici be tuwame uthai ulhimbi, ja, nuyalmai gebu,

書 となつた時, 音 方向 を 見 直ちに 悟る, 容易。人の 名,

ba na i gebu ohode, tasarame ojarahū ofi, ……

處 地 の 名 となつた時, 誤るやうになる 恐れがある ので,

第二部 漢語音韻の研究

第一章 満州語音訳漢字から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化—『大清太宗文皇帝實録』 を資料として—

はじめに便宜のため、再度『文皇帝實録』の纂修版の成立年を記しておく。

順治本(A) 順治12年(1655)

康熙本(B) 康熙21年(1682)

乾隆本(C) 乾隆4年(1739)

1. J I と G I

序説で述べたように、ここでは漢字で書かれている満州語の固有名詞の音訳の仕方に基づいて、漢語の舌面音化の状況について論じる。まず、満州文字の *ji* と *gi* を持つ固有名詞は、次のような漢字を用いて音訳されている。(下線は引用者。以下同。また、ローマ字転写については、神田他(1972)に従った)

- | | | |
|----------------------|-----------------------|---------|
| I) <u>ajige</u> | <u>jogidai</u> | 付録5 参照。 |
| 阿 <u>吉</u> 格(A) | 著 <u>吉</u> 代(A) | |
| 阿 <u>濟</u> 格(B,C) | 卓 <u>吉</u> 代(B,C) | |
| II) <u>banjin</u> | <u>gintaisi</u> beile | 付録6 参照。 |
| 班 <u>金</u> (A) | <u>金</u> 台石 貝 勒(A) | |
| 班 <u>津</u> (B,C) | <u>金</u> 塔什 貝 勒(B,C) | |
| III) <u>jing san</u> | <u>gingguldai</u> | 付録7 参照。 |
| <u>京</u> 三(A) | <u>京</u> 俄兒代(A) | |
| <u>靜</u> 山(B,C) | <u>荊</u> 古爾代(B,C) | |

それぞれの満州文字に関しては、序説において検討したように、十七世紀の音価を次のように措定する。

ji[tʃi]

ci[tʃ'i]

si[ʃi]

gi[ki]

ki[k'i]

hi[xi]

次に、上の諸例中の下線部の漢字音については、漢語音韻史では近代音と称する区分に属する音価と考えられる。これはすなわち、中古音と現代音の中間に位置し、より下位には中世音（近古音）と近世音に区分される領域である。この中世・近世の区別をする場合の音韻現象のひとつが、ここで論じる舌面音化と考える。まず、舌面音化する前のこれらの字音を、中世漢語の代表的な音韻資料である『中原音韻』（1324）により、以下のように措定する。（声調は省略した。以下同）寧（1982）参照。また、後述のように、『文皇帝實錄』順治本とはほぼ同時期の『西儒耳目資』（1626）においても、ほぼこれらに相当する音価の記述がなされている。

I) 吉 [ki] (齊微韻)

濟 [tsi] (齊微韻)

II) 金 [kiəm] (侵尋韻)

津 [tsiən] (真文韻)

III) 京・荊 [kiəŋ] (庚青韻)

靜 [tsiəŋ] (庚青韻)

いずれも上の字が「団音」と言われる軟口蓋子音の字音の漢字であり、下の字は「尖音」と言われる歯茎子音の字音の漢字であることが分かる。（韻尾については、『中原音韻』は[m]と[n]を区別しているが、『韻略匯通』（1642）は現代音と同じく[n]に合一している）すなわち、上で引いた諸例の左の ji を持つ例では、同じ満州語の人名・地名を漢字で書き表すうえで、最初に成立した順治本では団音である見母字を用いているのに対し、これを改訂した康熙本と乾隆本では、尖音である精母字に書き替えていることが分かる。これは、順治本が作成された十七世紀中期においては、見母が舌面音化してこれらの字はすでに現代音と同じ[tɕi]という音で読まれていたためと考える。満州語が対象としたその方言が、漢語のなかでいかなる位置を与えられるかについては、先に論じたように官話系方言に非常に近いであろうと推測される。従って、十七世紀前期には、見母字を舌面音で読むことは北方共通語では、すでにかかなりの程度有力であったとみることができる。この音価

の近似に基づく漢字の選択が後の康熙本・乾隆本では継承されなかったのは、筆者の見解によれば、これは規範意識のために人為的に書き直されたからと考える。十七世紀までの規範的な漢字音によれば、見母は[kɿ]という音価である。従って、上記の諸例のそれぞれ右側の例が示すように、満州文字の gi にこれをあてるのが正当と考えられるのであって、ji にあてるのはいわば俗音に従ったことになるのである。

康熙本が作成された時、この種の改訂が重要視されたことは、乾隆本がそれらをほとんどそのまま踏襲していることからもうかがうことができる。今西(1935a: 44)によれば、康熙本の作成に先立って、康熙6年(1667)に一度対校が命じられているが、そのことを記した檔案には「前修太宗文皇帝實録内有字義未当。姓名 舛 錯者。」と述べられている。

さて、次にA～Cにおいて ji と gi を持つ音節がそれぞれどのような漢字により音訳されているかをまとめることにする。カッコ内では声母を示し、右端の数値はその字が用いられた例の種類の数を示す。なお、波線~~~~~を付した文字は、「jin io hoo 金玉和」のように、それが漢語の固有名詞からの借用語であることを示す。これらもまた舌面音化を端的に表すものではあるが、そこからの考察は次章で行う。

1. 韻母 -i

J I				G I			
A	B	C		A	B	C	
1) 吉 (見)	吉	吉	1	吉 (見)	吉	吉	1
2) 吉 (見)			2	機 (見)	機	機	1
3) 極 (見)		極	1	計 (見)	吉 (見)	吉	1
4) 吉 (見)	濟 (精)	濟	12	基 (見)	吉 (見)	吉	1
5) 機 (見)	濟 (精)	濟	2				
6) 計 (見)	濟 (精)	濟	2				
7) 季 (見)	濟 (精)	濟	1				
8) 姫 (見)	濟 (精)	濟	1				
9) 几 (見)	濟 (精)	濟	1				
10) 機 (見)	齊 (精)	齊	1				
11) 吉 (見)	濟 (精)		1				
12) 跡 (精)	濟 (精)	濟	2				

13) 戚 (清)	戚	戚	2
14) 戚 (清)	齊 (精)	齊	1
15) 乞 (溪)	齊 (精)	齊	1
16) 智 (莊)		濟 (精)	1
17) 扎 (莊)	札 (莊)	札	1
18) 諸 (章)	朱 (章)	朱	1
19) 主 (章)	主		1
20) 出 (昌)	出	出	1

2. 韻母 -ia

	J I Y A				G I Y A		
1) 家 (見)	家	家	1	加 (見)	加	加	1
2)				加 (見)	賈 (見)	賈	1
3)				扎 (莊)	賈 (見)	賈	1

3. 韻母 -ie

	J I Y E				G I Y E		
1) 借 (精)	濟 (精)	葉 (影)	濟葉 1				

4. 韻母 -iu

	J I O				G I O		
1)				糾 (見)	糾	糾	1
2)				覺 (見)	糾 (見)	糾	1
3)				休 (曉)	庥 (曉)	庥	1

5. 韻母 -ian

	J I Y A N				G I Y A N		
1) 儉 (見)	儉	儉	1	姜 (見)	堅 (見)	堅	1
2)				間 (見)	堅 (見)	鑑 (見)	1
3)				間 (見)	陽 (影)	陽	1

6. 韻母 -in

J I N				G I N			
1) 金 (見)	金	金	1	金 (見)	金	金	3
2) 金 (見)	金	金	2	錦 (見)	錦	錦	1
3) 金 (見)	津 (精)	津	8	根 (見)	根	根	1
4) 金 (見)	晉 (精)	晉	2				
5) 錦 (見)	錦	錦	1				
6)	金 (見)		1				
7)		金 (見)	1				
8) 津 (精)	津	津	2				
9) 進 (精)	進	進	1				
10) 吉 (見)	濟 (精)	濟	1				
11) 奇 (見)	齊 (精)	齊	1				
12) 青 (清)	青	青	1				

7. 韻母 -iang

J I Y A N G				G I Y A N G			
1) 姜 (見)	姜	姜	1	江 (見)	江	江	1
2) 將 (精)	將	將	1				

8. 韻母 -ing

J I N G				G I N G			
1) 京 (見)	京	京	1	京 (見)	荊 (見)	荊	1
2) 京 (見)	靜 (精)	靜	1				
3) 鏡 (見)	鏡	鏡	1				
4) 靜 (精)	靜	靜	1				
5) 徵 (章)	旌 (精)	旌	1				

9. 韻母 -ü

J I O I

G I O I

- 1) 覓 (見) 覓 覓 1

10. 韻母 -ün

J I Y U N

G I Y U N

- 1) 俊 (精) 俊 俊 1

いくつか注意すべき点について、以下に述べることにする。1 JI 1)では、A～Cの全てに「吉」という字が用いられているが、これは「台吉」という音訳借用語のことである。これは、元来は皇太子を意味する漢語の「太子」であり、漢語>蒙古語(文語 tayiz)>満州語と借用されて、そこから再び漢語に入ったものである。従って、音訳とは言え普通名詞なので、漢字そのものを改変することはできないのである。同じように漢語が満州語を経由して再び漢語に借用された例として「福金・夫金・福晋」<fujin(妃。王、貝勒の妻。諸侯の夫人)>「夫人」がある。しかし「台吉」とは違い、見母の「金」を精母の「晋」に変えた語もあることは注目に値する。聶(1947: 100)参照。

後金国二代汗清朝初代皇帝ホンタイジ hong taiji にあてられた「皇太極」の「極」についても、改変がなかったのは皇帝の名の表記を尊重するといった事情によるものであろう。また、4)「吉」がとくに多いのは、意味の好ましさから頻繁に用いられたためと思われる。同 12) や 6 JIN 8) など、最初から精母字が使用されているものがあるが、満州文字の ji に対しては、精母が[tsi]であっても舌面音化して[tɕi]であっても、これがあてられたであろうことは容易に考えられるので、これは音訳字選択の際の「ゆれ」の範囲とすべきであろう。

2. C I と K I

I) acitu taisi

bakiran

付録 8 参照。

阿乞兔 台石(A)

霸奇蘭(A, B, C)

阿查図 太師(B)

阿查図 太錫(C)

II) <u>cindai</u> medeci	wang <u>kin</u>
秦代 默得戚(A)	旺 奇(A)
秦代 默得齊(B, C)	王 奇(A, B)
III) <u>cingceng</u>	cooko <u>kingli</u>
青 城(A, B, C)	朝科 慶 礼(A)
	朝科 郷 礼(B, C)

『中原音韻』による中世漢語の字音の音価は、以下の通りである。

I) 乞	[k'i]	(齊微韻)
齊	[ts'i]	(齊微韻)
奇	[k'i]	(齊微韻)
II) 秦	[ts'ien]	(真文韻)
III) 青	[ts'ien]	(庚青韻)
慶	[k'ien]	(庚青韻)
郷	[xian]	(庚青韻)

ここでも、I)において ci の音訳に順治本では団音の見母字「乞」を用い、康熙本・乾隆本では尖音の清母字「齊」に書き替えている。このことも前節と同様の解釈により、溪母を舌面音の [ts'i] で発音する漢語方言が音訳の基準とされたためと考えられる。II)とIII)では始めから尖音字で音訳している。これも、上で述べた「ゆれ」のためであろう。また、II)では、kin の音訳で語末の n にあたる音を持たない漢字「奇」が使われているが、これは満州語の発音で語末の母音を鼻母音で発音することがあったために、漢字ではこれを語末尾音を持たない音韻として解釈したためと考える(前章参照)。また、III)で king に曉母字「郷」をあてていることについては、語中の摩擦音化を論じた第一部第一章参照。前節と同じく、A～Cにおいて ci と ki の音訳に使われる漢字を以下に列挙する。

1. 韻母 -i

C I				K I			
A	B	C		A	B	C	
1) 啓 (溪)	啓	啓	1	奇 (溪)	奇	奇	4
2) 奇 (溪)	齊 (清)	齊	9	奇 (溪)	祁 (溪)	祁	3
3) 奇 (溪)	齊 (清)	戚 (清)	1	祁 (溪)	祁	祁	2
4) 奇 (溪)	戚 (清)	齊 (清)	1	祁 (溪)	奇 (溪)	奇	1
5) 乞 (溪)	齊 (清)	齊	2	乞 (溪)	奇 (溪)	奇	1
6) 乞 (溪)	齊 (清)	齊	2	乞 (溪)	祁 (溪)	祁	1
7) 契 (溪)	齊 (清)	齊	1	季 (見)	季	季	1
8) 戚 (清)	戚	戚	1	齊 (清)	奇 (溪)	奇	1
9) 戚 (清)	齊 (清)	齊	8	希 (曉)	希	希	1
10) 齊 (清)	齊	齊	2				
11) 齋 (清)	齋	齋	1				
12) 七 (清)	齊 (清)	齊	1				
13) 赤 (清)	齊 (清)	齊	1				
14) 秦 (清)	臣 (昌)	臣	1				
15) 金 (見)	齊 (清)	齊	1				
16)	齊 (清)	齊	1				
17) 鉄 (透)	鉄	鉄	1				

2. 韻母 -ia

C I Y A				K I Y A			
1)				蝦 (曉)	蝦 (曉)	蝦	1
2)				加 (見)			1

3. 韻母 -ie

C I Y E				K I Y E			
1) 切 (清)	切	切	1				

4. 韻母 -iu

C I O				K I O			
1) 喬 (溪)	喬	喬	1	球 (溪)	球	球	1
2)				丘 (溪)	丘	球 (溪)	1
3)				丘 (溪)	鳩 (見)	鳩	1

5. 韻母 -in

C I N				K I N			
1) 泌 (清)	泌	泌	2	奇 (溪・見)	奇		1
2) 秦 (清)	秦	秦	1				
3) 臣 (昌)	臣	臣	1				
4) 城 (昌)	寨 (莊)	寨	1				

6. 韻母 -ing

C I N G				K I N G			
1) 青 (清)	青	青	2	慶 (溪)	鄉 (曉)	鄉	1
2) 靑 (清)	靑	靑	2				
3) 青 (清)			1				
4) 成 (昌)	成	成	1				

3. S I と H I

I) <u>sibe</u>	<u>bunishi</u>	
石北 (A)	布尼什希 (A)	
席北 (B, C)	布尼思希 (B, C)	
II) <u>erke doqsin</u>	<u>sin jeo</u>	
額兒克 多格辛 (A)	忻 州 (A, B, C)	
額爾克 多克辛 (B, C)		
III) <u>baising</u>	<u>hinggan</u>	付録 9 参照。
擺 興 (A)	興 安 (A, B, C)	
拌 星 (B, C)		

『中原音韻』による中世漢語の字音の音価は、以下の通りである。

I) 石	[ʃi]	(齊微韻)
席	[si]	(齊微韻)
希	[xi]	(齊微韻)
II) 辛	[sin]	(真文韻)
忻	[xin]	(真文韻)
III) 興	[xiəŋ]	(庚青韻)
星	[siəŋ]	(庚青韻)

喉音字を用いている例は、これまでにみた牙音の場合とは異なるところがあるが、同じ類ものもみられる。それは、III)である。「興」は曉母字であり、『中原音韻』では「庚青韻」に分類されている（なお、この人名 *baising* は蒙古語起源の語と思われる。蒙古語とは違い、満州語では借用語と擬音語・擬態語を除き、語末に *-ng* が立つことはないからである）。この字が満州語の *sing* にあてられているのは、牙音と同じく喉音の曉母が舌面音[ɕ]になっていたためであろう。康熙本・乾隆本の「星」は同じ韻母を持つ尖音字である。II)の左側の例は *sin* を心母字の「辛」で書写しており、始めから尖音字が用いられているが、右側の方は漢語から借用された地名であり、その時期に曉母字の「忻」はすでに舌面音で発音されていたために、*sin* と写したと考えられる。

さて、I)の左側の例において、順治本では *si* の音訳に書母字の「石」が用いられ、康熙本・乾隆本では心母字の「席」に書き替えられている。後者については、*ji*, *ci* にそれぞれ精母字、清母字をあてることと同じ原理に立っているので問題はないが、前者の「石」は『中原音韻』では齊微韻の正齒音三等字であって、明末には同二等字と合流し現在の捲舌音になっていたと考えられる。すなわち、藤堂(1987a: 118-119)にあるように、中古音の正齒音二等と三等は、十七世紀初期の『重訂司馬溫公等韻圖經』ですでに合流して扱われていることから、両者は十六世紀後期以前には合一していたと考えられる。さて、満州文字による漢字音の表記がどの時期の音価を対象としているかという問題に関しては、漢語からの借用語で正齒音二等・三等の区別をしていないことがひとつの傍証になるだろう。すなわち、主たる満州漢字音の成立をほぼ十七世紀前期(1632年のガリック文字を含む満州文字の制定まで)と想定すると、その時期にすでにこの区別をしなくなった漢語方言、

すなわち『重訂司馬溫公等韻圖經』が依拠している北京順天府の方言に近いものとみなしてよいと思われる。

ところが、こう考えると先の si[ʃi] は捲舌音の [ʃl] で書写していることになり、両者の音価の違いは極めて大きいためにいささか奇妙に映る。もっとも、音訳というものは音価の近似に基づく対応関係にすぎないから、音訳者が[ʃi]と[ʃl]が近いとみなしたなら、特に問題とするに値しないという見方もあるだろう。また、正齒音二等・三等の区別をしていないのは、単に満州語話者には両者の識別（特に前者に捲舌音の認識）が困難であったためとも考えられるが、漢語にはあっても満州語にはない日母のような音を表すために特別な文字（ガリック文字）を作っている経緯から考えると、漢語において二等三等の厳然たる区別があったなら、それが何らかの形で満州語にも反映されていたと考えられるのではないだろうか。

しかし、先に奇妙と言ったのは、si に書母字を用いた例と、ji, ci に同じく正齒音三等の章母字・昌母字を用いた例との頻度数に差があることである（言うまでもないが、ここでの集計の対象には、漢語からの借用語は含まれていない）。すなわち、順治本において ji を含む音節を章母字で写している例が総数54例中3例であり(5.56%)、次に ci を含む音節を昌母字で写している例が総数40例中2例にすぎない(5%)のに対して、si を含む音節を書母字で書写している例は総数67例中55例(82.09%)にのぼり、心母字(11.94%)・曉母字(4.48%)に対して最も多く、しかもそのうち14例(25.45%)は康熙本で心母字に書き換えられているのである。もし音訳者が[ʃi]を[ʃl]に似た音価だと考えたのであれば、ji[tʃi], ci[tʃ'i]をもそれぞれ[tʃl], [tʃ'l]の音価の漢字で書写した例がもっと多数みられても不思議ではないと思われる。

これに対して筆者は、正齒音三等字において章母字と昌母字は先に変化を遂げ捲舌音となっていたので、多くは舌面音の ji, ci とは異なる字音とされたが、他方書母字は未だ変化する前の音価で発音されることが多かったために、後部歯茎音の si[ʃi]に近い音とみなされ多用されたのではないだろうかと考える。さて、筆者の見解によれば、この違いは調音様式に基づく声母間の構造に起因すると考える。つまり、章母字・昌母字は帯気性のみにより対立しているが、これらと書母字とは破擦音対摩擦音という質的に異なる差異に基づく対立をなしており、同じく正齒音三等というカテゴリーに入り等しく捲舌音化を起すが、前二者はより緊密な関係にあるとみなせる。従って、これら三者は全く同一時期ではなく、先に前二者が変化し、そして後者がこれらに引きずられるという変化の上で

の時間的な相違が存在したのではないかと思う。およそいかなる言語変化も一瞬のうちに終了するはずはなく、新旧が混在する時期を経て新たな形態を持つに至るのだが、旧形態が存続する時間は章母字・昌母字と書母字とでは差があったのではないだろうか。この考えが原則的に正しいのであれば、日母字がはっきりした捲舌音になったのは、書母字よりさらに遅かったのではないかと推測される。山崎(1990b)参照。

以下に、A～Cにおいて si と hi の音訳に用いられる漢字を列举する。

1. 韻母 -i

S I				H I			
A	B	C		A	B	C	
1) 什 (書)	什	什	19	希 (曉)	希	希	4
2) 什 (書)	石 (書)	石	2	希 (曉)			1
3) 什 (書)	世 (書)	世	2	喜 (曉)	熙 (曉)	熙	1
4) 什 (書)	習 (心)	習	7	奚 (曉)	希 (曉)	希	1
5) 什 (書)	西 (心)	西	2	忻 (曉)	喜 (曉)	喜	1
6) 什 (書)	席 (心)	席	2	夏 (曉)	夏	轄 (曉)	1
7) 什 (書)	西 (心)		1	黑 (曉)	黑	黑	1
8) 什 (書)			2	奇 (溪・見)	奇	奇	1
9) 石 (書)	石	石	3	習 (心)	希 (曉)	希	1
10) 石 (書)	石	石	1				
11) 石 (書)	什 (書)	石	1				
12) 石 (書)	西 (心)	西	1				
13) 石 (書)	席 (心)	席	1				
14) 石 (書)	習 (心)	習	2				
15) 石 (書)	錫 (心)	錫	1				
16) 石 (書)	師 (生)	錫 (心)	1				
17) 石 (書)			1				
18) 式 (書)	石 (書)	石	1				
19) 式 (書)	実 (書)	実	1				
20) 土 (書)	土	土	1				

21) 失 (書)	習 (心)	習	1
22) 実 (書)	西	西	1
23) 世 (書)	世	世	1
24) 西 (心)	西	西	1
25) 席 (心)	席	席	2
26) 思 (心)	席 (心)	席	1
27) 細 (心)	細		1
28) 喜 (曉)	喜	喜	1
29) 喜 (曉)	熙 (曉)	熙	1
30) 沙 (生)	薩 (心)	薩	1
31) 沢 (莊)	沢	沢	1

2. 韻母 -ia

S I Y A

H I Y A

1)	蝦 (曉)	蝦	1
----	-------	---	---

3. 韻母 -ie

S I Y E

H I Y E

1) 什 (書)	習 (心)	習	1
2) 舍 (書)	謝 (心)	謝	1

4. 韻母 -iu

S I O

H I O

1) 碩 (心)	碩	碩	1
2) 寿 (書)	寿	寿	1

S I Y U

H I Y U

1) 蚰 (心)	蚰	蚰	1
----------	---	---	---

5. 韻母 -ian

S I Y A N

H I Y A N

1) 顯 (曉)	顯	顯	2	先 (心)	先	先	1
2) 𩇛 (曉)	𩇛	𩇛	1	咸 (曉)	咸	咸	1
3) 先 (心)	先	先	1	鮮 (心)	鮮	鮮	1

6. 韻母 -in

S I N

H I N

1) 辛 (心)	辛	辛	2
2) 辛 (心)	心 (心)	心	1
3) 新 (心)	忻 (曉)	忻	1
4) 忻 (曉)	忻	忻	1
5) 馨 (曉)	馨	馨	1
6) 沈 (書)	沈	沈	1

7. 韻母 -ing

S I N G

H I N G

1) 興 (曉)	興	興	1	興 (曉)	興	興	1
2) 興 (曉)	星 (心)	星	2				
3) 勝 (書)	勝	勝	1				

8. 韻母 -ü

S I O I

H I O I

1) 翊 (影)	翊	翊	1	許 (曉)	許	許	1
----------	---	---	---	-------	---	---	---

9. 韻母 -üe

S I O W E I

H I O W E I

H I O W A I

1)				薛 (心)	薛	薛	1
----	--	--	--	-------	---	---	---

10. 韻母 -üan

1)	<u>宣</u> (心)	<u>眞</u>	<u>眞</u>
2)	<u>選</u> (心)	<u>選</u>	<u>選</u>
3)	<u>玄</u> (曉)		

さて、次に挙げる若干の例では、hi を持つ満州語音の音訳に心母字が用いられている。

coshil hiya taiji (綽斯習兒 台吉 A)

(綽斯希爾 台吉 B)

(綽斯希爾 台吉 C)

boo ceng hiyan (鮑承先)

co(o)hiyan (朝鮮)

hiowai dahū (薛大湖)

cen bang hiowan (陳邦選)

hiowan fu (宣府)

lio yūn hiowan (劉応選)

wangsi hiowan (王世選)

最初のひとつを除くと、いずれも漢語から借用された固有名詞である(そのため、A～Cともに同じ漢字になっている)。例えば、「鮮」は『中原音韻』では先天韻に入る心母字で、その音価は[sien]である。従って、問題はこれらの心母を満州文字では何故 si(-) ではなく、hi(-) で書写しているのかということになる。

筆者の見解によれば、これらは借用される際に字母を誤認したために、満州語の綴りで用いるべき文字を取り違えた結果であると思う。つまり、hypercorrection が原因と考えるのである。すなわち、この時代、[ɛi]ではじまる字音の語を借用する場合、そこには si(-) で書くべき心母字と hi(-) で書くべき曉母字が含まれることが知られてはいたが、字音に対する知識がいまだ不正確であったために、声母の誤認が起きたのであり、このことは当時すでに両者は同じ音価で発音されることがあったことによると考えられる。すなわち、上述の現象から曉母のみならず心母までも舌面音化していたこと、つまり心母・曉母間では、すでに「尖団の合一」の段階まで進んでいたことが推測されるのである。

上述の例において、「選」が複数の人名でいずれも hiowan と書かれているのは、満州文字による漢字音の表記としては、これを曉母字とする考えが当時ある程度定着していたためと思われる。また、最初の例は漢語名ではないが、順治本で「習」を用いているのは、音訳の時その字音を曉母と考えたからで、後の版では正しい曉母字の「希」に改められている。

また、他の声母については、精母字を gi(-) で書き、清母字を ki(-) で書いた例はこれほどまとまってはみられないので、「尖団の合一」は未だ生じてはいなかったと考えられる。ただし、「2. CIとKI」の表のうち、1. -i KI 8) の順治本では ki に破擦音の「齊」をあてているが、これは唯一の例であり問題とするべきであろう。

なお、後の『清文啓蒙』巻一の「切韻清字」には、満州文字 ji(-), ci(-), si(-) に尖音字をあて、gi(-), ki(-), hi(-) に団音字をあてている規範的な例のほかに、この逆の尖団を混同した例もみられる。すなわち、上記の例と同じ対応関係とみなされる、gi(-) に精母字を ki(-) に清母字を対置するものである。これらは十八世紀前期において、全面的な尖団の合一が起きていたために字音を混同したものと考ええる。次章参照。上の例はそれが心母においては、すでに十七世紀中期の『文皇帝實録』順治本にみられるというものである。また、讃井(1980: 168-169)、落合(1987: 138-140)、池上(1987b: 24)、岩田(1988: 37-38)参照。

さて、これも前述の正歯音三等の捲舌音化の場合と同じように、調音様式の対立が音韻構造の変化にあたり時間的な差として具現したものと考えられる。先の例とは異なり、この場合は摩擦音の心母の方が破擦音の精母・清母よりも先に変化したということである。

次に、A～Cの諸版で音訳に用いられる漢字の声母のパターンとその例数の累計を以下に記す。なお、集計の対象は三版全てに現れた例に限り、漢語からの借用語は除外している。

満州語音訳に用いられる漢字の声母のパターンと分布

	J I		G I		C I		K I		S I		H I
	A B C		A B C		A B C		A B C		A B C		A B C
1)	見見見 2		見見見 15		溪清清 16		溪溪溪 16		書書書 37		曉曉曉 8
2)	見精精 33		見影影 1		清清清 19		溪見見 1		書心心 13		溪溪溪 1
3)	精精精 5		莊見見 1		清昌昌 1		溪曉曉 1		書生心 1		心曉曉 1
4)	清清清 2		曉曉曉 1		昌昌昌 2		見見見 1		心心心 7		
5)	清精精 3				見清清 1		清溪溪 1		曉曉曉 1		
6)	溪精精 1						曉曉曉 2		曉心心 2		
7)	莊莊莊 1								生心心 1		
8)	章章章 1										
9)	章精精 1										
10)	昌昌昌 1										

4.

さて、順治初纂本の持つ性格について、松村(1972: 72)から以下の記述を引いてその一端を提示したい。

ところが、順治十二年に告成された太宗実録の不備なることは、満漢本の巻数の不一致においても、その一端がうかがえるばかりでなく、少くとも漢文本は、満文の直訳に近く、漢文としての表現に多くの問題点を含んでいたことは、康熙重修の際に変改した箇所と比較すれば明らかである。世祖はあらためて鄭親王濟爾哈朗に重修を命じたのである。……

同版が太宗老檔に基づいていることはすでに触れたが、上の引用箇所と言う訳文の生硬さに加えて音訳漢字を俗音にならっている点も、改められるべき不備のひとつとみなされたことであろう。(先に挙げた康熙六年(1667)の対校を記録した檔案には「有〔満漢〕嗣義雖合而漢文近於俚俗。」とある。(この〔 〕の意味は、今西(1935a: 44)も述べているが、原引用者の徐中舒の言及がないので不分明である)しかし、それは編者達の誤解や不手際というよりも、むしろ実際の口語的音価に忠実であろうとした結果であり、あくまで

規範的立場からみたうえでの「不備」であることは、本章により明らかになったことと思う。

さらに、稲葉(1932: 51-54)掲載の音訳漢字の対照表(第一例)の中には、次のような例がある。(下線は引用者)

『武皇帝實録』	『康熙修改實録』	『乾隆修定實録』
石宝 <u>奇</u>	錫宝 <u>齊</u> 篇古	錫宝 <u>齊</u> 篇古
弩兒哈 <u>奇</u>	弩爾哈 <u>齊</u>	〔諱 欠〕
黍兒哈 <u>奇</u>	舒爾哈 <u>齊</u>	舒爾哈 <u>齊</u>
牙兒哈 <u>奇</u>	雅爾哈 <u>齊</u>	雅爾哈 <u>齊</u>
木兒哈 <u>奇</u>	穆爾哈 <u>齊</u>	穆爾哈 <u>齊</u>
阿 <u>吉</u> 格	阿 <u>濟</u> 格	阿 <u>濟</u> 格

そして、次のように論じられている。

以上摘出するところの人名に見れば、第一段の用字は極めて粗野であり、之を典雅ならしめたのは、第二以下修改時の作用である。乾隆実録は、大体康熙のそれに順応したこともわかる。蓋し、開国当時にては、満人間に漢字漢文を曉るもの僅少であり、訳出する人々にも、それが習熟していなかったから、さしあたり、近似音の漢字を充て、満足したわけではあろうが、さて、愈々中国に君臨し、漢文字に対する理解の程度の昂上し、一方、これに参加した支那学者には、当代一流の人物もいたという事情あり、その粗野を改めて典雅とし、醜惡の文字は、回避した。これらのことは、われら外人に在りては、さした問題ではないけれども、清初の満人にとりては、相当重大視されたであろう。……

こうした事情は、『文皇帝實録』の各纂修版に関しても、全く同じであったと考えられる。

なお、順治初纂本は全四十巻から成り、うち本章で用いた「天聰九年」の記事は第十八巻から第二十一巻にあたる。分量的には一部であるが、そのことは本章で述べた見解の成否に直接の関わりはないと考える。

第二章 借用語表記から見た漢語の牙音と喉音の舌面音化—『〔満文〕大清太祖武皇帝實録』を資料として—

以下では、原典での表記の仕方に関わらず綴りは字音毎に区切り、団音字の場合は、先に非舌面音で書かれている綴りを記し、コロンの後に舌面音の綴りを置いた。たとえば、1.1.2 のように、「家(jia)」は *jiya* と書かれることが規範的な綴りであるが、*ja*, *ji* などのバリエントはセミコロンの区切った。

1. 見母と精母

中世漢語において見母[k]と精母[ts]を持つ字音については、以下のような例がみられる。
付録10参照。

1.1 見母

1.1.1 韻母 -i

sai me ji(洒馬吉), *ji šan*(季善), *g'o jio ji*(郭肇基), *li ji hiyoo*(李繼学)

「郭肇基」の「肇」を *jio* と書くのは、正歯音三等としての音価[tʃiau]を写した可能性がある。下の 1.1.4 参照。他に、*sin*<「慎」(3.1.6)も同様だが、先に述べたように、正歯音三等字は捲舌化した開口呼・合口呼として書かれるのが普通であり、*-i-* を持つ齊歯呼の例は少ない。もちろん、すでに述べたように、老満文時代の書き方を継承している可能性もある。

1.1.2 韻母 -ia

ci jiya(戚家), *in jiya dzuwang*(殷家庄), *sung jiya poo*(宋家泊), *hū jiya dung*(胡嘉棟); *mu ja pu*(穆家堡); *ai ji pu*(艾家堡)

1.1.3 韻母 -ie

giyai(街): *cen jio jiyei*(陳九階)

1.1.4 韻母 -iao

gio can(教場): *jiyoo hūwa doo*(覺華島); *jioo g'oo*(膠鬲); *joo se joo*(趙率教)

韻母 *-iao* は規範的な綴りとしては、*-iyoo* とするのが普通であるが、初期文献では

-y- を省いたり、oo と o の綴りのゆれがみられる。後者は満州語固有語にもみられる現象で、toome/tome《～毎に》などがある。また、満州語には本来ない音である[n]を[n̩]で写すことも、早い時期の書写の特徴である。「膠鬲」の「鬲」を g'oo と書いているのは、中世漢語の音価[kɔ]（『中原音韻』の歌戈韻）に対応すると考えられる。十八世紀の『滿洲實録』では、現代音と同じ ge と表記されている。

1.1.5 韻母 -iu

cen jio jiyei (陳九階)

1.1.6 韻母 -ian

giyan giyan (件件), tai giyan (太監): jiyan jiyūn doo (監軍道), yung ning jiyan (永寧監), jiyan ciyang (鹹場)

1.1.7 韻母 -in

gin ju (金州): jin guwan (金冠), jin ioi hoo (金玉和), jin jeo (金州), jin li (金勵), jin an pu (錦安堡), jin cang (錦昌), jin jeo (錦州)

1.1.8 韻母 -iang

giyang (江), jen giyang (夾江), jen giyang (鎮江), ya lu giyang (鴨綠江): jen jiyang (鎮江), jiyang si (江西), jiyang bi (姜弼), jiyang hūng li (姜功立); jang bi (姜弼)

1.1.9 韻母 -ing

jung gin (忠經): be jing (北京), biyan jing (汴京), dung jing (東京), jang ing jing (張応京), wang jing (王京), jing liyoo (経略)

1.1.10 韻母 -ūn

jung gin (中軍): jiyan jiyūn doo (監軍道), jiyang jiyūn (將軍), sung jiyūn (中軍)

1.2 精母

1.2.1 韻母 -i

dai ji bin (戴集賓), fung ji pu (奉集堡)

1.2.2 韻母 -ie

jiyei guwan ting (接官亭)

1.2.3 韻母 -ian

ioi hūng jiyan (俞鴻漸)

1.2.4 韻母 -in

hūwang jin(黄進), sui jin sung(崔盡忠)

1.2.5 韻母 -iang

fu jiyang(副將), jiyang jiyun(將軍), san jiyang(參將)

1.2.6 韻母 -ing

u jing ing(武靖營), u jing men(武靖門), cang jing(長靜), da jing(大靜), jen jing pu(鎮靜堡), jing an(靜安), jing iowan(靜遠), sio jen jing(徐鎮靜); jen jiyang pu(鎮靜堡)

見母字の表記に無気後部歯茎破擦音の満州文字 ji(-)[tʃi]を用いているのは、『武皇帝實録』が作成された十七世紀中期において、見母が舌面音で発音される漢語方言からこれらの語を借用したからと考える。すでに述べたように、満州語が接触した漢語方言は北方語のうちの北京官話方言にきわめて近いものと考えられ、従ってこれも前章と同じく当時の漢語の舌面音化の状況を反映する言語資料とみなされる。

また、同じ見母字でも無気軟口蓋閉鎖音の gi(-) で書写した例が若干みられるが、ひとつは漢語の方で未だ舌面音化が起きていない時期にこれらが借用された語の場合である。gi(-) で書かれたものに、普通名詞や固有名詞でも比較的早くから満州語の語彙に入ったと思われる地名 (ya lu giyang (鴨緑江) 1.1.8 など) が含まれることから、そのように推測できる。もうひとつは、漢語話者自身の音価のゆれの反映の場合であり、後述するように、ひとつの人名の表記に非舌面音・舌面音の二種類の書写があるものについては、前者がより早い時期の借用とは考えにくいからである。また、上の 1.2 でみたように、精母字も満州文字では ji(-) で書写される。これは精母の音価[tʃi]に最も近い満州語音が、やはり ji(-) だからである。満州語で精母と舌面音化した見母が同一表記になることと、尖団の合一という漢語の音価の異同とを直接関係づけることができないことは、言うまでもない。

2. 溪母と清母

同様に、中世漢語において溪母[kʰ]と清母[tʃʰ]を持つ字音については、以下のような例がみられる。

2.1 溪母

2.1.1 韻母 -i

jeo dai ci(周大岐), be ci se(白奇策), ci bing sung(祁秉忠), kio i ci(喬一琦)

2.1.2 韻母 -iao

kiyoo(橋), kiyoo(轎); kio i ci(喬一琦): cioo me sung(蕎麥衝), ping yang cioo; ping yang cio(平洋橋)

2.1.3 韻母 -ian

k'ang ing ciyan(康応乾), ciyan ma ling(捧馬嶺)

2.1.4 韻母 -in

cin dzung(欽宗)

2.1.5 韻母 -ing

hiya guwe cing(夏国卿), cing yün(慶雲)

2.1.6 韻母 -ü

lio cioi(劉渠)

2.2 清母

2.2.1 韻母 -i

ci jiya(戚家)

2.2.2 韻母 -ian

ciyan sung(千綵)

2.2.3 韻母 -iang

i du ciyang(一堵牆), miyoo ciyang(烏鎗)

2.2.4 韻母 -ing

cing tai ioi(青台峪), jang guwe cing(張国青), cing hoo(清河), cing yang(清陽), da cing pu(大清堡)

2.2.5 韻母 -üan

g'an ciowan pu(甘泉舖); sioi guwe ciowen(徐国全); jang cuwan; jang hiowan(張詮)

2.1 の溪母字が、有気後部歯茎破擦音の満州文字 ci(-)[tʃ'i] により書写されているの

も、これらが舌面音で発音されたためであろう。2.1.2 で「橋」や「轎」が非舌面音として書かれているのは、これらの普通名詞が早い時期の借用だからと思われる。興味深いことは、同一の人名「喬一琦」(2.1.1, 2.1.2)において初めの溪母字は非舌面音で写し、後の溪母字は舌面音として写していることである。これはまさに漢語話者の発音にゆれがあったことによるとと思われる。また、前節と同じ様に、清母[ts'ɿ]も舌面音化した溪母の場合と同じ満州文字により書写される。

3. 曉母と心母

最後に、中世漢語において曉母[x]と心母[s]を持つ字音については、以下のような例がみられる。

3.1 曉母

3.1.1 韻母 -i

li si mi(李希泌), be li si(百里奚)

3.1.2 韻母 -ia

hiya guwe cing(夏国卿)

3.1.3 韻母 -iao

li ji hiyoo(李繼学)

3.1.4 韻母 -ian

hiyan san pu(險山堡), dzoo cu hiyan(鄒儲賢), hoo si hiyan(賀世賢): hoo si siyan(賀世賢), jang siyan(張賢)

3.1.5 韻母 -iang

hiyan(香)

3.1.6 韻母 -ing

hing sin yan(刑慎言), hing san(杏山): sing san(杏山), da sing(大興), si sing pu(西興堡)

3.1.7 韻母 -iong

hiong ting bi(熊廷弼); kiong yoo(熊岳)

満州文字では k と h は圈の有無により区別されるが、後者の場合はその脱落により

*hiong と書くべきところが、kiong という文字表記になったと思われる。

3.1.8 韻母 -ün

fang jeng hiowan(房承勲): ju si siyün(朱世勲), lio si siyün(劉世勲); ju si śün(朱世勲), lio si śün(劉世勲); joo yuwan śun(周元勲)

hiowan という書写は本来「玄・懸(xuan)」などにあてられるべきものであるが、新満文で a と e を区別する点の脱落とすれば *hiowen になり、「勲」の中世音の音価[xiuən]に対応するとも考えられる。『満洲實録』では hiyün と書かれているが、こちらは破擦音化して現代音になる前の音価にあたるものであろう。ちなみに『清文啓蒙』では、「勲」は hiyün, hiowen の双方にあてられている。この綴りは漢語表記のためのものなので、二種類の書き方があるのは、当時の字音の揺れを表すものであろう。

3.2 心母

3.2.1 韻母 -i

hoo si(河西), jen si pu(鎮西堡), jiyang si(江西), san si(山西), si me ceng(西麦城), si sing pu(西興堡)

3.2.2 韻母 -iao

sio be se(蕭伯芝); hioo seng(蕭聖)

3.2.3 韻母 -iu

sui Zu sio(崔儒秀); siyu yan(岫巖)

3.2.4 韻母 -ian

boo ceng siyan(鮑承先), jang ming siyan(張明先); boo ceng hiyan(鮑承先)

3.2.5 韻母 -in

li hūwai sin(李懷信), sin an(新安), sin diyan(新甸)

3.2.6 韻母 -iang

po ting hiyang, poo ting hiyang(頗廷相)

3.2.7 韻母 -ü

sioi guwe ciowen(徐国全); sio jen jing(徐鎮静)

韻母 -ü は普通 -ioi と書かれるが、後者は中世音の音価[siu]を写した可能性もある。

3.2.8 韻母 -üan

hiowan fu(宣府), wang hiowan(王宣)

喉音の曉母字も、舌面音化したものは後部歯茎摩擦音の si(-)[ʃi] で書写されている。また、3.1.4 で同一の人名「賀世賢」に非舌面音・舌面音の二種類の表記があるのは、前節でみたように、音価のゆれを反映した例であろう。心母も同じ満州文字で書写される。

さて、これら舌面音として写されている牙音字・喉音字の表記は、後の『満洲實録』満文本では全て改められている。すなわち、齒音字と区別すべく、見母は gi(-) に、溪母は ki(-) に、曉母は hi(-) にそれぞれ改変される。これらが語源意識に基づいた規範的・伝統的正音を指向して改められたことは明らかである。初期の満州語文献にこうした漢語の舌面音化を表す例があり、またそれが後世改められていることは、すでに池上(1987b: 25)が満文老檔に関して指摘しているところである。

さて、三田村(1957)も上に挙げた現象について論じているが、そこでの見解は筆者の考えとは異なっているので、触れておく必要がある。三田村(1957)は『武皇帝實録』そのものではなく、国会図書館にある『武皇帝實録』とほぼ同一の体裁・内容の文献(以下、国会本と表記する)によって論じている。そこでは、例えば「李継学」の満州語表記を国会本では li ji hio とし、『満洲實録』では lii gi hiyo としていること(li~lii 及び hio~hiyo は正書法の問題である)を「……(二)満州朝廷が入関して北京に鼎定するようになってから、満州文字の音価が変化したこと、即ち満州の地に行われたシナ語中の山東方言の訛りに、北京音がとって代わったことによる影響等が見られる。後者の例として左の表のうち、se→jy, ji→gi, ci→ki, hi→si, si→hi という風に転化していることがあげられる。既にこの事実は Möllendorf⁷⁷ も別な方面から指摘しているが、思うに、国会本のそれには、尚満州時代に使われた発音をそのまま音写した形跡がうかがわれる。……」(p. 39-40、旧字体と旧かなづかいは改めた)としている。この見解に従えば、「継」の ji(国会本) : gi(『満洲實録』)という違いは、前者が山東方言により、後者が北京音によっているからということになる。すなわち、筆者の考えとは全く異なる原因によるものとみている。しかしながら、一般に山東方言では牙音・喉音の舌面音化は起こっていない以上、「継」を ji と写している原因をこの方言に帰することは疑わしいと言わざるをえず、また、それを gi に改めていることも、十八世紀後半という『満洲實録』の成立時期からして、その時代の北京音にならったというよりも、満州文字による漢字音表記を漢語の「正音」に対応させるという規範的立場からの人為的処置の結果とみるべきであろう。また、メレンドルフが指摘しているという満州語音の特徴については、漢語からの干渉による一種の「借用」とすべき現象であり、恐らく清朝半ば以後に顕著となることで

あって、初期の満州語文献と関連づけるべきことではないと考える。服部(1986: 85-86)参照。「満州の地に行われた」漢語がどのような方言であるかは、「山東方言」であるかどうかをはじめとして慎重に再考すべきことと思われる。なお、見母・溪母・曉母をそれぞれ [c], [c'], [ç] で発音する山東方言もあるが、それでも「繼」を ji と書写する原因をこの方言に帰することは困難であると思われる。さらに、筆者のみた限りでは、同方言に特徴的な日母字に関して満州漢字音にその形跡を見つけることはできない。東(1964: 2)、袁(1989: 31)及び中嶋(1989)参照。

4. 尖音・団音の部分的合一

さて、次に筆者の考えの第二の点に移る。すなわち、「尖団の合一」が部分的に生じていたとの見解である。この「部分的」の意味は「方言的・空間的」ということではなく、尖音の三声母 [ts], [ts'], [s] のうち最後の心母のみが舌面音 [ɕ] となり、先に舌面音化していた曉母と合一して同じ音価で発音されることがあったということである。そうした推測が依拠する事実、3.2 の心母の項に満州文字の hi(-) で書写されている例がいくつか存在することである。すなわち、hioo seng(蕭聖、3.2.2)、boo ceng hiyan(鮑承先、3.2.4)、po(o) ting hiyang(頗廷相、3.2.6)、hiowan fu(宣府、3.2.8)、wang hiowan(王宣、同左)である。これらは心母字であるから、規範に従えば満州文字では後部歯茎摩擦音の s i(-) で写すことが予想されるにもかかわらず、このように hi(-) で書写されている。その理由として、上述の考え以外に可能と思われるものを次に検討する。

第一の可能性は、満州文字の hi の音価が [ji] であったとする考えである。この場合 hi と si は同じ音価になり、満州文字をにより漢字の尖団の区別を表した『圓音正考』の成立事情と矛盾することになる。また、満州語の後身とされる錫伯語では、両者は区別されていることからこう考えることには疑問があろう。山本(1969)、河野(1979: 543-545)、服部(1986: 85-86)、季他(1986: 48)、李他(1986)等参照。従って、筆者の考えは落合(1987: 140)とは異なる。

第二の可能性は、漢語の中でも心母を硬口蓋摩擦音 [ç] で発音する方言音を書写したとするものである。この案を取るためには、そうした方言音の存在が他の資料からも確認されることが必要であるので、現段階では考えうる可能性のひとつにとどまると思う。また、[ɕ] のバリエントとしての [ç] の存在は考えられないこともないが、その場合でもやはり心母の舌面音化を前提としていることになる。

第三の可能性は、漢字の欠画のような言語外的事情により、si(-)を避け hi(-)を用いざるをえなかったというものである。確かに皇帝の諱と同じ綴りになるものを避けさせて、できるだけ近似した音価の別の綴りにさせる慣習はある。落合(1986: 183-184)参照。ここにはみられないが、興味深い避諱の例として「玄」にあたる hiowan を避け、この字音としては siowan と書くという『圓音正考』の指摘がある。これは康熙帝の諱にこの字が含まれるからである(漢字では欠画する)。落合(1986: 184)で述べられているように、ある種の満州語音節を避ける場合、なるべく近似した音価を保てるように工夫するものだが(例: jen→jeng, ning→niyeng)、hiowan の代わりに siowan を用いることは、それぞれ満州語の固有語でも区別のある[xi]と[ji]を入れ換えるということになる。これはそもそも漢語の「尖団の合一」により、曉母字「玄」も心母字「宣」も満州語音 siowan にあたる同一の音価になっていたという当時の状況があったためと考える。しかしながら、3.2.2 や 3.2.4 では同じ漢字が si(-)でも書かれていることが、すでにこうした慣習によるという考えへの反例となるうえ、これらの心母字=hi(-)の綴りは後の『滿洲實録』では、全て si(-)に書き改められていることから、そうした正書法に基づくとはみなし難い。(なお、『武皇帝實録』にみられる固有名詞の po(o) ting hiyang(頗廷相)だけは、『滿洲實録』では正しく po ting siyang になっているが満文太祖老檔では po ting hiyang のままである。また、一般的な語でも coohiyan(朝鮮)、hiyalu(線絡)、hiyanci(線鎗)は改変されていない。なお、「象棋」には hiyangci, siyangci, siyangki の三つのバリエーションがあり、尖団の対応が少しずつ訂正されていて興味深い。これは普通名詞で改変された例で、hiyancu, siyanceo(線紬)も同類である。Schmidt(1933: 258-259)参照。これらの例から、初期には「線」を hiyan と音訳することが定着していたと思われる)

従って、これらの他のより蓋然性の高い理由として、これが満州語における漢字音設定の際の字音の錯誤、すなわちこれらの心母字を曉母字と誤って考える hypercorrection のために、hi(-)で写されたと考えることができる。そしてこうした錯誤の生じた原因として、心母・曉母が同音価になっていた状況が考えられるのである。これと比較すると、『武皇帝實録』では精母字や清母字をそれぞれ gi(-), ki(-)で音訳した例は見出されないで、破擦音はこのような状況にはなかったと思われる。これが部分的な「尖団の合一」が起きたとする根拠である。なお、後述の『舊滿洲檔 天聰九年檔』にみられる「選」の字音の例では顕著であるが、上述のふたつの例においても「宣」には同じ満州文字が当てられている。このことは上述の「線」と同じく、「宣」の満州語の漢字音表記として、hiowan が

定着していたためであり、一度「宣」= hiowan とされると、それが錯誤によるものであろうと元の字音とは無関係に、満州語として言わば再生産されることを意味している。言うまでもなくこれらの漢字音は満州語の問題であり、外国語における漢字音が定められ用いられることは必ずしも本来の音価に基づくことなく行われうるのである。（日本漢字音における「慣用音」がその一例である）

さて、これと同様の例を、『清文啓蒙』にみることができる。それは満州語音節に漢字を対置させることでその音価を表している、巻一の「切韻清字」および「満州外單字」の項である。これらの例の中には、尖団の区別を正しく対応させているものが最も多いが、尖音字をあてるべき後部歯茎音の満州文字 ji-, ci-, si- を持つ語に団音字をあてている例もみられる。これは、讃井(1980: 168-169)、落合(1987: 138-140)、池上(1987b: 24)、岩田(1988: 37-38)などで論じられている。付録8 参照。

ciya 掐, jiya 夾, jiyo 飢啣切, siya 瞎, jiyai 街, siyai 懈, ciowei 闕,
jiowei 厥, jiowan 捐, ciyun 群, jiyun 軍, ciowen 群, jiowen 軍, jiyang 姜,
ciyoo 蹻, cioi 曲, jioi 居, sioi 虛, ciong 窮, jiong 綱, siong 凶

これらは『武皇帝實録』の場合と同様に、団音字を舌面音で発音したためにこのように近い音価の満州語音節に対置されたと思われる。さらに興味深いことはこの逆の対応、すなわち団音字があたるべき軟口蓋音の満州文字 gi-, ki-, hi- に尖音字をあてている例もみられることである。

kiye 切, giye 接, giuwei^ㄗ 絶, hiowan 宣, kiyang 鎗,
giyoo 焦, hiyoo 蕭, gioi 揪衣切, hioi 羞衣切, giong 揪英切, hiong 羞英切
(また、第四字頭には hin に対音漢字として、心母の「辛」をあてた例がある)

これらは『武皇帝實録』の心母字=hi(-)と同じ対応関係になる。そして、こうした現象は『圓音正考』の原序で「……第尖團之辨、操觚家闕焉弗講、往往有博雅自詡之士、一矢口肆筆、而紕繆立形、視書璋爲璽、呼杵作杖者、其直鈞也、……」と指摘されていることにあたるとと思われる。と言うのも、『清文啓蒙』の成立は『圓音正考』に先立つこと十数年に過ぎず、その著者はすでに尖団の区別がはっきりしなくなっていた北京方言

の話し手であったために、このような混乱を生じたと考えられるからである。ところが、この『清文啓蒙』の著者舞格が満州語音については混同していないことは、gi-, ki-, hi-の音節の文字の下には必ず「此句咬字念」という注記があり、他方同じ漢字をあててはいても、ji-, ci-, si-の音節の文字にはそれがないことから明白である。

この「此句咬字念」については、初出の箇所「咬字者。舌尖下貼。舌根上貼也。」と説明されている。これは落合(1987: 137)にあるように、この注記を施した満州文字 gi-, ki-, hi-は軟口蓋音で発音せよという意味に解釈される。(但し、落合(1987: 137)では「……このような注記をつけたのは、この当時の満州語では、ki-, gi-, hi-の音節を、文字どおりに軟コウガイで調音することが最早難しくなった話者が存在したからではないだろうか。……」としているが、この注記の対象になる者が『清文啓蒙』を用いる漢語話者であることから、むしろ彼らが母語である漢語の「尖団の合一」の干渉を受けて gi-, ki-, hi-までも舌面音で発音してしまうことを戒めたものではないだろうか) また、池上(1987b: 24-25)にも「gi^ㅍ ki という二つの文字音調は、舌の本体と口蓋で仕上がるもの、舌を先にして歯に送れば、ji, ci となる」という『満漢成語对待』の説明が引かれている。なお、庄垣内(1979: 42)で、『清文啓蒙』において「蕭」が siyoo とともに hiyoo にもあてられていることから「……これはこのような GI HI(=満州文字の hi, 引用者)が満州語では満州語音の ji si(=音価としての[ji], 引用者)を表記したことを示している。……」としていることは、上述の「此句咬字念」の注記を無視した見解と考えられる。

つまり、舞格は注記を施すことにより語頭子音の弁別を行ったものとして、上述のように満州語音と漢字の尖団が合わない例があっても関知しなかったのであろう。『武皇帝實録』の場合とは規模こそ違え、心母・曉母が同音価になったことによる現象としては同質のものともみなすことができるであろう。

さて、3.2.2の「蕭」や3.2.4の「先」は si- でも hi- でも書かれているが、これと似たものに、後述の『舊満洲檔 天聰九年檔』で「選」が šuwan/hiowan の二種類の表記を持つ例がある。筆者の考えによれば、これは借用の経緯の違いであって、「選」は中世音では[siuen]という音価であるから、*siowan とすべきところを šuwanと写しているのは、満州語話者にとってより口語的な形態であると思われる。(ja<「家」2.1.2 や joo<「教」2.1.4, cuwan<「詮」2.2.5 など同様の例で、口語では介音を失った発音が行われたためであろう) こうした口語的形態の存在から、満州語への借用経路が複数あったことが推測されるが、このような例は少数であり比較的初期の文献に限られている。(例え

ば、口語的形態の一例として、『舊滿洲檔 天聰九年檔』にみられる suming güwan<「総兵官」がある。「総」の語頭の破擦音は満州語にはない音なので[s]で借用され、語尾の[g]も[n]で借用された後、「兵」の語頭音と融合を起こして[m]に変わっている。「兵」の語尾の[g]は次に軟口蓋音があるため、保たれている)

こうした口語的性格を反映した例もみられるとはいえ、やはり大多数の借用は文字を介してであり、実際に満州族にとって翻訳は先進中華文明の摂取のためには急務とされていた。1599年に初めて用いられた無圈点文字が約三十年の後に改良されたのは、満州語音にとって不可欠の弁別性を蒙古文字が持っていなかったため必然的な結果であったが、この時漢字音を表すためのガリック文字も併せて制定されていることは、それもまた必要の度合いが少なくなかったからと推測できる。それまでにも漢語文献の翻訳を通じて、漢字音の表記の工夫は様々に試みられていたであろうが(序説の『清史稿』参照)、ガリック文字作成の事実はその時点において漢語音韻の組織的な分析が完了していたことを意味している。そもそもこの時参考にされたのは韻書などの文献資料が主であろうが、この際特に口語的音価の干渉によって声母の誤認という事態も偶発的に生じたのではないだろうか。

さて、見母字・溪母字・曉母字の書写に、非舌面音文字を用いたものと舌面音文字を用いたものの二種類がみられることはすでにみた通りであるが、以下でそれぞれの数を比較する。下は前者が非舌面音文字で書かれた漢字の数であり、後者が舌面音文字で書かれた漢字の数である。但し、前者のうち、普通名詞は漢語で舌面音化が起こる以前に満州語が借用した可能性もあるので、()内に記した。

見母字 3(6):20

溪母字 1(2):12

曉母字 8(1):6

前二者の牙音字とは異なり、喉音字は非舌面音文字の hi(-) で書かれている例の方が舌面音文字の si(-) で書かれている例よりも多い。これはどういう理由であろうか。ひとつの解釈は、これが当時の言語状況をそのまま反映しているという見方である。しかし、団音の舌面音化は、研究によってはかなりさかのぼることができるものもあり、この時期に未だ喉音だけが舌面音化の度合いが低かったと考えることは、いささか困難であると思う。(これは先にみたように、同一名に二種類の書き方があるような揺れを否定するものではない) 別の解釈はこれを人為的操作によるとする見方であり、こちらの方が蓋然性は高いように思う。すなわち、牙音は結果的に舌面音として発音される口語的音価の方

に従い、他方喉音も実際には舌面音で発音されることが少なくなかったにもかかわらず、「正音」にならうという規範意識に基づいて、曉母は hi(-) で写すという人為的操作が行われて非舌面音文字で書かれた例が比較的多く残ったのではないだろうか。このことは、言い換えれば曉母字の書写の時には特別な注意が払われたことになる。何故特に注意されたかを考えると、これは[ɕi]で始まる音節の漢字には hi(-) で書くべき曉母字と si(-) で書くべき心母字の二種類が含まれることが知られており、建前としては両者を区別することが要求されていたからではないだろうか。勿論、これが厳密に行われていたならば、字母の誤認はもとより曉母字を舌面音として書くことも起こりえなかったはずである。しかし実際には『武皇帝實録』はいくつかの原資料に基づくもので、それらの資料自体が複数の書き手により作られた様々なタイプの書写形を含んでいたために、結局この方針は不徹底に過ぎなかったのであろう。

さて、前章では『文皇帝實録』の以下の例を引用した。

coshil	hiya	taiji	神田他(1975: 10)
綽斯習児	蝦	台吉	順治本(1655)
綽斯希爾	蝦	台吉	康熙本(1682)
綽斯希爾		台吉	乾隆本(1739)

この例においては満州語音の -hi- を順治本では心母字の「習」を用いて音訳し、他方それを改訂した康熙重修本、乾隆三修本では曉母字の「希」を用いている。すなわち、これは初め「習」を曉母字と考えて用いた個所を後に改めたとみなすことができ、そこではやはり心母と曉母が同音価になっていた状況を想定するべきと考える。

さて、これと同様のことが『八旗通志初集』にもみられる。そこでは多くの満州語人名が漢字音訳されているが、そのうち、hi を含むもので心母字により音訳されている例を次に挙げる。(テキストは『八旗通志列伝索引』(東洋文庫満文老檔研究会)を使用した。なお、満文本は漢文本からの翻訳とされるが、この点は筆者の考えの成否とは直接関係はない)

hife「西佛」, hiribu「西里布」, hida「席達」,
alhio「阿爾修」, sulhio「蘇爾修」

全部で五例あるが、「西・修」は二例ずつある。これはそれらが本来心母字であり si(-) と書くべきにもかかわらず、音訳の際曉母字と誤認されることで再生産されたことによる。ところが、全体からみると、hi を含む音節にあてられる字は圧倒的に曉母字が多く(63例中57例)、また「西・席」は si の音訳に用いられる例が最も多い(28例と22例)。これはまさに規範的な書き方に従っている。ゆえに、先に検討した可能性のうち第一と第二のように、満州文字 hi に [ʃi] という音価を想定したり心母に [ç] という方言的バリエーションを考えるとといった内在的な必然性を仮定すると、今度は hi(-) = 心母字の例の数が少なすぎることになり、上の五例は字音画定上の誤りとみなしうる範囲であると考ええる。

そもそも同書は『文皇帝實録』の康熙重修本より後に作られたにもかかわらず、順治初纂本のように舌面音の ji-, ci-, si- の音訳におのおの見母字・溪母字・曉母字をあてるなど非規範的な例が若干みられる。また、その成立時期は『圓音正考』に近いために、すでに北京方言で広く「尖団の合一」が生じていた状況下で作成されたと思われるが、興味深いことに『武皇帝實録』ではみられなかった満州語の有気軟口蓋閉鎖音と清母が対応している例、すなわち、borokitat を「撥爾齊他特」、kijahai を「齊查海」と音訳しているものがあり、これは「尖団の合一」により「齊」を溪母字として誤認したためと思われる。

5. 『舊滿洲檔 天聰九年檔』

さて、先に述べたように、池上(1987b: 25)がすでに満文老檔の漢語舌面音化表記について述べているが、『武皇帝實録』と同じく初期の満州語文献である『舊滿洲檔 天聰九年檔』にも次のように舌面音化した漢語からの借用語が多数みられる。(テキストは神田他『舊滿洲檔 天聰九年1-2』を使用した。但し、以下で字音毎に切り下線を付けたのは引用者である。なお、現存する天聰九年檔の成立時期は順治年間(1644~1661)とされている。

また、『武皇帝實録』と同じ年の満文木牌には次の例がみられる。liyan hiyan:

yangsang(良郷)/disin(定興)。松村(1971: 127)参照)

1) 見母

k'ao kung ji(高拱極)/ dung jiya k'ao(董家口), pan jiya k'ao(潘家口)/ gio can(教場)/ giyan giyan(件件), tai giyan(太監): jang jiyan(張儉)/ gin ju(錦州): jin de seng(金得生), jin e dz(金紫), jin hai se(金海色・金海塞), jin i ho, jin i hoo,

jin i hū(金玉和), žin jin(任金), cen jin(陳錦), loo šoo jin(羅緒錦)/ giyang(江),
he lung giyang(黑竜江), jen giyang(鎮江): jiyang šu bei(姜守備); jin jan(鎮江)/
be jing(北京), jing hecen(京都), wang jing(王京), hiyan jing(咸鏡)/ jioi howa
doo(寬華島)/ jung gin(中軍): jiyan jiyun; jiyan jiyün(將軍), jiyün men(軍門);
jiyan jiün; jiyan jioin(將軍)

2) 精母

li jin gūng(李進功), u šoo jin, u šu jin, ü šoo jin(吳守進)/ g'ao fu jiyang(高
副將), san jiyang(參將); jang fu jan(張副將), li fu jan(李副將), meng fu jan(孟副
將), san jan(參將)/ jing an puo(靜安堡)/ li jiyun(李俊)

3) 溪母

tiyan ci(天啓), ci hū(旗鼓)/ meng cio fang; meng coo fang(孟喬芳)/ cing(卿)

4) 清母

ci güwe šo(齊國儒), ci howan gūng(齊桓公)/ ciyan sy(僉使); cen sun(千綏)/
mioo cang; mio can(烏鎗)/ cing ceng(青城)

5) 曉母

šang k'o si(尚可喜), si fang k'ao(喜峰口), si se(戲子)/ hio sun(孝順)/ hiyan
jing(咸鏡), hiyan(県): kü siyan(崧 県), dz ming siyan, sy ming siyan(支名顯・支明
顯), yang ming siyan(楊名顯); yang ioi šan(楊營顯)/ sin jeo(忻州), sin keo(忻口),
li si sin(李時馨)/ hiyan(香)/ hingg-an(興安): yang fang sing(楊方興), yang sing
güwe(楊興國)/ hioi si cang(許世昌)/ hiowan de(玄德), tang hiowan sung(唐玄宗)

6) 心母

šan si, san si(山西), šan si, san si(陝西), si ning pu(西寧堡)/ siyu yan; šu
yan(岫巖)/ boo ceng hiyan(鮑承先), coo hiyan, co hiyan(朝鮮)/ sin keo(新口)/
ceng hiyang(丞相)/ hiowai da hū(薛大湖)/ wang si šuwan(王世選); hiowan fu(宣府),
cen bang hiowan(陳邦選), lio yün hiowan(劉応選), wang si hiowan(王世選)

6. 朝鮮資料

金(1990)によれば、『三訳総解』(1703)、『清語老乞大』(1703)、『八歳児』(1777)お
よび『小児論』(1703)には次のような団音の舌面音化を表す例がある。満州文字と同じ表
音文字のハングルによる資料として、その価値は注目すべきものがある。(下線は引用者)

1) 見母

Hūi-Ji-San(会稽山), G'o-Jiya(郭嘉), Mao-Jiyai(毛玠), loi-Jin(于禁), Jiyān-Giyang(建安), Sun-Jiyan(孫堅), Yuwan-Jiyan(元儉), Dzo-Jiyūn(涿郡), Jiyūn(郡), Nan-Jiyūn(南郡), Tsai-Tsang-Jiyūn(柴桑郡), Jiyūn-Jeng-Sy(軍政司), Tsan-Jiyūn(參軍), Iz-Jing(子敬), Jing-Jeo(荊州), Jing-Tsu(荊楚)

2) 溪母

Lio-Ci(劉琦), Jang-Cin(蔣欽), Sun-Ciyan(孫乾)

3) 曉母

Lio-Si(劉熙), Fung-Siyo(奉孝), G'o-Fung-Siyo(郭奉孝), Sioi-Cang(許昌), Sioi-Cu(許褚), Sioi-Du(許都)

7.

以上、十七世紀中期の満州語文献から、牙音・喉音の舌面音化が当時すでにかなり広く行われていたことを確認した。ほぼ同時期の韻書である『西儒耳目資』(1626)が、これらを非舌面音として記述していることを考えると、韻書というものの規範性をうかがい知ることができる。また、後の満州語文献では、漢語の「正音」にならって尖団を書き分けるという人為的操作をしたため、古い文献の方が新しい音価を記すことになっている。

ところで、本章で扱った『武皇帝實録』のテキストは、松村(1992)が明らかにしたように順治年間(1644~1661)とされているが、これは重修本であり、今西(1967b)が述べるように最初は崇徳元年(1636)に作られたものである。それでは、ここで問題とした団音字の漢語借用語は、はじめはどのように書かれていたのであろうか。これは実際にテキストをみるまで推測に過ぎないが、筆者の見解ではおおそ順治本と大差なくやはり舌面音化した綴りになっていたと考える。ひとつには、先に挙げたように、同じ崇徳元年の満文本牌には、舌面音化した例がみられるからである。また、順治本で仮にすでに規範的な書き方をしていたならば、重修の際にそれは踏襲されるはずであるし、作りなおした結果がこれまでにみたように舌面音と非舌面音の綴りが混在するようなものになることは考えにくいからである。重修の際の訂正に関しては、前章で見た通り、文体的な問題とともに名前の表記は極めて重視されていたものと考ええる。順治本にみられた同一名に対する混在した書き方が規範に従って統一されるさまは、先に述べたように乾隆年間の『満洲實録』で具現すると考える。

こうした理由により、筆者は十七世紀前期に最初の編纂がなされた段階ですでに舌面音化した綴りになっていたと考えるが、それは漢語におけるこの現象の発生をそれ以前の時代に求めうることを意味するものである。この現象に関しては、花登(1993)に漢語資料からのアプローチがあり、それからこの時期に関する推測は十分に成立する余地があると考えることができる。

ところで、尖団の部分的合一ということを言語構造の面からみると、どう解釈されるであろうか。尖音の舌面音化が起きていない方言では、精母・清母・心母の三者がいずれも非舌面音のままであることを考えれば、これらが構造的に関係づけられていることは明らかであるが、本論文でみたように一部に先行する変化が起きたとする場合は、その構造に変化があったと考えるべきであろうか。筆者の考えによれば、そう考える必要はなく、同一の組に属する声母のひとつに変化が起きたならば、現象的にはどうであれ構造的には他の声母も同時に変化しているとみてよいと思う。つまりこの場合、理論的には精母と清母も舌面音化しており、非舌面音の音価は旧構造から話者毎に個別に借用されていると考える。変化の途上で一見以前とは異なる様相を呈することがあっても、それは構造自体の変貌によるものではなく、表層の現象面のこととみるのである。また、帯気性のみで対立する破擦音の精母・清母とは調音的に異なる摩擦音の心母だけが変化にあたって先立つことは、対立の仕方の質的な違いのために構造変化の伝播の速さに差が生じ、舌面音化を起す時期に先後のずれをもたらしたものと考ええる。詳細は山崎(1990b)参照。

結語

以上、満州語資料を利用して満州語と漢語の音韻の通時的変化に関する研究を行った。満州語の音韻に関しては、はじめに文語資料に注記のある特定の環境での音的変異の実体が母音の弱化であることを論じ、子音についての注記も同様の音声的変異であると解釈すべきことを述べた。その際、現代音にも言及してこの現象が文語のみに限られるものではないことを明らかにした。続いて、こうした音韻変異がひとつの母音に限らず、満州語の全ての母音についてもみられること、文語と現代語、文語と女真語の間においてもみられることを指摘し、これが満州祖語から継承されてきたこの言語の音韻的特徴とみるべきことを述べた。満州語と女真語との比較では、ツングース語あるいは蒙古語の資料を参照してどちらの形態が先行するものと考えられるかを明らかにした。漢語の音韻に関しては、扱う現象を近代音の下位区分となる牙音と喉音の舌面音化に限定し、満州語の初期資料が当時の音韻環境を反映する証拠として有効であることを、対音漢字の用字法と漢語を表音した満州語表記により論じ、さらに部分的な尖団の合一を反映すると思われる現象があることを論じた。

このように、満州語研究ではその音韻構造全般に関わり愛新覚羅烏拉熙春(1992)などの近年のフィールドワークによる文語音・現代音の比較と通じる包括的研究であることに對し、漢語研究は特定の音韻変化に焦点をあてた個別的事象の研究と言える。こうした対照性は、緒言でも述べた満州語文献の資料的制約のためである。

対音資料は双方の言語の基本的な音韻構造が明らかであれば、言語の具体的状況を照らし出す手段として有効であり、おおいに言語研究者の興味を引くものである。しかし、厳密な言語学的分析によるものではなく、言語外的事情(例えば、避諱のための改字などで、それはそれとして研究価値のあるものと言える)に影響されることのある対音資料をナイーブに受け取ることは、常に危険であることも承知しておかねばならない。本研究はその点でいまだ完成の域にはほど遠く、可能性のうちのひとつを提示したところにとどまる。

文字を創り出したものは偉大な言語学者であると言われる。それは一般に話者の内省が必ずしも言語構造を忠実に反映するものではないにもかかわらず、全体的に文字にはまさにひとつの体系を構成し機能する一定の合理性がみられるためであろう。そして、対音資料を作成したものも、記述の初歩ともいえる音韻構造の分析と対照を彼らなりに行った点から、やはり言語研究者と関心を同じくするところがある。漢語音韻の研究に梵漢対音・蔵漢対音が有益であるように、漢語の周囲に起こり接触をした諸言語の対音資料の研究は、

その成立過程でのそれぞれの言語事情を反映する貴重な材料を提供するのである。

清朝では翻訳の必要と中国文化の精髓とも言うべき音韻学への憧憬からか、さかんに満漢対音資料が作られ、かつて「較漢文翻切尤精當」と誇った工夫は、十八世紀末に漢蒙蔵回の四言語との対音にまで及ぶ『御製五体清文鑑』へとたどりついた。こうした満州語と外国語との音韻対照は、満州族の漢化と共に実質的な価値を失い、満州語と漢語の対音も『対音字式』のような往時の実用的な意味はもはや存在しないが、これらの諸言語の通時の研究のための資料として利用できることは清朝が残した大きな遺産と言ってよいであろう。

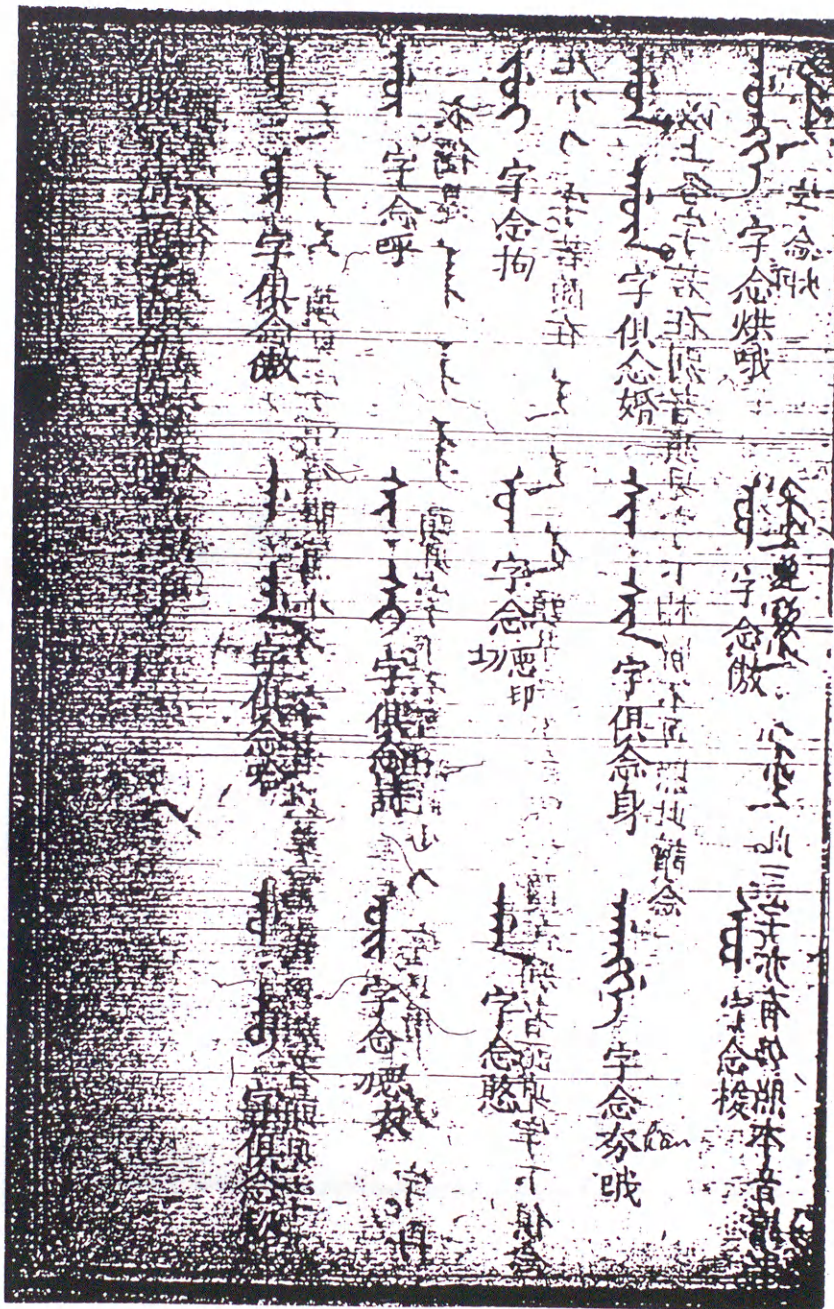
さて、最後に今後の満州語研究と漢語音韻特に舌面音化の研究について、筆者なりの見通しを述べて締めくくりとしたい。

近年では中国において満州語研究は「満学」と呼ばれ益々隆盛になっている。専門の学術誌『満語研究』は発刊以来すでに十年に及び、黒龍江省満語研究所や中央民族学院などの機関が満州語研究の中心地として国際学術交流の役割を果たし、さらに中国東北部の満州族居留地区の言語調査も趙(1989)や愛新覚羅(1992)というまとまった成果をみせるなど、現代語の調査もますます精緻かつ広範になってきている。また、中国では清朝檔案の整理研究が進んでおり、その成果が研究者に大きな便宜をもたらすことが期待される。今後は文献の分析と現代語の調査により文語方言の実体解明と現代語との照応が進めば、この言語の音韻史にさらに光が当てられることになろう。また、落合(1992)や寺村(1993)のような研究は、満漢対照資料を音韻以外の分野で利用する試みであり、この方面でも成果が期待できる。

他方、漢語の舌面音化研究では通時の研究のための文献の発掘と分析がさらに進められるであろうが、同時にこの現象の諸方言における通時の研究も求められるべきであろう。しかし、これは中国の韻書の尚古的性格と現実の音韻状況よりも規範となる音韻体系を希求する規範主義とにより、必ずしも容易とは考えられない。また、韻書・韻図はいずれも字音の異同を論じるもので実際の音価は直ちには明らかにならず、さらに字音と語音の相互の関連と乖離の問題は、河野六郎博士が説くように、ただ韻書に依っているだけでは非常に解明が困難である。ここに、韻書に比べてより実用的な見地から作成されることが多く、言語接触の産物とも言うべき対音資料の利用価値を認めることができる。満州語資料は十七世紀よりさかのぼることはできないが、他の言語の対音資料であればこの現象の反映とすべき記録を見いだせる可能性があり、太田(1980)はこうした先駆と見られる。漢字表音に基づいて再構する女真語音も、さらに資料的価値のある文献が発掘・解読され、

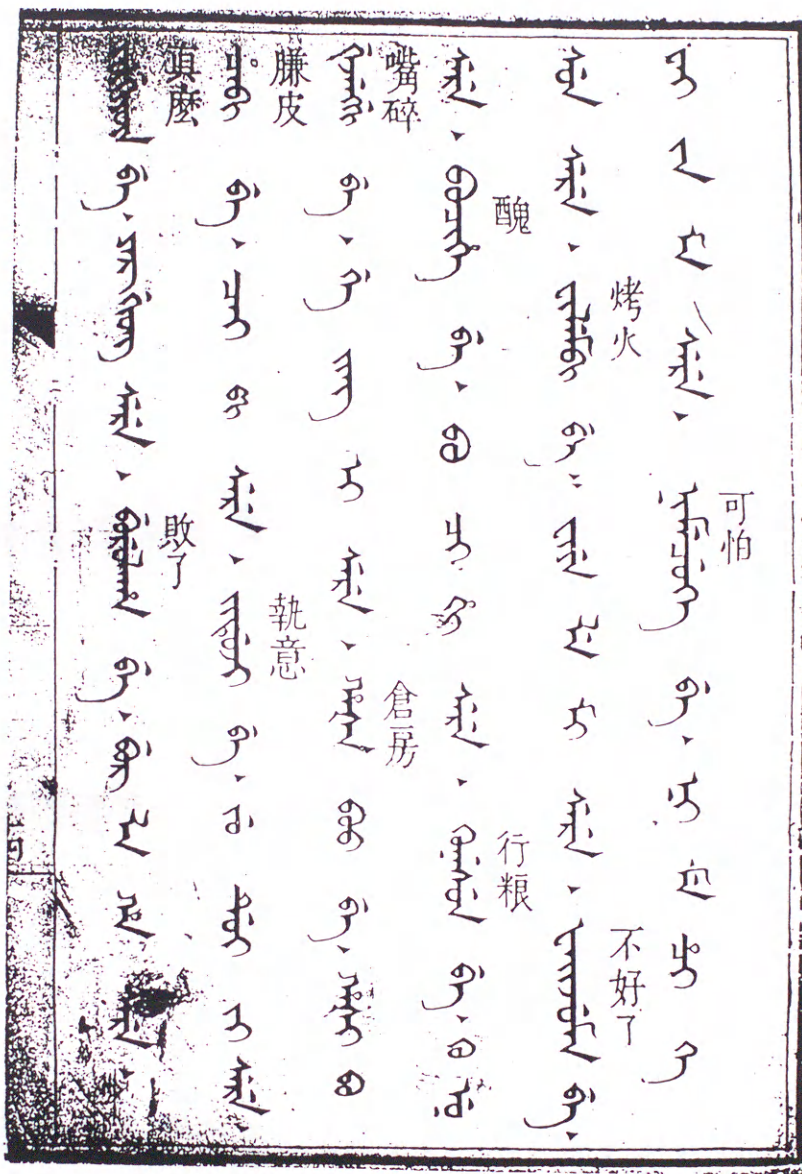
より精密な分析によって特に十二世紀の金代の音価が確定されるならば、今度は対音資料として利用することができるようになることが期待される。

なお、満州語資料を牙音喉音の舌面音化以外の現象に利用する試みには、山崎(1990b)がある。そこでは漢語諸方言間に通じる音韻構造の特徴を論じたものだが、問題提起に満漢対音資料を用いている。



付録 3

『清文啓蒙』 「異施清字」 の注記



付録 4

『清語易言』(14b)の音韻変異の記述

左から一行目に「burulaha (敗了) を bur la ha と言う」、二行目に「cabi (廉皮) を caipi と言う」、四行目に「kunesun (行糧) を ku nu sun と言う」、五行目に「filembi (烤火) を fiye le mi と言う」とある。

一十五名。位戎桑八十四名。阿吉格阿育什一百五十
四名。歹青火碩氣三十五名。什里格四名。尼馬兒克兒
恰二十名。馬吉他布能四百二十八名。德兒鄧他布能
四十一名。德兒格兒他布能七十四名。班珠兒他布能
二十五名。葉布達孤英一百五十一名。班底三十一名。
噶兒馬布尼什着千卓兒三人。共二十名。色冷六百五
十六名。項訥木他布能四百一十名。訥木什里達兒馬
什里共十七名。葉白達二十一。以上共五千二百八
十六名。以古路思夏布烏固山額真。俄木布出呼里九

上天篤生
皇上之心也。疏入
上曰。待朕思之。○丁亥。左翼固山額真公吳訥
格卒。○是日。編審內外喀喇沁蒙古壯丁。共
一萬六千九百五十三名。分爲十一旗。古魯
思轄布杜統一千五百名。萬旦衛徵一千六
百一十五名。衛審桑八十四名。阿濟格阿王
石一百五十四名。戴青和碩齊三十五名。西

萬旦衛徵一千六百一十五名。衛審桑八十四名。
阿濟格阿王石一百五十四名。代音和碩齊三十
五名。西里克四名。額馬兒克爾察二十名。馬濟塔
布囊四百二十八名。德爾多布囊四百一十一名。德
爾格爾塔布囊七十四名。巴珠爾塔布囊二十五
名。葉布舒古英一百五十一名。班第三十一名。噶
爾馬布尼思命千卓兒三人。共二十名。寒冷六百
五十六名。項訥木塔布囊四百一十名。訥木什里
達兒馬什里共十七名。葉白舒二十一。以上壯
丁共五千一百八十六名。以古路思夏布烏固山

付録 5

『舊滿洲檔』と『文皇帝実録』

ajige (左より三行目)

阿濟格(B) (右より二行目)

阿吉格(A) (右の行)

阿濟格(C) (右より八行目)

大清太宗應天興國弘德彰武寬溫仁聖睿孝文皇帝實錄卷之二十一

天聰九年。己亥十一月初一日。厄兒格木付塔布太俄東打喇太多內京三六八人自錦州逃來。○是日。賜淑泰太后貂皮鑲邊披領女衣一套。靴一雙。玄色狐皮一張。鍍金鑲玉寶石玲瓏鞍轡馬一匹。賜額勒克空戈落貂鼠鑲邊披領皮襖一件。貂皮襖一領。玄色狐皮帽一頂。靴一雙。玲瓏鞍轡馬一匹。

上與二大貝勒率眾貝勒及眾福金出城五里宰牛羊設

救恭校

天聰九年。己亥十一月初一日。丁未朔。額爾格木習塔布泰俄東達喇泰託內靜山等六合自錦州來歸。○是日。命蘇泰太后額爾克孔米爾額哲居孫島習爾哈地方。賜雕鞍馬。貂鑲女朝衣貂裘褲帽等物。

上與大貝勒代善率眾貝勒

大清太宗應天興國弘德彰武寬溫仁聖睿孝文皇帝實錄卷之二十六

天聰九年十一月丁未朔。額爾格木習塔布泰俄東達喇泰託內靜山等六人自錦州來歸。○是日。命蘇泰太后額爾克孔米爾額哲居孫島習爾哈地方。賜雕鞍馬。貂鑲女朝衣貂裘褲帽等物。

上與大貝勒代善率眾貝勒。皇諸福金士盛。京五里外大宴遣之。特本福甘代俱係土默特部落人。後屬察哈爾。居殺虎口地方。戍兵至。所來歸。因至是。獲將本福為己。等甲喇章京甘

付録 7

jing san (左の行)

静 山(B) (右より四行目)

京 三(A) (右より四行目)

静 山(C) (右より五行目)

大清太宗應天興國弘德彰武寬溫仁聖睿孝文皇帝實
錄卷之二十

天聰九年乙亥七月初三日。神漢兒國額勒克空戈落
部下。阿乞兔台石奏曰。我國主。天命既盡而歿。惟

上福大故我國全歸。

上善之。時台石又詰其本國衆大臣曰。汝等當汗在日。位
尊於我。及汗歿。遂棄汗之妻子先奔。何以謂之大臣衆
皆慙。

上見衆有慙色。乃勸止之。

秋恭校

天聰九年乙亥秋七月己酉朔○辛亥。察哈
爾國額爾克孔果爾額哲便臣阿齊圖太錫
至。奏言。我主無祿云。我主無所依賴。

皇上景福方昌。故舉國來歸。

上嘉之。阿齊圖太錫誦察哈爾諸大臣曰。汝諸
大臣向皆位尊於我。及君歿。遂不顧君之諸

大清太宗應天興國弘德彰武寬溫仁聖睿孝文皇帝實
錄功文皇帝實錄卷之二十四

天聰九年秋七月己酉朔

辛亥

察哈爾國額爾克孔果爾額哲便臣阿齊圖太師
至。奏言。我主無祿云。我主無所依賴。

皇上景福方昌。故代察哈爾舉國來歸。

上嘉之。阿齊圖太師又請伊察哈爾諸大臣曰。汝諸
大臣向皆位尊於我。及君歿。遂不顧君之諸子與
諸福登汝等皆棄之來歸。何以謂之大臣衆皆慙。

天聰九年秋七月己酉朔
辛亥
察哈爾國額爾克孔果爾額哲便臣阿齊圖太師
至。奏言。我主無祿云。我主無所依賴。
皇上景福方昌。故代察哈爾舉國來歸。
上嘉之。阿齊圖太師又請伊察哈爾諸大臣曰。汝諸
大臣向皆位尊於我。及君歿。遂不顧君之諸子與
諸福登汝等皆棄之來歸。何以謂之大臣衆皆慙。

付録 8

acitu taisi (左より四行目)

阿齊圖 太師(B) (右より五行目)

阿乞兔 台石(A) (右より四行目)

阿齊圖 太錫(C) (右より五行目)

付録10

- 107 -

文献

- 愛新覺羅烏拉熙春(1992)「満洲語語音研究」玄文社、京都。
- 愛新覺羅瀛生(1987)「談談満語的京語」『満語研究』第1期総4期, pp. 2-15.
- Amiot, M. (1787)*Grammaire tartare-mantchou*. Paris.
- 東寅三(1964)「普通話と山東方音の対応関係について」『中国語学』第137号, pp. 1-10.
- Benzing, J. (1956)*Die tungusischen Sprachen. Versuch einer vergleichenden Grammatik*. Wiesbaden.
- Böhtlingk, O. (1964)*Über die Sprache der Jakuten*. The Hague.
- Fuchs, W. (1936)*Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur*. Tokyo-Leipzig.
- 花登正宏(1979)「蒙古字韻ノート—とくに開口二等牙音の舌面音化について—」『中国語学』第226号, pp. 13-16.
- (1993)「牙音の舌面音化について」『中国士大夫の趣味と生活』(平成三年度・四年度科学研究費補助金 一般研究(B) 研究成果報告書)
- 服部四郎(1959)「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』第36号, pp. 40-54.
- (1986)「満州語音韻史のための一資料」『服部四郎論文集1 アルタイ諸言語の研究I』三省堂、東京。
- 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』第30号, pp. 1-29.
- Hauer, E(1952, 1955)*Handwörterbuch der Mandschusprache*. Wiesbaden.
- 早田輝洋(1985)「錫伯語調査ノートより」『九大言語学研究室報告』第6号, pp. 23-34.
- 池上二良(1969)「トゥングース語」『世界言語概説』下巻, 研究社、東京。
- (1986, 1987a, b)「満漢字清文啓蒙に於ける満州語音韻の考察(1)～(3)」『札幌大学女子短期大学部紀要』第8号, pp. 1-25, 第9号, pp. 1-24, 第10号, pp. 1-26.
- 今西春秋(1935a)「清三朝實録の編纂(上)」『史林』第20巻第3号, pp. 1-46.
- (1935b)「清三朝實録の編纂(下)」『史林』第20巻第4号, pp. 126-174.
- (1967a)「満文武皇帝實録の原典」『東方学紀要』第2号, pp. 274-290.
- 影印(1967b)「〔満文〕大清太祖武皇帝實録」『東方学紀要』第2号, pp. 173-273.
- 稲葉岩吉(1932)「塗改本清太祖實録残巻及び其年代」『青丘学叢』第10号, pp. 43-68.
- 岩田憲幸(1988)「『音韻逢源』の音系—現代北京語音との比較(上)—」『近畿大学教養

部研究紀要』第19卷第3号, pp. 29-53.

季永海・劉景憲・屈六生(1986)『滿語語法』民族出版社, 北京。

金東昭著黃有福訳(1990)『女真語・滿語研究』新世界出版社, 北京。

金光平・金啓琮(1980)『女真語言文字研究』文物出版社, 北京。

金啓琮(1984)『女真文辭典』文物出版社, 北京。

神田信夫・松村潤・岡田英弘譯註(1972, 1975)『舊滿洲檔 天聰九年1-2』東洋文庫叢刊第18, 東京。

清瀨義三郎則府(1973)「女真音再構成考」『言語研究』第64号, pp. 12-43.

Kiyose, G. N. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script. Reconstruction and Decipherment*. Horitsubunka-sha. Kyoto.

清瀨義三郎則府(1984)「滿洲語の口蓋化音 /š/ と š と」『言語研究』第86号, pp. 54-68.

河野六郎(1979)「滿洲國黑河地方に於ける滿洲語の一特色—朝鮮語及び滿洲語の比較研究の一報告—」『河野六郎著作集第1巻』平凡社、東京。

日下恒夫(1973)「中国近世北方音韻史の一問題—北京方言声類体系の成立—」『東京都立大学人文学報』第91号, pp. 67-84.

李樹蘭・仲謙・王慶豊(1986)『錫伯語口語研究』民族出版社, 北京。

李樹蘭・仲謙編著(1986)『錫伯語簡志』民族出版社, 北京。

劉景憲編(1985-1988)「自学滿語教材」『滿語研究』第1号-第6号, 黑龍江省滿語研究所編輯部。

馬学良・烏拉熙春(1993)「滿語支語言中の送気清擦音」『民族語文』6, pp. 4-9, 37.

滿文老檔 研究會譯註(1961)『滿文老檔 V 太宗2』東洋文庫, 東京。

松村潤(1971)「崇徳元年の滿文木牌について」『日本大学人文科学研究所研究紀要』第13号, pp. 125-140.

——(1972)「順治初纂清太宗実録について」『日本大学文理学部創立70周年記念論文集』日本大学文理学部人文科学研究所, 東京。

——(1992)「清太祖武皇帝実録考」(共同研究プロジェクト「東アジアの社会変容と国際環境」平成4年度第一回研究会 シンポジウム: 清史研究と滿文档案 口頭発表)

三田村泰助(1957)「近獲の滿文清太祖實録について」『立命館文学』第141号, pp. 36-49.

Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar*. Shanghai.

穆曄駿(1987)「巴拉語」『滿語研究』第2期総5期, pp. 2-31.

永島栄一郎(1941)「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史資料に就いて(続)」『言語研究』第9号, pp. 17-79.

中嶋幹起(1989)『山東方言基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京。

聶崇岐(1947)「滿官漢訳」『燕京学報』第32期, pp. 97-115.

寧繼福(1982)『中原音韻表稿』吉林文史出版社。

落合守和(1986)「《清漢対音字式》に反映した18世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』第21巻第2号, pp. 171-214.

——(1987)「《滿漢字清文啓蒙》に反映された18世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』第22巻第2号, pp. 111-151.

——(1989)「翻字翻刻《兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙》(乾隆26年, 東洋文庫所蔵)《言語文化接触に関する研究》第1号, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京。

——(1992)「《清文啓蒙》18世紀北方漢語の口語語彙」『東京都立大学人文学報』第234号, pp. 189-215.

太田斎(1980)「尖団小論」『東京都立大学人文学報』第140号, pp. 139-153.

尾崎雄二郎(1980)「大英博物館本蒙古字韻札記」『中国語音韻史の研究』創文社, 東京。

小沢重男(1983)『現代モンゴル語辞典』大学書林, 東京。

Poppe, N. (1960) *Vergleichende Grammatik der Altaischen Sprachen. Teil I*
Vergleichende Lautlehre. Wiesbaden.

——(1965) *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden.

斎藤孝滋(1992)「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象一言語内的・外的要因の観点から」『國語學』168, pp. 1-14.

讃井唯允(1980)「音韻逢源と等音」『東京都立大学人文学報』第140号, pp. 155-176.

Schmidt, P. (1931-32, 1933) "Chinesische Elemente im Mandschu. Mit Wörterverzeichnis". *Asia Major*. VII, pp. 573-628., VIII, pp. 233-276., pp. 353-436.

成百仁(1990)「初期滿州語諸辞典における言語学的研究」『アルタイ学報』第2号, pp. 27-69.

庄垣内正弘(1979)「『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」『言語研究』第75号, pp. 31-53.

田村實造・今西春秋・佐藤長(1966)『五體清文鑑譯解』京都大學文學部内陸アジア研究所。

寺村政男(1993)「繙訳作品より見た清代初期満州旗人の漢語能力について」日本中国語学

会第43回全国大会口頭発表

藤堂明保(1987a)「官話の成立過程から見た西儒耳目資」『藤堂明保中国語学論集』汲古

書院, 東京。

——(1987b)「ki- と tsi- の混同は18世紀に始まる」前掲書。

東洋文庫満文老檔 研究会(1965)『八旗通志列伝索引』東洋文庫満文老檔 研究会, 東京。

Цинциус, В. И. (1975, 1977) *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков*.

Ленинград.

烏拉熙春(1990)「満語元音的演變」『民族語文』4, pp. 57-65.

山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究

所, 東京。

山崎雅人(1990a)「『大清太宗文皇帝実録』の満洲語音訳漢字から見た漢語の牙音・喉音

の舌面音化について」『文化』第53巻第3/4号, pp. 19-37.

——(1990b)「音韻變化に反映した近代漢語の声母構造について」『中国語学』

第237号, pp. 33-42.

——(1990c)「『〔満文〕大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・

喉音の舌面音化について」『言語研究』第98号, pp. 66-85.

——(1992a)「満州語における母音 -i- の弱化と軟口蓋閉鎖音、口蓋垂閉鎖音及び両

唇閉鎖音の摩擦音化について」『東北大学言語学論集』第1号, pp. 55-70.

——(1992b) "On Some Problems of Transliteration of the Jurchen Language by

Chinese Characters". 『東北大学文学部日本語学科論集 一言語学・国語学・

日本語教育学一』第2号, pp. 123-137.

——(1993a)「満州語における変異形について」『東北大学言語学論集』第2号,

pp. 79-104.

——(1993b)「關於満語元音 i の弱化」『満語研究』第1期総第16期, pp. 1-4.

袁家驊 等著(1989)『漢語方言概要(第二版)』文字改革出版社, 北京。

Захаровъ, И. (1879) *Грамматика маньчжурскаго языка*. Санктпетербургъ.

詹伯慧(1985)『現代漢語方言』湖北教育出版社。

趙傑(1988)「錫伯語満語語音演變的比較」『民族語文』1, pp. 32-36.

——(1989)『現代滿語研究』民族出版社，北京。

——(1990)「錫伯語滿語語音演變的比較」『錫伯族研究』新疆人民出版社，烏魯木齊。

趙蔭棠(1937)「明清等韻之北音系統」『輔仁學誌』第6卷第1第2合期，pp. 65-128.

——(1956)『中原音韻研究』商務印書館、上海。

